三重県埋蔵文化財調査報告　94－4

三重県　上野市　市部

森脇遺跡（第三次）発掘調査報告

1991・3

三重県教育委員会
三重県埋蔵文化財センター

例　　言

1．本書は、平成２年度農業基盤設備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第４分冊として森脇遺跡の発掘調査結果をまとめたものである。

2．調査にかかる費用は、その一部を国庫補助金を得て県教育委員会が、他は県農林水産部の負担による。

3．調査は次の体制で行った。

調査主体　三重県教育委員会

調査担当　三重県埋蔵文化財センター

主事　森川常厚　　併任主事　川戸達也、小川専哉、東山則幸

調査協力　三重県農林水産部農村整備課

上野農林事務所

上野南部第二土地改良区及び地元各位

上野市教育委員会

財団法人三重県農業開発公社

主査　森岡茂　同補助員　岸森千賀子、町野華津子、宮本みさを

4．調査面積　4,000㎡

5．調査期間　平成２年８月23日～平成３年１月29日

6．本書の作成は、遺構、遺物の実測およびトレースは調査担当者の他に三重県埋蔵文化財センター管理指導課主事小林秀、同補助員新井ゆう子、奥山由美、北山美奈子、小池洋子、澁川ひとみ、西井恵子、松本春美、森田陽子が行い、写真、執筆、編集は森川常厚が行った。

7．本書に使用した事業計画図面は農林水産部の提供による。

8．本書で使用した遺構略記号は下記により、方位は国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とする北を用いた。

ＳＡ：柱列　ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＨ：竪穴住居

ＳＫ：土坑　ＳＸ：墓　ＳＺ：その他不明

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　　次

Ⅰ．前言 …… 1

Ⅱ．層序 …… 3

Ⅲ．遺構 …… 3
1．弥生時代の遺構 …… 3
2．古墳時代の遺構 …… 4
3．飛鳥時代の遺構 …… 13
4．奈良時代の遺構 …… 17
5．平安時代中期の遺構 …… 23
6．平安時代後期の遺構 …… 31
7．平安時代末期～鎌倉時代の遺構 …… 35

Ⅳ．遺物 …… 37
1．弥生時代の遺物 …… 37
2．古墳時代の遺物 …… 40
3．飛鳥時代の遺物 …… 46
4．奈良時代の遺物 …… 46
5．平安時代中期の遺物 …… 47
6．平安時代後期の遺物 …… 49
7．平安時代末期～鎌倉時代の遺物 …… 51
8．包含層出土の遺物 …… 51

Ⅴ．結語 …… 54
1．竪穴住居 …… 54
2．掘立柱建物 …… 55
3．黒色土器 …… 57

図 版 目 次

図版 1 …… 調査前風景
…… 東区全景
図版 2 …… 西区全景
…… SD301
図版 3 …… SD304調査風景
…… SH303
図版 4 …… SH307,SH308,SH309
…… SH312
図版 5 …… SH314
…… SH315,SK302
図版 6 …… SH320,SH321
…… SH325,SH326,SH327
図版 7 …… SH329
… SH330,SH331,SH333,SH334,SH335
図版 8 …… SB302
…… SB313
図版 9 …… SB318,SH316,SH317
…… SB321,SB322
図版 10 …… SB337,SB338
…… SB338,SB339,SB340,SB341,SB343
図版 11 …… SB311,SB312
… SB307,SB308,SB357,SA303,SA304,SA315
図版 12 …… SB329,SB330,SB331
…… SB345,SB346,SB347
図版 13 …… SB309
…… SB306,SA302
図版 14 …… SB333
…… SA312,SD331
図版 15 …… SK309,SD302,SK317,SK322
…… SX301,SH307
図版 16 …… 出土遺物
図版 17 …… 〃
図版 18 …… 〃
図版 19 …… 〃
図版 20 …… 〃
図版 21 …… 〃
図版 22 …… 〃
図版 23 …… 〃
図版 24 …… 〃

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図 …… 1
第2図 遺跡地形図 …… 1
第3図 調査区位置図 …… 2
第4図 西区土層断面図 …… 2
第5図 弥生時代・古墳時代遺構配置図 …… 4
第6図 SH328実測図 …… 5
第7図 SD301土層断面図 …… 5
第8図 SD304土層断面図 …… 5
第9図 SH301,SH302,SH305,SH306,
SK301実測図 … 5
第10図 SH303,SH324,SH329,SH333
～SH335,SK308,SK313,SK314実測図 … 6
第11図 SH307竈断面図 …… 7
第12図 SH307～SH309,SD313実測図 …… 7
第13図 SH310～SH314,SH319～SH323,SH325～
SH327,SH330,SH331,SK309,SD314実測図… 8
第14図 SH304,SH315,SH332,SH337,
SB303,SK302,SK305,SK316実測図 …… 10
第15図 SK305,SK309,SK317実測図 …… 11
第16図 SD302実測図 …… 12
第17図 飛鳥時代遺構配置図 …… 14
第18図 SH318,SB313～SB315,SB317,
SA307,SA311実測図 …… 15
第19図 SB301,SB302,SB304,SB305,
SB334,SA301実測図 …… 16
第20図 奈良時代遺構配置図 …… 17
第21図 SB316,SB327実測図 …… 18
第22図 SB318～SB323,SD324実測図 …… 19
第23図 SB328,SB336～SB343,SK310実測図 … 20

第24図　SB344,SB348,SA306,
SA309,SA310実測図 … 22
第25図　平安時代中期遺構配置図 …… 23
第26図　SB307～SB309,SB357,SA303,SA304,
SA313～SA315,SD303,SD314,SD315,SD317
～SD319,SD322断面図 …… 24
第27図　SB307～SB309,SB357,SA303,SA304
SA313～SA315,SK303,SK304,SD302,SD303,
SD313～SD323実測図 …… 25,26
第28図　SB329～SB331,SK311,SD326実測図 … 28
第29図　SB333,SB345,SB346,SB349,SB350
～SB352,SA308,SK312実測図 … 29
第30図　平安時代後期・平安時代末期
～鎌倉時代遺構配置図 … 31
第31図　SB306,SA302,SD310,SD311,
SX301実測図 … 32
第32図　SB324～SB326,SB335,SH316,
SH317,SK306,SK307,SD327実測図 … 33
第33図　SB310～SB312,SB332実測図 …… 34
第34図　SB353～SB356,SA312,SD331実測図 … 36
第35図　SD304第２,３層出土遺物実測図 …… 38
第36図　SD304第２,３層出土遺物実測図 …… 39
第37図　SD304第２層,SK312出土遺物実測図… 40
第38図　SD304第１層出土遺物実測図 …… 41
第39図　SD301出土遺物実測図 …… 42
第40図　古墳時代竪穴住居出土遺物実測図 … 43
第41図　古墳時代遺物実測図 …… 44
第42図　SD302出土遺物実測図 …… 45
第43図　飛鳥・奈良時代遺物実測図 …… 46
第44図　平安時代中期遺物実測図 …… 48
第45図　平安時代後期～鎌倉時代
遺物実測図 …… 50
第46図　包含層出土遺物実測図 …… 52
第47図　西区竪穴住居変遷図 …… 54
第48図　竪穴住居規模比較図 …… 54
第49図　掘立柱建物棟方向比較図 …… 55
第50図　掘立柱建物変遷図 …… 56
第51図　黒色土器法量比較図 …… 57
第52図　黒色土器図 …… 58

表　目　次

第１表　竪穴住居一覧表 …… 59
第２表　掘立柱建物一覧表 …… 59,60
第３表　出土遺物観察表 …… 61～76

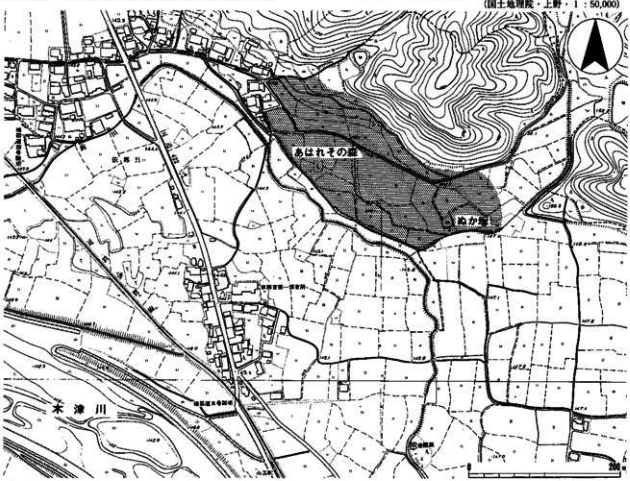
付　　図

付図　1 …… 西区平面図
付図　2 …… 東区平面図

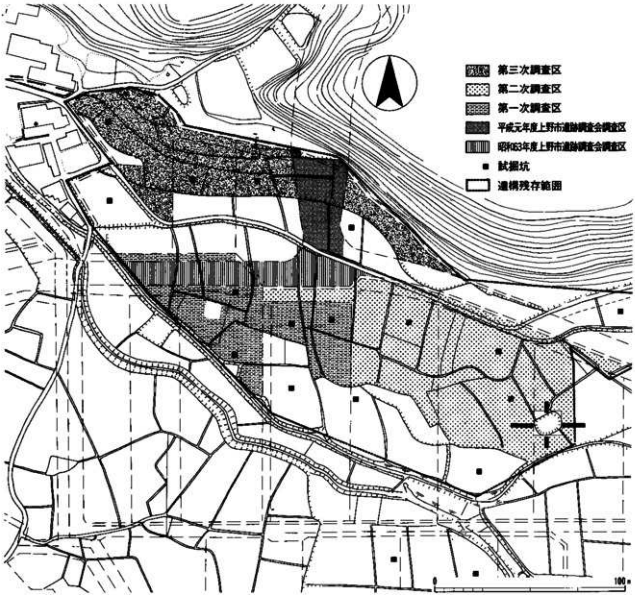
Ⅰ．前　　言

森脇遺跡の所在する上野市市部の水田が圃場整備されることになり、県教育委員会文化課では、該当地域の埋蔵文化財の有無を確認するため昭和63年１月、遺跡の分布調査を行った。森脇遺跡は既に登録されている周知の遺跡ではあるが、改めて現地で遺物の散布を確認し、さらに遺跡の概略を把握するため同年２月、試掘調査を行った。その結果、垂園森周囲では遺構は検出されず、あはれその森やぬか塚を含む16,000㎡に遺跡が存在することが判明した。県教育委員会文化課では、この結果をもとに県農林水産部農村整備課と遺跡保存についての協議を重ねたが盛土保存困難な部分11,300㎡を２ヶ年に分けて発掘調査を行うことになった。昭和63年度の第一次調査(4,300㎡)では、奈良時代の掘立柱建物群と「大井」、「千倉」等多数の墨書土器、円面硯、斎串、が出土し、この地方の有力者の屋敷跡ではないかと考えられた。平成元年度の第二次調査（7,000㎡）では、掘立柱建物群の一部に規則的な配列がみられ、飛鳥時代に遡るものもあることが確認され、古墳時代の井堰等も検出された。また、第一次調査の結果、

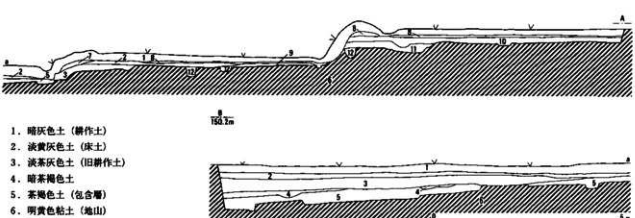
第１図　遺跡位置図　（１：100,000）
（国土地理院・上野・１：50,000）



第２図　遺跡地形図　（１：5,000）



第3図　調査区位置図　（1：2,000）



1．暗灰色土（耕作土）
2．淡黄灰色土（床土）
3．淡茶灰色土（旧耕作土）
4．暗茶褐色土
5．茶褐色土（包含層）
6．明黄色粘土（地山）
7．明茶灰色土
8．灰色土（床土）
9．明黄灰色土　10．黄灰色土（旧耕作土）　11．灰白色土　12．黒褐色土（遺構埋土）

第4図　西区土層断面図　（1：100）

遺跡はさらに山際に広がることが予想されたため、平成元年２月、再び試掘調査を実施し、さらに北側に遺跡範囲を13,000㎡追加した。そのうち盛土保存困難な4,000㎡を平成2年度に第三次調査として行うことになり、今回の調査となった。さらに、遺跡内の都市計画道路予定地では上野市遺跡調査会が昭和63年度と平成元年度に発掘調査を行っている。

第三次調査区は、北から南に傾斜する丘陵裾野に位置し、現況は水田である。標高は147～150mで南斜面のため水田は棚田となり、一筆ごとの比高差は最大１m以上もある。北側は山林に、西側は現集落に接し、東と南側は平野が広がり遠くを木津川が南から北東に流れている。また調査区の西側は市部と依那具の字界になっている。

Ⅱ．層　序

森脇遺跡は、前述のように丘陵の南側裾野に位置しているため、地山である明黄色粘土（第六層）は北から南に傾斜している。その比高差は、調査区の北端と南端では２mに及ぶ。後世、この様な傾斜地を水田に開墾したため水田一筆ごとに北側は削平され、南側は盛り土されている。このため削平の激しい北側では、第一層・暗灰色土（耕作土）、第二層・淡黄灰色土（床土）、第三層・淡茶灰色土（旧耕作土）で、地表からわずか20cmで地山に達する。一方南側では、第三層下に第四層・暗茶褐色土、第五層・茶褐色土（包含層）で、地山までは1.2mを測る。また、南端の一部では第四層と第五層の間に平安時代以降の包含層である黒褐色土が存在する。遺構検出は、基本的に第六層明黄色粘土上面で行ったが、一部第五層茶褐色土上面でも行った。

Ⅲ．遺　構

１．弥生時代の遺構

若干の竪穴住居、土坑、溝を検出した。SD301、SD304以外は小片の遺物の出土しかなく時期決定に決め手を欠く。しかし当遺跡からは古式土師器の出土はほとんどなく、弥生土器の大半は後期のものであることからこれらの遺構は弥生時代後期のものである可能性が大きい。

Ａ．竪穴住居

ＳＨ３２８（第６図）　西区中央で検出した。大半を開墾により削平されていて正確な規模や形態は不明であるが、一辺４～５mの方形を呈するものと思われる。古墳時代のものと比べやや丸味をもつ形態であり、周溝を巡らしている。両方から穿孔を試み貫通直後に破損したものと思われる６cmほどのサヌカイト塊が、埋土から出土した。

Ｂ．土坑

ＳＫ３１２（第29図）　SH328の南で検出した長辺75cm、短辺55cmの隅丸長方形を呈する小土坑である。しかし検出面からの深さは30cmと深く、砥石(50)が出土した。SH328との関連は不明である。

Ｃ．溝

ＳＤ３０１（第７図）　東区東端で検出した。幅３～3.5mで深さは検出面より0.5～１mを測る大溝である。断面形は壁の傾斜が緩やかな箱形である。調査区に沿って北西へ18mほどで突然止まる。南東は調査区外へ延びていくが、第二次調査ではこの溝の続きを検出しておらず、それまでで終わるのか丘陵に沿って北東へ回り込むように延びるのかのいずれかであろう。埋土は大きく３層に分かれるが、最上層の第１層はSB302, SH306を覆い、溝の南側へも広がっていて、この溝だけの埋土とは考えられない。最下層の第３層はすべて粘質の強い土で、完形の弥生時代後期の甕(74)と腐食の激しい板材が出土したほかはほとんど遺物を含んでいない。第2層には古墳時代後期の土器を多く含んでいるが、SH306との重複関係などから遅くとも６世紀初めまでにはほとんど埋まってしまったものと考えられる。

ＳＤ３０４（第８図）　西区西側で検出した幅９～15m、検出面からの深さ３mを測る大溝である。

調査区北側の谷からの延長上に位置するため、南方の木津川へ流れ込んでいた自然流路であろう。断面形は傾斜の緩やかなU字状であるが、自然流路にしては斜面が滑らかで、1mと2mほど下がった2ヶ所で弱いテラス状を呈する。自然流路に若干人工を加えて堀として機能させていた可能性も否定しきれない。

調査は、まず北端で幅3mのトレンチを設定し溝の完掘を行った。その結果、埋土は大きく3層に分かれ、最上の第1層と第2層は粘質土が中心、第3層は砂と木質沈澱層の互層となっている。第1層は古墳時代～平安時代までの遺物が混在し、第2層からは後期を中心に多量の弥生土器が出土した。第3層になると遺物の出土は激減する。このため第2層までを完掘し、第3層についてはトレンチ調査のみで終了した。これらの結果より、この溝は弥生時代中期後半から流れたり淀んだりしながら徐々に埋まってゆき、弥生時代後期のある時期には湿地状になるまで埋没してしまい、流路あるいは堀としての機能はまったく失われたものと考えられる。

SD320（第27図）　西区東部で検出した逆L字状に曲がる溝である。一部SD303に切られるが幅約80cm、深さは検出面から20cm前後である。南側ほど削平されて浅くなり南端は消滅して不明である。遺物は小片しか出土していないが方形周溝墓であるかもしれない。

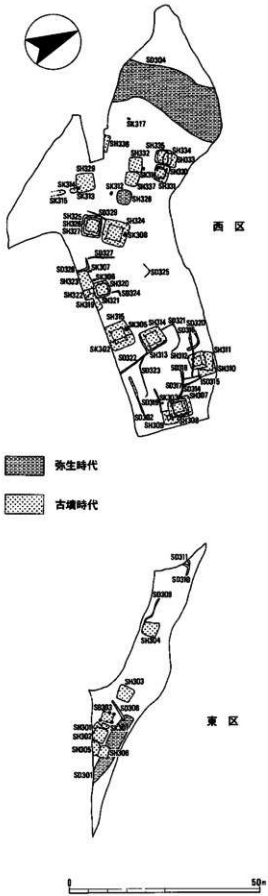
2．古墳時代の遺構

竪穴住居33棟を中心に土坑、溝などがある。しかし竪穴住居は残りが悪く、その大部分は周溝のみの検出である。このため竪穴住居とするのに根拠の乏しいものも多い。逆に、溝としたものの中には竪穴住居の周溝の一部であるものもあるかもしれない。

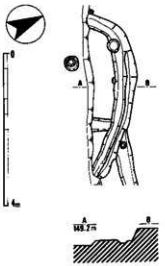
A．竪穴住居

SH301（第9図）　東区東部で検出した。周溝のみの検出であるが南西側は削平により周溝も消滅している。周溝幅は30cm～40cmで一辺約4.2mの方形に巡るものと考えられ、等高線に対して直交するように設定されている。主柱穴、竈は検出できなかった。

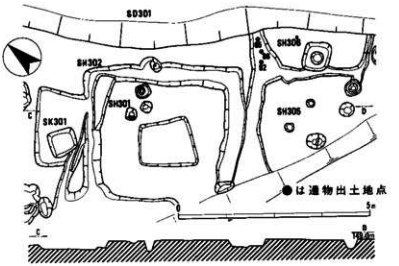
SH302（第9図）　SH301と重複して検出さ



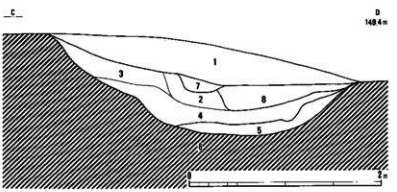
第5図　弥生時代・古墳時代遺構配置図　（1：1,000）



第6図　ＳＨ328実測図（１：100）

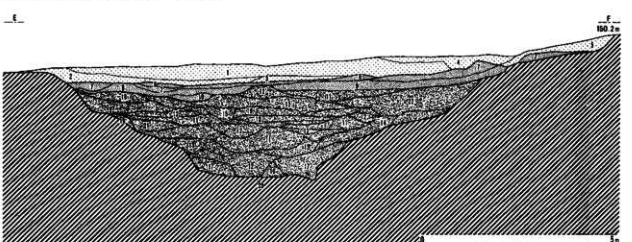


第9図　ＳＨ301，ＳＨ302，ＳＨ305，ＳＨ306，ＳＫ301実測図　（１：100）



1．暗赤灰色砂質土（第一層）
2．淡灰色土（第二層）
3．赤灰色砂質土（第三層）
4．淡灰色粘土（第三層）
5．青灰色粘土（第三層）
6．黄色～明青色粘土（地山）
7．暗赤灰色土（SB302柱穴埋土）
8．黒灰色粘土（SH306埋土）

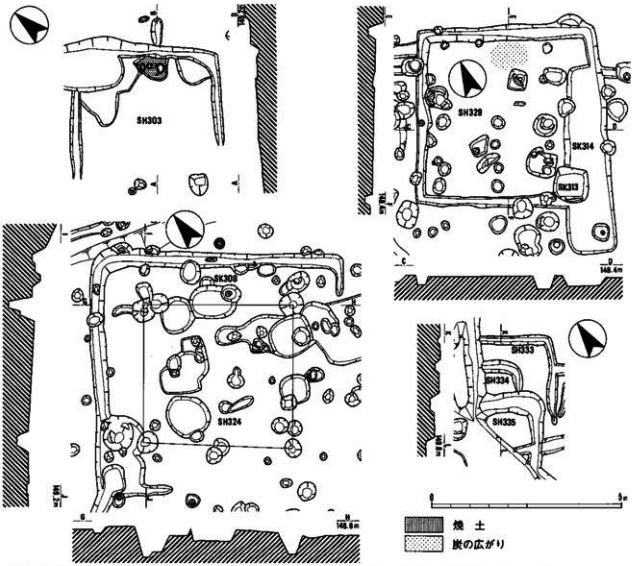
第7図　ＳＤ301土層断面図　（１：40）



第一層
第二層
第三層

1．黒灰色土
2．黒灰色粘土
3．暗緑茶色土
4．淡黒色砂質土
5．暗灰色粘土
6．白茶色粘土
7．暗茶色砂
8．暗灰茶色粘土
9．暗緑灰色粘土
10．暗茶色砂質土
11．茶色木質土
12．白茶色砂
13．11と12の混り
14．暗茶色木質土
15．12と14の混り
16．淡茶色砂質土
17．11と16の混り
18．黒茶色砂
19．黒緑色粘土
20．灰茶色木質土
21．12と緑灰色粘土の混り
22．12と淡茶色木質土の混り
23．黄色～明青色粘土（地山）

第8図　ＳＤ304土層断面図　（１：100）



第10図　ＳＨ303, ＳＨ324, ＳＨ329, ＳＨ333～ＳＨ335, ＳＫ308, ＳＫ313, ＳＫ314実測図　（１：100）

れた。方向がやや異なるものの同じ場所で同様な規模であるためSH301とは建て替えの関係にあるものと考えられる。埋土の観察によりSH301を切ることがわかり、南西側の周溝の南肩、主柱穴、竈はいずれも検出できない。

SH303（第10図）　東区中央で検出した。南西側は削平により消滅しているが、一辺約４ｍの方形を呈するものと思われ、やはり等高線に直交するように設定されている。北東辺の中央に焼土があり、このあたりに竈があったものと推定される。さらに、周溝の外側にこれと直交する小さな溝があるが、竈の煙出しの痕跡と考えられる。

SH305（第９図）　周溝のみの検出であるが、南東側は削平され南西側は調査区外、北東側はSH306に切られるなどその検出状態は劣悪である。しかも主柱穴、竈とも検出されず竪穴住居とするに疑問も多いが、一辺約３ｍの方形を呈するものと推定した。SH302とも重複するがその切り合いは不明である。

SH306（第９図）　東区南部で検出した。周溝のみの検出であり竪穴住居とする根拠に乏しい。南東側はSH305を切り、北側半分はSD301と重複する。当初SD301の第２層との切り合いが不明であったが、SD301の土層観察の結果、第２層を切ることがわかった。その結果3.2ｍ×2.9ｍのやや長方形を呈する。周溝の西側角で土師器椀(85)と須恵器杯(92)が正立状態、土師器甕(88)が倒立状態で出土した。埋納されたものであるかも知れないが確証はない。

SH309（第12図）　西区東端で検出した。SH308に切られるが床面が深いため四方の壁は残存していた。3.7ｍ×3.8ｍのほぼ正方形を呈し、南側

の周溝は検出できなかったが、本来は四周に巡っていたものと思われる。4基の主柱穴を検出したが、柱間は1.4m～1.1mで歪みが激しい。竈、焼土等は検出できなかった。

SH310（第13図）　西区北東部で検出した。大部分をSH311に切られ北、東、西側で周溝の一部を検出しただけだが、一辺約4.9mの方形を呈するものと思われる。東側の周溝はそのまま南へ延びてSD314となり、排水溝として機能していたものと考えられる。堰土には炭を多く含んでいた。

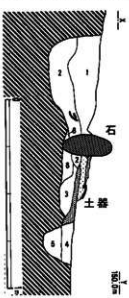
SH324（第10図）　西区中央で検出した。壁、竈と南側の周溝は削平され検出できなかったが、6.6m×6.5mのほぼ正方形を呈する比較的規模の大きなものである。主柱穴も直径50cm内外、柱間3.9m前後で他のものより大規模である。周溝の南西角から南へSD329が延び、排水溝として機能していたものと思われる。西側の周溝から土師器椀8個(93)～(100)、高杯1個(102)がほぼ完形で出土した。その状況はあたかも正立状態で並べられたかのようなものだった。また、住居跡内北側に重複する小土坑SK308からも土師器の椀（128）がほぼ完形で出土しており、この住居跡に伴うものであるかも知れない。

SH329（第10図）　西区西部で検出した。一辺4.8mの正方形を呈するが、北壁だけが残存し他は周溝のみの検出である。SK313, 314に切られるが、SK313については、この住居跡に伴うことも考えられる。主柱穴、竈は検出できなかったが、北側中央で炭の広がりを検出した。おそらくこの辺りに竈があったものと思われる。

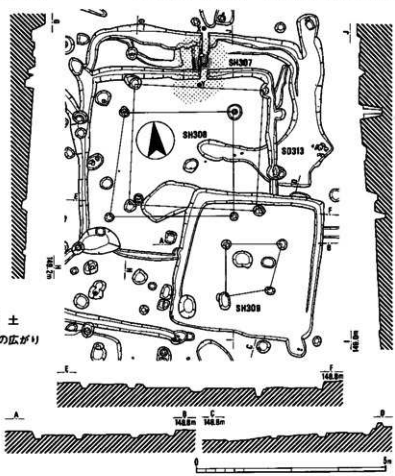
SH333, 334, 335（第10図）　削平、攪乱のため残存率が極めて悪く、竪穴住居とする模拠に乏しいが、それぞれ建て替えの関係にある住居跡の一部と考えられる。SH335のみ壁が残存しているが、他は周溝のみの検出である。建て替え順は不明である。

SH336　西区西部で検出した。方形を呈するものと思われるが大半は調査区外になりその規模は不明である。周溝に重複が認められることにより、同一場所で建て替えられている可能性がある。

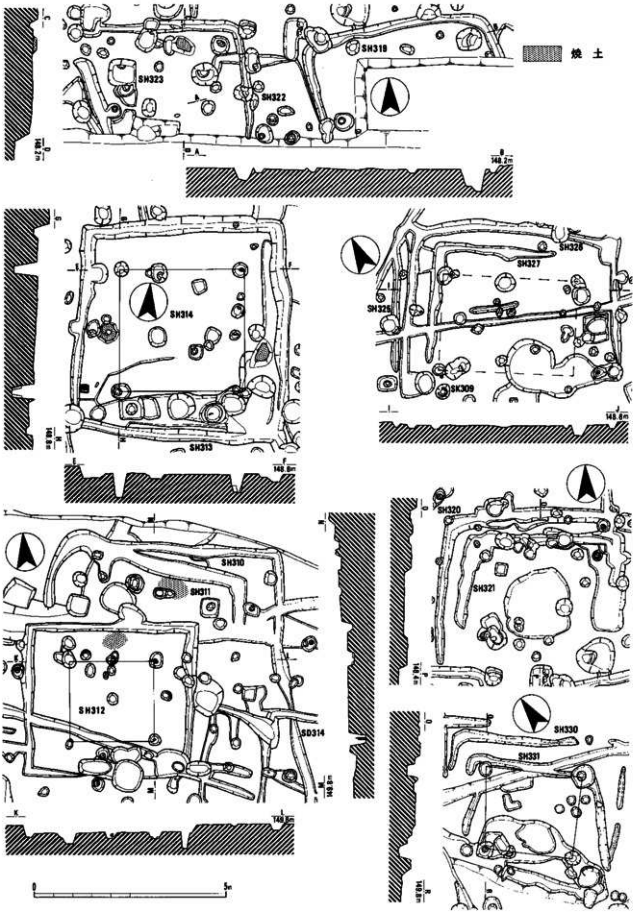
SH307（第12図）　西区東端で検出した。建



第11図　ＳＨ307竈断面図　（1：20）



第12図　ＳＨ307～ＳＨ309, ＳＤ313実測図　（1：100）



第13図　ＳＨ310～ＳＨ314，ＳＨ319～ＳＨ323，ＳＨ325～ＳＨ327，ＳＨ330，ＳＨ331，ＳＫ309，ＳＤ314実測図　（1：100）

て替えの関係にあるSH308に切られるため北側の一部しか残存していないが、一辺約5.7mの正方形を呈するものと考えられる。4基の主柱穴は柱間3.35m×3.2mで東西がやや広い。北辺中央で竈を検出した。竈本体は破壊されているが、支柱石は原位置を保っている。支柱石の南側は厚さ2cmほどのよく焼きしまった焼土があり、その周囲には炭が広がっていた。

SH308（第12図）　南側は削平のため周溝のみの検出になったが5.2m×5.1mのほぼ正方形を呈する。SH307とは建て替えの関係にあり規模をやや縮小して建て替えられたものである。北辺中央に炭の広がりが認められSH307と同様な位置に竈が設置されていたものと推定される。主柱穴は4基あり、柱間は2.75m×3.25mでやや歪む。

SH313，314（第13図）　西区東部で検出した。北壁のみ残存し他は周溝による検出である。建て替えの関係にあり、SH313→SH314の順である。SH313は5.5m×5.9m、SH314は5.3m×5.5mの正方形に近い平面形であり、SH314はやや縮小されて建て替えられたものである。しかし、主柱穴には重複が認められず、そのままSH314に再利用されたのかもしれない。焼土は東西2ヶ所に認められその絶対高はほぼ同じである。東側のものが残りが良好であることから、SH313では西側に竈が設置されていたが建て替えの際に東側へ移されたものであると解釈した。南東角からSD322が南へ延びる。この住居の排水溝として利用されていたものであろう。SD322には重複が認められ、建て替えの際に掘り直されたものと考えられる。

SH319（第13図）　西区中央南端で検出した。大部分が調査区外であるが、一辺約5.2mの方形を呈するものと思われる。壁際には他のものと同様に周溝が掘られている。

SH320（第13図）　西区中央南側で検出した。南側は削平のため消滅しているが一辺4.6mの方形を呈するものと思われる。SH321とは建て替えの関係にあるものと考えられる。切り合いが不明確であったがSH321を拡張して建て替えたものだろう。周溝には一部重複が認められSH320自体も同規模で建て替えられている可能性がある。

SH321（第13図）　SH320と重複して検出され、前述のように建て替えの関係にあるものと考えられる。やはり南側は削平のため消滅している。

SH322（第13図）　SH323に切られるが周溝が残存しており一辺2.7mの方形を呈する。竪穴住居とするには非常に小規模でしかもその根拠に乏しいが、周溝が巡ることからここで報告することにした。

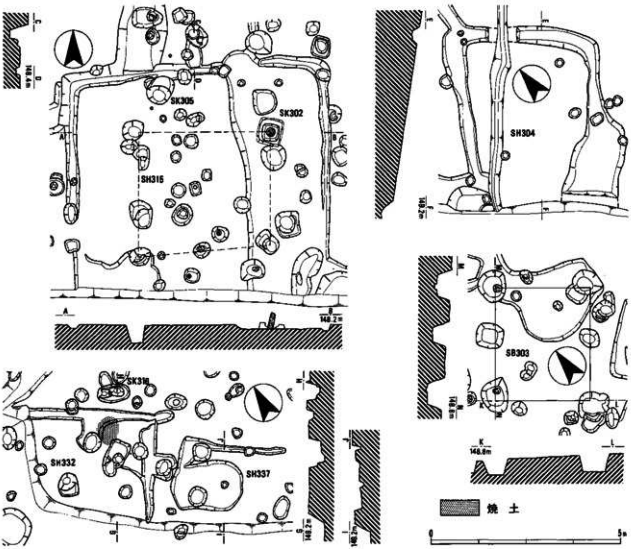
SH325，326，327（第13図）　西区中央で検出した。ほとんどが周溝のみの検出であり、その残存率も低い。それぞれ建て替えの関係にあるものと思われるがSH325→SH326の順がわかるだけである。もっとも残りのよいSH326では5.7m×4.6mの東西に長い長方形を呈し、他のものもこれとよく似た規模であろう。SH325かSH326に伴う主柱穴と思われる柱穴があるが南東側のものが検出できず、その確証はない。

SH330（第13図）　西区北西部で検出した。主柱穴と周溝のみの検出であるが、周溝は途切れ途切れの検出であり、南側は開墾によって完全に削り取られている。一辺約4.7mの方形を呈するものと考えられ、主柱穴間は2.5m～2.1mでやや歪む。SH331とは建て替えの関係にあるものと思われSH330→SH331の順である。

SH331（第13図）　周溝のみの検出であり、前述のようにSH330とは建て替えの関係にある。規模はやや小さく一辺約3.7mの方形を呈するものと思われるが、その平面形はやや台形状に歪む。

SH311（第13図）　西区北東部で検出したが北側の一部が残存しているだけである。SD303に切られ、さらにその南側は水田開墾が床面に及んでいるため消滅している。このためにSH312との前後関係は不明である。四周に周溝を巡らせていたものと思われ、北側中央に竈跡と思われる焼土がある。埋土には炭を多く含んでいた。

SH312（第13図）　SH311と重複して検出されたが床面高がSH311より低く設定されているため水田開墾から免れ、当遺跡では比較的残りのよいものである。しかし南側の壁は削平され周溝のみの検出となっている。4.5m×4.1mの若干東西が長い長方形を呈し、主柱穴の柱間は2.2m×2.1mである。北側中央に竈跡と思われる焼土があり、埋土には炭



第14図　ＳＨ304, ＳＨ315, ＳＨ332, ＳＨ337, ＳＢ303, ＳＫ302, ＳＫ305, ＳＫ316実測図　（１：100）

を多く含んでいた。

ＳＨ３１５（第14図）　西区中央南側で検出した。南端は調査区外であるが一辺７ｍの方形を呈するものと思われ、当遺跡最大規模である。四周に周溝が設けられており、主柱穴は北東のものがSB307の柱穴と重複する。しかしSB307の柱穴は上層の検出であり、他のものの深さから考えてSB307の柱穴の下に残存するはずである。しかし調査の結果、SB307の柱穴の下は地山となり主柱穴を検出できなかった。このために他の３基の柱穴も主柱穴と確定するに至らない。竈や焼土は検出できなかったが、北壁中央にこれと直交する細い溝が70cmほど北に延びる。これを煙り出しと考えればこのあたりに竈が設置されていたことになる。また、近くには完形の須恵器蓋(133)が出土したSK305があり、時期差がないためこの住居跡に伴う可能性もある。

ＳＨ３２３（第13図）　西区中央南端で検出した。周溝のみの検出であり、南側は調査区外へ、西側は周溝さえも検出できず、その規模は不明である。北側のやや東よりに焼土があり竈の位置を示すものと考えられる。

ＳＨ３３２（第14図）　西区北西部で検出した。大半は削平され全体の規模は不明であるが方形を呈するものと思われる。四周には周溝が巡るものと思われ、北壁やや東よりに焼土があり竈の位置を示すものと考えられる。

ＳＨ３０４（第14図）　東区中央で検出した。周溝のみの検出である。検出面は南に向かって急傾斜しているにもかかわらず、周溝は消滅することなく３ｍ以上南へ検出できた。このことにより南へ行くほど非常に深くなる周溝を掘らない限り床面も南へ向かって急傾斜していたことになり、住居跡とする

に疑問である。しかしSH303と同様に、等高線に対し直交するように設定されていることから一応一辺3.8mの方形竪穴住居としておく。

SH337（第14図）　西区北西部で検出した。削平により大半が消滅しており全体の規模は不明であるが方形を呈するものと思われる。出土遺物も土師器の小片のみのため詳細な時期は不明であるが、おそらく他の竪穴住居と同様に古墳時代に属するものと思われる。

B. 掘立柱建物

SB303（第14図）　東区東部で検出した。2間×1間の南北棟である。直径70cm前後の円形または方形の掘形を持ち、検出面より40cm～50cmまでしっかり掘り下げられている。柱穴底の一部がやや下がっているものみられ、おそらく柱の沈下を示すものと考えられる。隣接するSH302と方向が揃うが、出土遺物に時期差がありSH302より後出のものである。

C. 土坑

SK302（第14図）　西区中央南端のSH315内で検出した。SH315の東側1mほどを10cmほど掘り下げた状態であるためSH315と一体のものと考えたが、出土土器(116)がやや古相を帯びるため、ここでは別遺構としておく。

SK309（第15図）　SH326の南で検出した。出土須恵器の比較からSH326に先行するものである。直径40cm、検出面からの深さ56cmの柱穴状の小土坑であるが、深さ30cmで直径20cmほどに縮小する。深さ20cmの地点からほぼ完形の須恵器(132)が倒立状態で出土した。埋納されたものらしいが、比較的大きな別個体の破片も混入している。

SK313（第10図）　SH329の南東隅で検出した。SH329を切り、SK314に切られる。一辺約90cmの方形を呈し、深さは検出面から70cmと深い。埋土には炭を多く含んでいる。遺物は土師器の小片しか出土せず、この時代に属するという確証はない。

SK314（第10図）　SH329の東側に重複して検出された。SH329, SK313を切るが明確ではない。幅1.2m、長さ5mの溝状を呈し深さは検出面から8cmと浅い。断面形はU字形に近く、SK315と一連のものであるかも知れない。

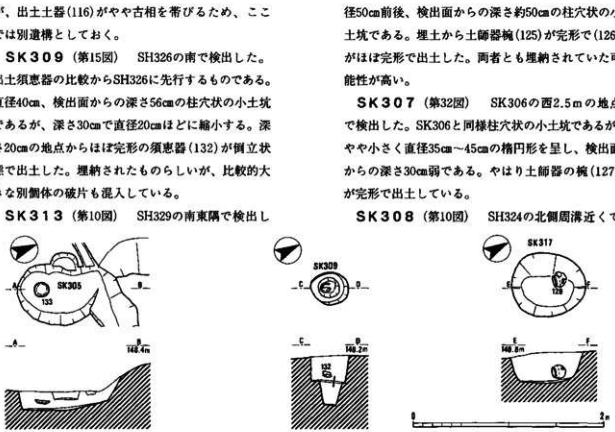
SK315　SK314の南に70cmの間隔をおいて検出した。南側は開墾により削平され消滅しているが、SK314とほぼ同様な形態である。しかし深さは南へ行くほど階段状に深くなり、最深部では検出面から35cmに達する。

SK301（第9図）　長辺2m、短辺1.5mの長方形の土坑である。深さは検出面より11cmと浅く、底は平である。SH301, SH302との切り合いは不明であるが、出土した須恵器はSH302のものと若干時期差があり、SH301, SH302の付属施設とは考えがたく後出のものである。

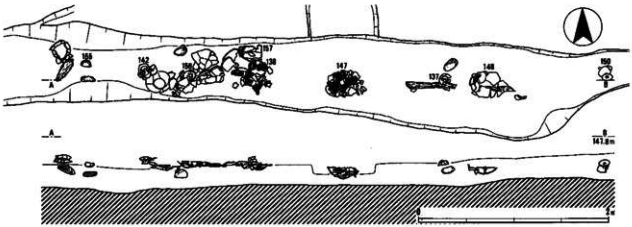
SK306（第32図）　西区中央で検出した。直径50cm前後、検出面からの深さ約50cmの柱穴状の小土坑である。埋土から土師器椀(125)が完形で(126)がほぼ完形で出土した。両者とも埋納されていた可能性が高い。

SK307（第32図）　SK306の西2.5mの地点で検出した。SK306と同様柱穴状の小土坑であるが、やや小さく直径35cm～45cmの楕円形を呈し、検出面からの深さ30cm弱である。やはり土師器の椀(127)が完形で出土している。

SK308（第10図）　SH324の北側周溝近くで



第15図　SK305, SK309, SK317実測図　(1：40)



第16図　ＳＤ302実測図　（1：40）

検出した、直径35cm、検出面からの深さ約20cmの柱・穴状の小土坑である。ここからも土師器椀(128)が完形で出土している。SH324の周溝からも完形で多数出土しており、これと関連するものかも知れない。

ＳＫ３１６（第14図）　SH322の北側で検出した。直径45cm～20cmの楕円形を呈し、深さは検出面から34cmの柱穴状の小土坑である。有孔円盤(131)が出土した。

ＳＫ３０５（第15図）　SH315の北壁中央で検出した。SH315に切られるためこれよりやや先行するものか、または出土遺物に時期差がなくSH315に関連するものである。長径90cm、短径70cmの楕円形を呈し、検出面からの深さは20cm弱である。底から10cmほど浮いた状態で須恵器蓋(133)が倒立状態で完形で出土した。埋納されたものと考えられるが、埋土には他に特徴的なことは認められない。

ＳＫ３１７（第15図）　西区西部で検出した。直径77cm～69cmの楕円形で、深さは検出面から30cmである。埋土には炭を多く含んでおり、土師器甕(129)が底から４cmほど浮いて横倒しの状態で出土した。他にも土師器甕片が多数出土したが完形近く復元できるものはない。

ＳＫ３０３（第27図）　西区東部で検出した。直径40cmの柱穴状の小土坑で、深さは検出面から５cmと浅い。ミニチュア土器(130)がほぼ完形で出土した。

Ｄ．溝

ＳＤ３０２（第16図）　西区南東部を東西に延びる全長13mの溝である。東端から20mほどは幅20cm～30cmであるが、それ以西は70cm～１mと急に広くなり、さらに８m西進したところで突然止まる。埋土には炭を含んでおり、西半分の幅の広くなる部分から多量の遺物が出土した。これらの遺物は、底から６cmほど浮いたものから約20cm浮いたものまでその出土高は様々である。これらの遺物は、溝としての機能を消失した後投棄されたものと考えるが、完形や完形近くに接合できるものも多くあり、単なる投棄ではないのかも知れない。また、溝の形態から排水溝としての機能はないものと考えられ、区画溝とするにも不十分で、その性格については不明である。

ＳＤ３１４（第26,27図）　SH310の東側の周溝からそのままま～すて南へ延び、南端はSD318に切られ消滅している。SH310の排水溝であろう。

ＳＤ３２８　西区中央南側で検出した逆Ｌ字状に延びる溝である。幅50cm、検出面からの深さ10cm以下で、南端は調査区外へ延びている。竪穴住居の周溝であるかも知れない。

ＳＤ３２９　SH324の南東角から南へ延びる溝である。幅20cm～30cm、検出面からの深さ15cmほどで、5.5m南の地点で消滅している。SH324の排水溝と考えられる。

ＳＤ３０６　東区東部で検出した。幅50cm、検出面からの深さ30cmで、細いながらもしっかりした溝である。西端は削平され消滅している。東端はSD301第２層を切るが、重複はわずかで突然止まる。埋土は黒灰色でSD301第2層とは明らかに異なる。

ＳＤ３２２（第26,27図）　SH313,314の周溝南東角から南へ延びる溝である。幅60cm、検出面からの深さ10cm～30cmのしっかりした溝である。底部に段差があり２本の溝が重複しているものと考えられる。SH313,314の排水溝として機能し、この住居の

建て替えに伴って掘り直されたものであろう。

SD316（第27図）　西区北部を東西に延びる幅40cm～25cm、検出面からの深さ8cm前後の小溝である。約12mを確認したが、溝の両端は消滅しており、その全長、機能は不明である。SH312を切りこの時代より新しいものである可能性がある。

SD321（第27図）　西区東部で検出した。幅20cm、検出面からの深さ10cm前後の小溝である。一見竪穴住居の周溝のような形態だが、北東角は直角に曲がらず面取りされたような形態を呈する。SH314との切り合いは不明だが、出土遺物により後出のものであることがわかる。SD323とは時期、形態ともよく似ているため、これとつながっていた可能性もある。

SD323（第27図）　西区南東部で検出した。SD322との切り合いは不明であるが、出土遺物によりSD322より後出のものであろう。前述したのようにSD321とつながる可能性もある。南東へ2.5mのところで45°屈曲して東へ8mほど延び、南へ直角に曲がったところで消滅している。全体を通して幅25cm、検出面からの深さ10cmほどである。

SD324（第22図）　西区中央で検出した。SH320を切る幅25cm、検出面からの深さ10cm以下の直角に曲がる小溝である。竪穴住居周溝北西角であるかも知れない。

SD309　東区西部で検出した。大半をSD308に切られるが幅30cm内外の蛇行する小溝である。深さも検出面から10cm以内の浅いものである。排水溝であると思われるが詳細は不明である。

SD310（第31図）　東区西端で検出した。L字状に曲がる溝で、SD311を切る。幅30cm～50cm、検出面からの深さは20cm以内である。一部に重複が認められ、掘り直されているらしい。竪穴住居の周溝であるかも知れない。

SD311（第31図）　SD310と同様な規模のL字状に曲がる溝であるがSD310に東側を切られる。これも竪穴住居の周溝であるかも知れない。

SD315（第26,27図）　西区東部で検出した。幅20cm、検出面からの深さ約8cmの小溝で西に2.5mで南へ直角に曲がり7.5mいったところで消滅する。SD314,SD318に切られるが、その形態から竪穴住居の周溝と排水溝の残存であるかも知れない。

SD317（第26,27図）　西区東部で3.5mほど東へ延びたところで、緩やかに南へ曲がり消滅する溝である。幅30cm前後、検出面からの深さ10cmで、SH308,SD318,SD315,SD314を切り、この時代より新しいものである可能性がある。

SD318（第26,27図）　SD317と同様な形態の溝で、ほとんど重複して掘られている。SD318→SD317の順に掘り直されたものであろう。

SD319（第26,27図）　西区東部を東西に延びる溝である。両端は消滅しており全長は不明であるが3.5mほど検出できた。幅30cm、検出面からの深さ10cm～15cmの小溝である。しかし、その機能は不明で、しかも土師器の小片しか出土しておらず、この時代とする根拠にも乏しい。

SD325　西区中央で検出した逆L字状に曲がる溝である。幅20cm、検出面からの深さ10cm前後で竪穴住居の周溝である可能性もある。

SD327（第32図）　西区中央を南北に延びる幅30cm～40cm、検出面からの深さ10cm前後の小溝である。溝の北端は不定形な浅い土坑につながっている。これを竪穴住居の残存とみるならば、それから延びる排水溝と考えることも可能である。

3．飛鳥時代の遺構

掘立柱建物10棟を中心に、竪穴住居、柱列を検出した。掘立柱建物や柱列のほとんどは、古墳時代の竪穴住居と重複するため、柱穴内に古墳時代の須恵器が混入することが多く遺物の上からの時期決定が困難なものが多い。SB314,SB315,SB317,SB340,SA307,SA311は方向により判断し、SB301は、奈良時代でも前半に属すると思われるSB302に切られることから、この時代とした。

A．竪穴住居

SH318（第18図）　西区中央南端で検出した。ほとんど痕跡程度の残存であるが、周溝を一部確認できたため一辺5mの竪穴住居と考えた。須恵器長頸壺（158）が出土した。

B．掘立柱建物

SB301（第19図）　東区東端で検出した。SD301との重複や調査区端のため検出できなかった

柱穴もあり一応東西棟としておくが、南北棟であるかもしれない。柱掘形は一辺50～60cmの方形を呈し、直径20～30cmの柱痕跡を検出できたものもある。桁行の柱間は不等間であるが1.2m～1.55mと狭く、梁行はSB302に切られるものがある。

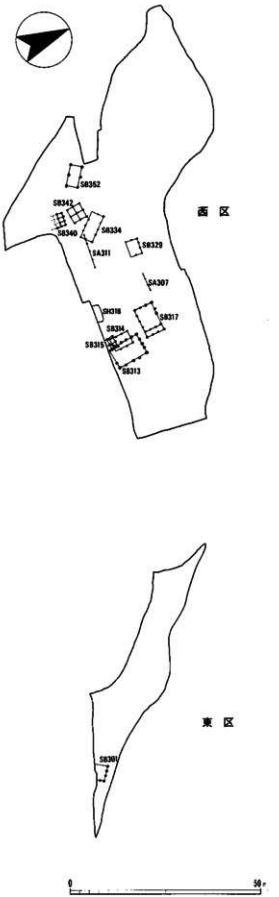
SB313（第18図）　西区南東部で検出した。桁行5間（8.25m）×梁行4間（5.85m）の南北棟で、今回調査の飛鳥時代の掘立柱建物の中では最大規模である。柱掘形は形の乱れたものもあるが、元は一辺60cm～70cmの方形を呈していたものと思われ、一部浅いものもあるが検出面からでも60cmほどしっかり掘り込まれている。梁行の西から2間目が1.35mと狭いほかは1.5m、桁行は1.65mのそれぞれ等間である。約33m西に離れた倉庫風建物SB342とは、方向が同じである。

SB314（第18図）　SB313の西側に重複する3間×2間の南北棟である。南東隅の柱穴が検出できず、さらに深さも様々であるため建物とするに疑問も多い。柱掘形は1基方形のものがあるものの、直径30cm～40cmの円形である。桁行、梁行とも等間で、SB313, SB315との前後関係は不明である。

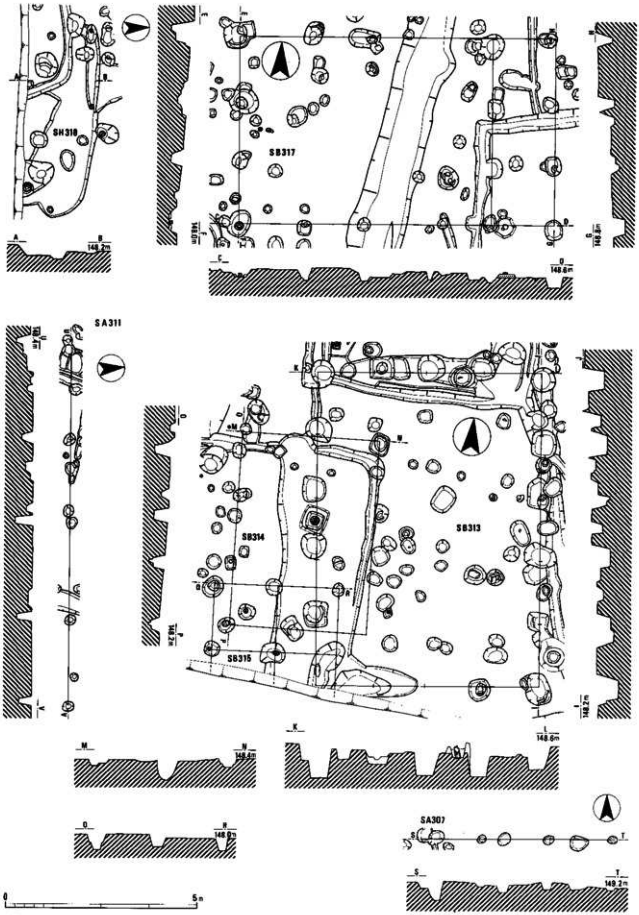
SB315（第18図）　SB314の南側に重複して検出された。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、2間以上×2間の総柱の南北棟である。梁行は1.65mの等間であるが、柱掘形は円形で直径30cm～60cmと様々である。

SB317（第18図）　西区中央で検出した。4間×3間の東西棟で東側に1間分の廂がつく。飛鳥時代のものではSB313に次ぐ規模である。柱掘形は一辺30cm～60cmの方形または円形で大きさ、形態とも様々である。しかし、柱間は桁行、梁行とも1.65mの等間である。掘形の底が直径20cm前後の円形にさらに落ち込むものが多く、柱の沈下した痕跡と考えられる。また、南西隅のものには柱が若干残存していた。側柱の一部が非常に小さいのは、この沈下部分のみ検出し得たものであろう。

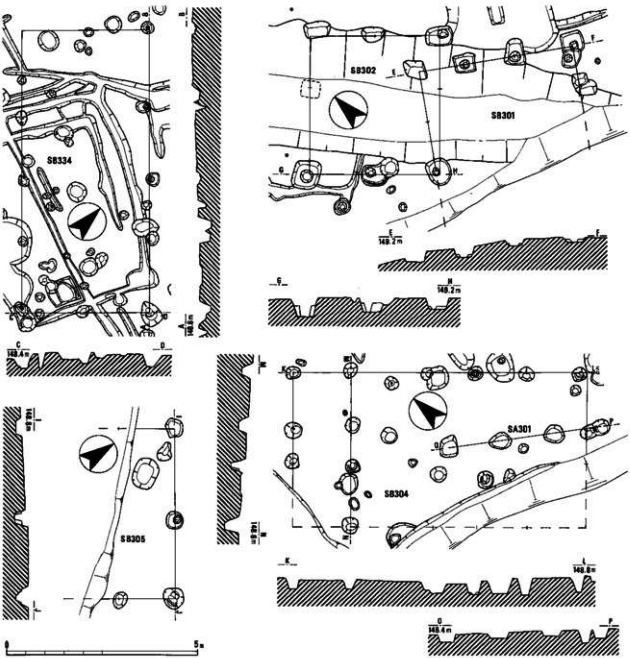
SB329（第28図）　西区中央で検出した。南側の側柱は削平のため検出できなかったが3間×2間の東西棟である。桁行の柱間は、東側のみ1.5mと広く、他は1.35m、梁行は1.6mの等間である。柱掘形は直径30cm前後の円形で、南へ9m離れたS



第17図　飛鳥時代遺構配置図　（1：1,000）



第18図　S H318, S B313, S B314, S B315, S B317, S A307, S A311実測図　(1：100)



第19図　ＳＢ301, ＳＢ302, ＳＢ304, ＳＢ305, ＳＢ334, ＳＡ301実測図　（1：100）

A311とは、方向をほぼ揃える。

ＳＢ３３４（第19図）　西区中央で検出した。4間×２間の南北棟である。桁行は不等間、梁行は1.65ｍの等間である。柱掘形は、直径30cm～40cmの円形で、底の一部が若干窪んだものが認められ、柱の位置を表すものと思われる。それによると直径15cmほどの柱であったようである。

ＳＢ３４０（第23図）　西区南西部で検出した。南側は水田開墾による削平のため消滅しており、全体の規模は不明であるが３間×２間以上の総柱の東西棟としておく。柱間は、桁行、梁行とも1.2ｍの等間で、掘形は直径50cmの円形を呈する。総柱であることや、柱間が狭いことから倉庫であったものと思われる。

ＳＢ３４２（第23図）　西区南西部で検出した２間×２間の総柱の東西棟である。倉庫風の建物であるが、柱間は桁行2.1ｍ、梁行1.9ｍでやや広い。掘形は直径50cm前後のほぼ円形を呈し、直径20cm～25cmの柱痕跡を確認できたものもある。

ＳＢ３５２（第29図）　西区西部で検出した２間

×1間の東西棟である。建物とするに疑問の多いものであるが、柱間はすべて3m、掘形は直径50cm～70cmと大きく、深さも検出面から60cm前後もあり他のものより極めて深い。そこで、これらを結んで建物と考えてみた。

C．柱列

SA307（第18図）　西区中央で検出した。方位に沿う3間の柱列である。柱間は1.7mの等間で、柱掘形は直径25cm前後の円形で浅い。

SA311（第18図）　北へ9m離れたSB329と方向を揃える4間の柱列である。柱掘形は直径30cm前後の円形を呈する小規模なものであるが、検出面から40cmほどしっかり掘り込まれている。

4．奈良時代の遺溝

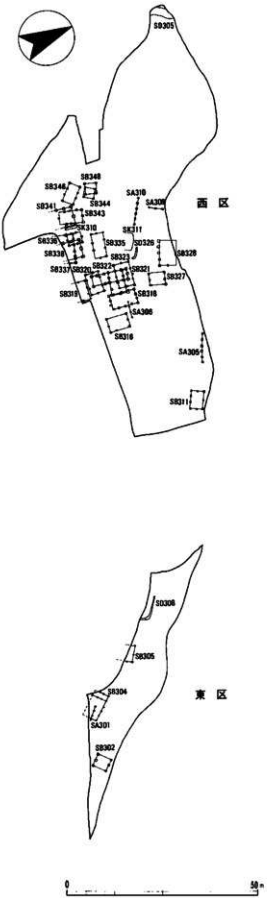
掘立柱建物22棟を中心に、柱列、土坑、溝を検出した。飛鳥時代と同様に、掘立柱建物、柱列の時期決定は困難を極め、SB311, SB318, SB319, SB320, SB322, SB327, SB328, SB336, SB337, SB343, SB346, とすべての柱列は、遺物による判断が不可能で、棟方向、柱間寸法、柱掘形の形態等を手がかりにこの時代のものとした。SB304, SB305は、これらの周囲の包含層遺物を頼りに判断したもので、この時代のものとする根拠に極めて乏しい。

A．掘立柱建物

SB302（第19図）　東区東端で検出した。2間×2間の南北棟である。SD301との重複のため側柱が検出できなかったが、SD301の土層観察時に柱掘形が確認され、そこから須恵器蓋(159)が出土した。これがSB302の側柱であることがわかったため桁行は2間の不等間であることが確認できた。梁行は1.7mの等間である。柱掘形は一辺70cmの方形を呈し、直径20～30cmの柱痕跡を確認できたものもある。SB301を切る。

SB304（第19図）　東区東部で検出した。調査区端であるため正確な規模は不明であるが、4間×3間の南北棟とした。桁行、梁行とも不等間で、掘形は直径40cm前後の円形を呈する。北側に1間分の廂がつき、北西角の柱穴からミニチュア土器(166)が出土した。

SB305（第19図）　東区中央で検出した。大



第20図　奈良時代遺構配置図　(1：1,000)

半は調査区外のため全体の規模は不明であるが2間以上×2間の南北棟と考えられる。柱掘形は一辺45㎝～50㎝の方形または楕円形を呈し、妻柱では直径20㎝の柱痕跡を確認した。

SB311（第33図）　西区東北端で検出した。東西棟と考えられるが、南の側柱列は3間であるのに対し、北側は2間の変則的な建物である。北側が調査区外に延び、梁行3間の南北棟になる可能性も十分にあるが、東西の中央の柱穴が他のものより浅く掘形も小さいことから、これを妻柱と考え東西棟とした。柱掘形は一辺50㎝～65㎝の方形を呈する比較的大形のもので、直径15㎝～20㎝の柱痕跡を確認できたものも多い。

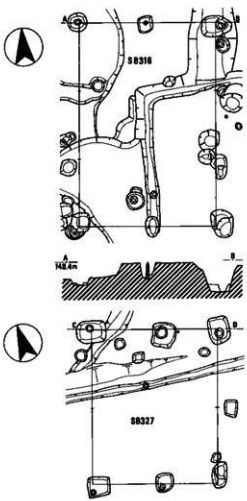
SB316（第21図）　西区中央で検出した。側柱がほとんど検出できなかったが3間×2間の南北棟になるものと考えられる。柱間は1.8mのそれぞれ等間になるものと推定され、西隣のSB318とは棟方向が同じである。柱掘形は、形の乱れたものもあるが、元は一辺40㎝～50㎝の方形であったものと思われ、北側妻柱には柱の一部が残存していた。それによると、柱は直径8㎝で掘形に比して意外に細く、5㎝ほど沈下していた。

SB318（第22図）　西区中央で検出した。南東角の柱穴が検出できなかったが4間×3間の南北棟になるものと思われる。柱間は桁行、梁行とも等間、掘形は、形の乱れたものもあるが50㎝～60㎝の方形を呈する。直径20㎝の柱痕跡を確認できたものも多い。柱穴から古墳時代の須恵器もかなり出土しており、古墳時代の建物である可能性も高い。しかし、SB320とは棟方向がちょうど直角に異なることから、同時に存在したものであろう。

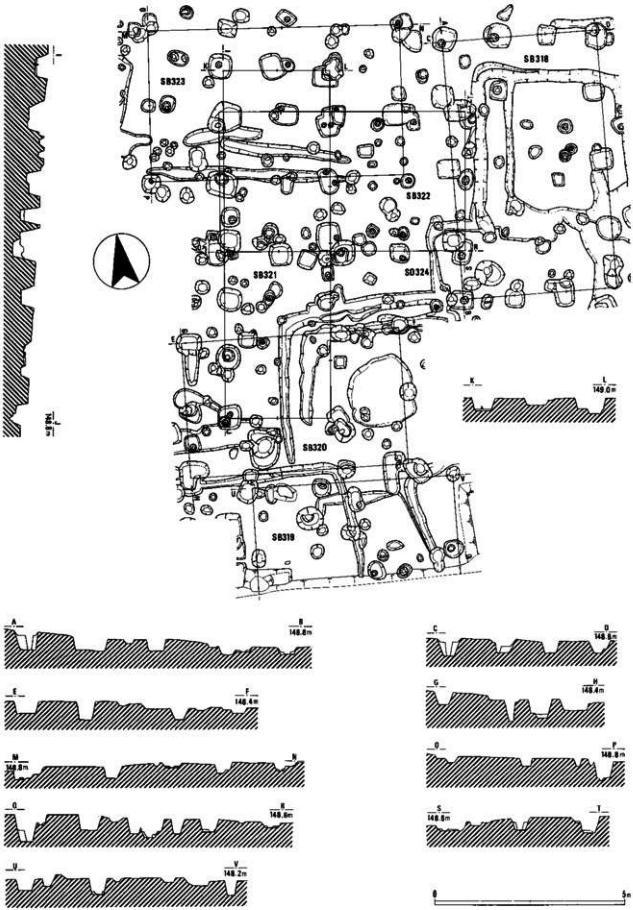
SB319（第22図）　西区中央南端で検出した。全体の規模は不明であるが、東西棟とすれば3間×2間であるものと推定される。柱間は桁行の東端が1.65mのほかは1.8mである。柱掘形は直径30㎝～50㎝の円形または方形と不揃いであり、建物とするに疑問もある。東側妻柱では、直径20㎝の柱痕跡を確認できた。SB316とは、棟方向がほぼ直角に異なることから同時に存在したものと思われる。

SB320（第22図）　西区中央で検出した3間×2間の東西棟である。前述したようにSB318と同時に存在したものと考えられる。柱間は、桁行の中央が2.4m、両端が1.65mで中央のみ広い。梁行は1.8mの等間である。柱掘形は40㎝～60㎝の円形または方形と不揃いで、深さも様々であり建物とするに疑問も残る。

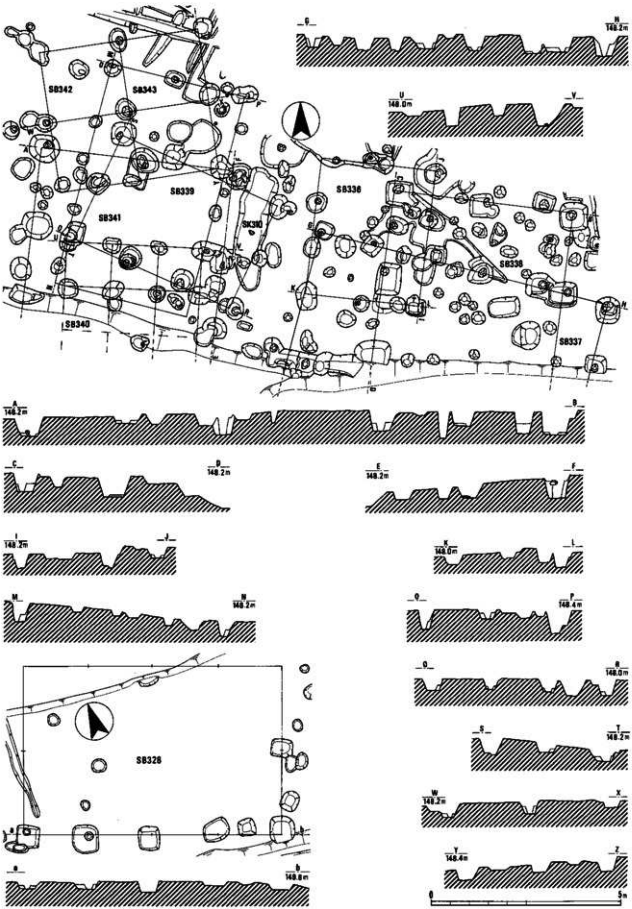
SB321（第22図）　西区中央で検出した6間×2間の南北棟である。柱間は桁行、梁行とも等間で、特に梁行が1.4mと狭く、非常に細長い建物である。第二次調査で検出した飛鳥時代の建物に同様なものがあるが、SB338, SB341と棟方向がほぼ同じであるため、この時代のものと考えている。東の側柱1基と南の妻柱が検出できなかったが、北側の妻柱は他の柱穴よりかなり浅く、南側もこれと同様であれば、削平されたことも十分考えられる。西の側



第21図　ＳＢ316, ＳＢ327実測図　（1：100）



第22図　ＳＢ318～ＳＢ323, ＳＤ324実測図　（１：100）



第23図　ＳＢ328, ＳＢ336～ＳＢ343, ＳＫ310実測図　（1：100）

柱列を２間分延長すると同様な方形の掘形があり、ここまで延びることも考え精査を行ったが、他の柱穴は検出できず、桁行は６間とするのが妥当だと思われる。柱掘形は一辺65cm～80cmの方形を呈する大形のものである。北西角の柱穴で直径15cmほどの柱痕跡を確認した。これを掘り下げたところ、腐食した柱が残存していた。

ＳＢ３２２（第22図）　西区中央で検出した４間×２間の東西棟である。桁行は等間であるが、梁行は不等間である。柱掘形の主なものは、一辺60cmの方形を呈する大きなもので、直径20cmの柱痕跡を確認できたものも多い。

ＳＢ３２３（第22図）　西区中央で検出した４間×２間の東西棟である。柱間は桁行、梁行とも不等間で、北の側柱列が不揃いであるなど建物とするに疑問もある。SB336, SB338, SB341等とは、棟方向がちょうど直角に異なり、これらのいずれかと同時に存在した可能性が高い。柱掘形は形がやや不揃いではあるが、元は一辺50cm前後の方形を呈していたものと思われる。南の側柱の東から２番目の柱穴より須恵器蓋(160)が出土した。

ＳＢ３２７（第21図）　西区北部で検出した。削平のため側柱が検出できなかったが２間×２間の南北棟になるものと考えられる。西に約1.8m離れたSB328とは棟方向がほぼ直角に異なる。梁行は、1.8m＋1.5mの不等間で掘形は一辺50cm～75cmの方形または長方形を呈する大型のものである。北側梁行では直径20cm～30cmの柱痕跡を確認できた。南側のものは極端に小さく、柱痕跡とするには疑問が残る。

ＳＢ３２８（第23図）　西区北部で検出した。削平や調査区外のため検出できなかった柱穴も多いが、４間×２間の東西棟になるものと考えられる。掘形は一辺50cm～70cmの方形を呈する大きいもので、直径20cmの柱痕跡を確認できたものもある。柱間は、桁行、梁行とも等間である。

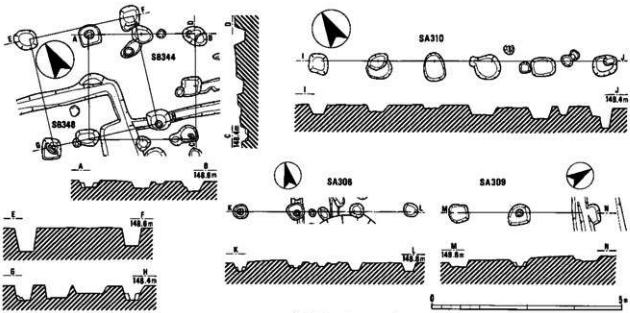
ＳＢ３３５（第32図）　西区中央で検出した３間×２間の東西棟である。桁行の柱数が異なり、しかも不等間で、建物とするに疑問の大きいものであるが、東から２番目の側柱は北と南が対応する。柱掘形は直径30cm～40cmの円形を呈するが、直径20cm足らずの小さいものもある。

ＳＢ３３６（第23図）　西区中央で検出した。３間×２間の南北棟で、SB337を切る。柱間は桁行、梁行とも等間で、特に桁行は1.2mと狭い。柱掘形は直径50cm前後の不整円形を呈するものが多いが元は方形であったものと思われる。

ＳＢ３３７（第23図）　西区中央南端で検出した。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが５間×２間以上の東西棟と考えられる。SB343とは方向がちょうど直角に異なり、しかも北側の側柱列を延長するとちょうどSB343桁行の２間目にあたる。また、両者の距離は2.75mである。柱間は、桁行の東端だけが1.8mと広く、他は1.5m、梁行は1.8mの等間になるものと思われる。柱掘形は、一辺60cm前後の方形を呈し、直径20cm～30cmの柱痕跡がほとんどのもので検出できた。

ＳＢ３３８（第23図）　西区中央南端で検出した。全体の規模は不明であるが２間以上×２間の南北棟と考えられる。同様な規模のSB341とは北側を揃えて並列する。両者の間隔は4.1mである。さらに、SB323, SB321等とも方向は同じである。梁行、桁行とも等間であり、柱掘形は一辺70cm～90cmの方形で、今回検出したものの中で最大である。ほとんどの柱穴から直径20cm～30cmの柱痕跡を検出した。深さは検出面から50cmほどしっかり掘られているが、妻柱は若干浅く約30cmの深さである。

ＳＢ３４１（第23図）　SB338と北側を揃えて並列する２間以上×２間の大型建物である。南側は水田開墾による削平のため消滅しており、全体の規模は不明であるが、柱掘形はSB338より若干小さいものの、一辺70cm前後の方形または円形を呈する。しかし、梁行はやや大きくSB338が4.8mであるのに対し、5.1mである。柱間は、桁行、梁行とも等間で、桁行の柱間寸法はSB338と同じ2.1mである。深さは、検出面から50cmほどしっかり掘られているが、妻柱は極端に浅く15cmほどしかない。柱穴内には直径20cmほどの石が入れられているものが多く、特に北東隅のものは根巻状に残存していた。これにより柱の直径は20cm足らずのものであったことがわかるが、掘形に比して意外に細いものである。北西角柱穴より土師器杯(162)がほぼ完形で出土した。この建物の東側に添うように浅い溝状の土坑ＳＫ31



第24図　ＳＢ344，ＳＢ348，ＳＡ306，ＳＡ309，ＳＡ310実測図　（1：100）

0がある。同時期のため何らかの関連があるかもしれない。

ＳＢ３４３（第23図）　西区中央で検出した。検出できなかった柱穴も多いが４間×２間の南北棟である。前述したようにSB337とは密接な関係にある。柱間は桁行、梁行とも等間であるが、深さは様々である。柱掘形は30～50cmの方形または円形で大きさ、形態ともに不揃いである。

ＳＢ３４４（第24図）　西区西部で検出した２間×２間の建物で棟方向は不明であるが、仮に南北棟としておく。柱間はすべて1.4ｍの等間、掘形は形の乱れたものもあるが、元は一辺55cmの方形であったものと思われる。直径25cm～10cmの柱痕跡を確認できたものもある。

ＳＢ３４６（第29図）　西区南西部で検出した。妻柱が両方とも検出できなかったが、３間×２間の東西棟であるものと思われる。桁行は不等間で、柱掘形は直径40cm前後の円形を呈する。柱穴の底に平らな石を検出したものがあり、根石として使用されたものだろう。北西角の柱穴よりミニチュア土器（165）が出土した。SB345とは棟方向が異なるものの規模はほぼ同じで、建て替えの関係であるかもしれない。

ＳＢ３４８（第24図）　西区西部で検出した。１間×１間であるが、重複するSB344とは同様な規模であるため、本来は２間×２間でSB344とは建て替えの関係にあるものかもしれない。しかし柱穴は４基とも検出面からでも40cm～60cmまでしっかり掘り込まれているため、削平されたとは考えられず１間×１間の南北棟とした。柱掘形は一辺55cm～60cmの方形を呈しSB344と同様なものである。また、竪穴住居の主柱穴である可能性も若干残る。

Ｂ．柱列

ＳＡ３０１（第19図）　東区東部で3間分を検出した柱列である。調査区端での検出のため、掘立柱建物の一部である可能性も大きい。柱間は1.35ｍの等間で、掘形は50cm前後の方形または円形で比較的大きいものだが、深さはいずれも検出面から20cm前後と浅い。

ＳＡ３０５（第33図）　西区北東端で５間分を検出した柱列である。調査区端での検出のため、掘立柱建物の南の側柱列である可能性も大きい。柱掘形は、一辺55cm～70cmの方形または長方形を呈する大きなものである。

ＳＡ３０６（第24図）　西区中央で３間分を検出した柱列である。柱間は1.5ｍの等間で、掘形は35cm～40cmの方形または円形を呈する。西側の2基では直径15cmの柱痕跡を確認できた。方向は、SB323の棟方向と同じであり、掘立柱建物の一部であるかもしれない。

ＳＡ３０９（第24図）　西区北部で２間分を検出した柱列である。調査区外へ延びる可能性もあり、

SA310とはちょうど直角に方向が異なる。また、この付近は開墾による削平が地山深くまで及んでいるため、本来は掘立柱建物であったのかもしれない。柱間は1.65mの等間、掘形は一辺50cmの方形で、直径20cmの柱痕跡を確認できたものもある。

SA310（第24図）　西区北部で5間分を検出した柱列である。柱間は1.5mの等間、掘形は一辺50cm～65cmの方形または長方形である。SA309と同様、掘立柱建物であった可能性も高い。

C．土坑

SK310（第23図）　西区中央で検出した長辺3m、短辺70cmの溝状の土坑で、深さは検出面から20cm弱の浅いものである。SB341に添うように位置するため、これと関連する遺構である可能性が高い。土師器杯(167)～(169)、製塩土器(170)が出土した。

SK311（第28図）　西区中央で検出した。南側は水田開墾により消滅しているが、一辺4.5mの方形を呈するものと考えられる。深さは検出面から10cm弱の浅いものである。竪穴住居の可能性もあるが確証はない。SD326とは同時期であり、一体の遺構であるかもしれない。

D．溝

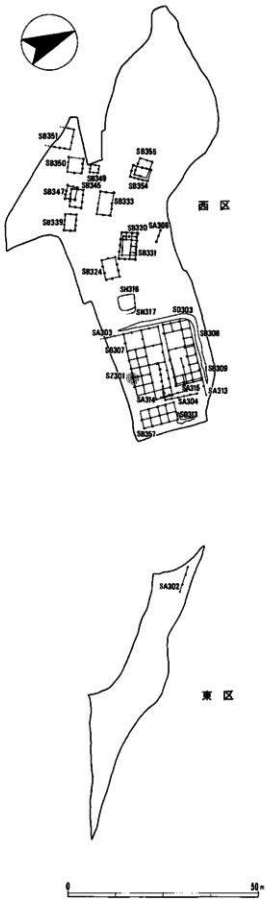
SD305　西区北西端で検出した。調査区端での検出のため全体の規模は不明であるが、南北に延びる溝と考えられる。検出面では東に弯曲気味であるが、溝最深部では逆にやや西へ弯曲気味になる。幅2m、検出面からの深さは70cmほどで、埋土は2層に分かれ、上層は暗茶色土、下層は暗灰色粘土である。

SD308　東区中央で検出した。幅50cm前後、検出面からの深さは10cm強の浅い溝である。南東へ6mほどで南へ屈曲し、調査区外へ延びている。埋土から須恵器杯(161)が完形で出土している。

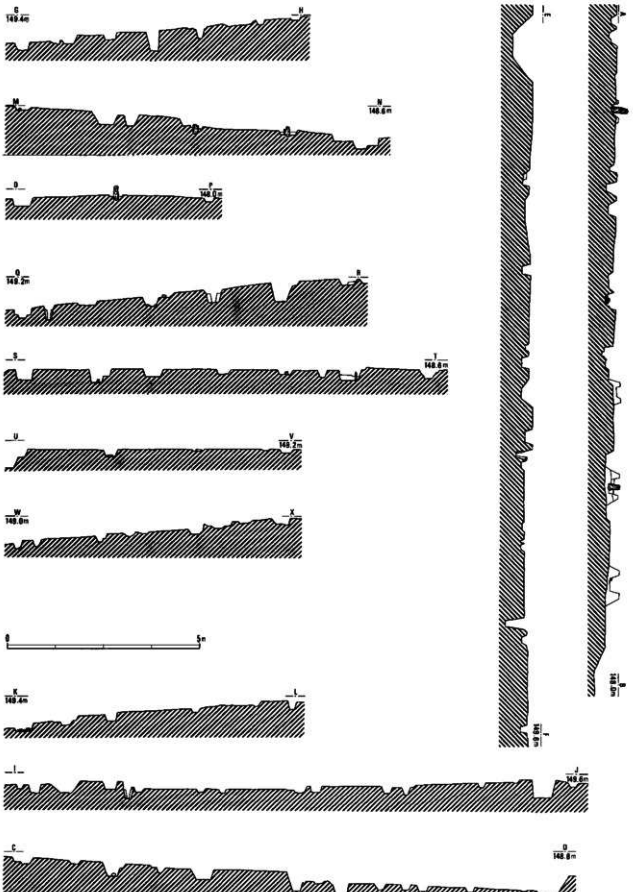
SD326（第28図）　西区中央で検出した幅30cm、検出面からの深さ約15cmの小溝である。南東へ4mほどで南へ屈曲して消滅している。竪穴住居の周溝の可能性もある。また、近くのSK311とは同時期であり、一体の遺構であるかもしれない。

5．平安時代中期の遺構

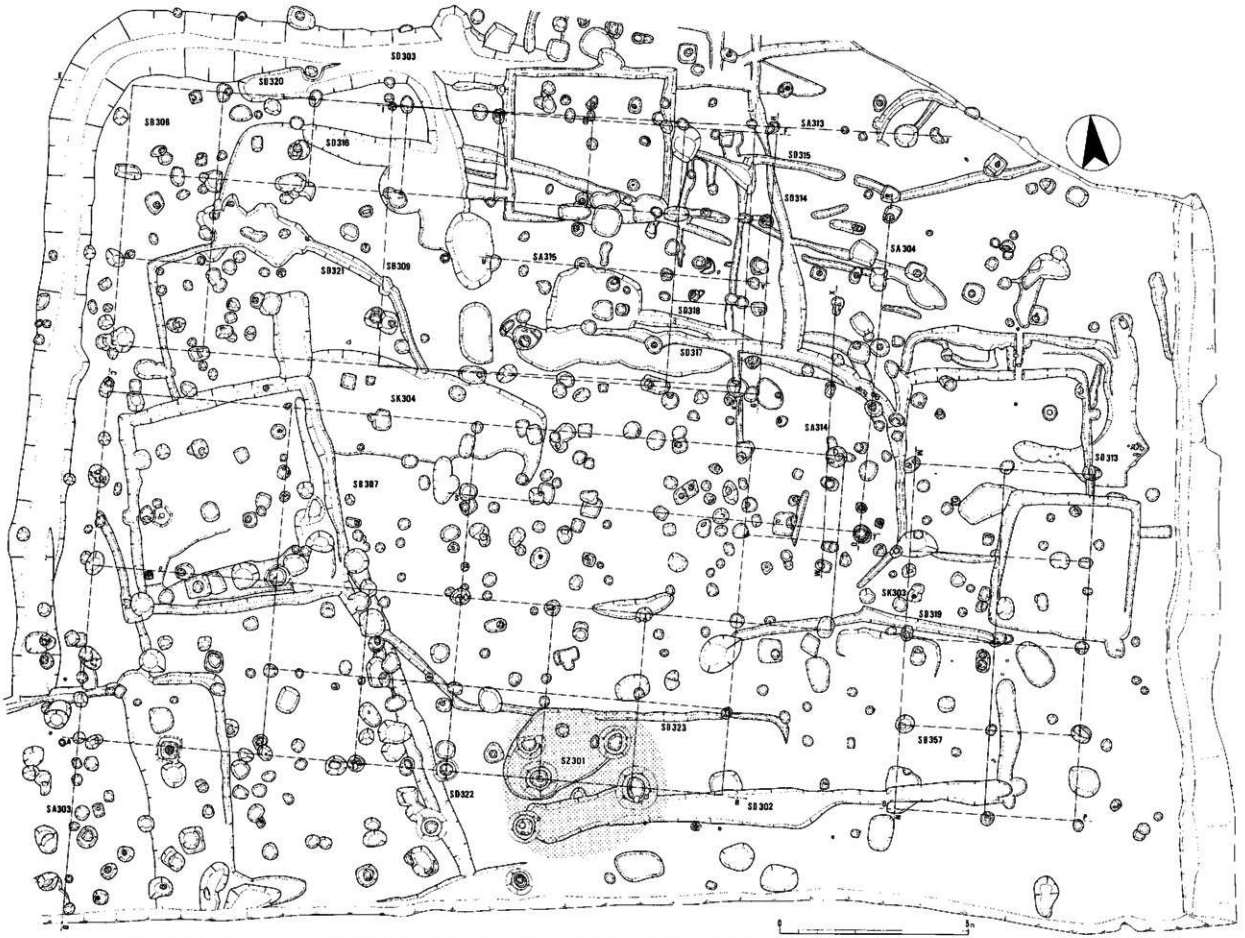
竪穴住居2棟、掘立柱建物16棟、区画溝等を検出



第25図　平安時代中期遺構配置図　（1：1,000）



第26図　S B307～S B309, S B357, S A303, S A304, S A313～S A315, S D303, S D314, S D315, S D317～S D319, S D322断面図（1：100）



第27図　SD302, SD303, SD313～SD323, SA303, SA304 SA313～SA315, SB307～SB309, SB357, SK303, SK304, 実測図　(1：100)

した。やはり、掘立柱建物や柱列は時期決定の有力な手がかりに乏しい。区画溝を伴う一群とSB324, SB339, SB347, SA308は、柱穴から黒色土器A類が出土しておりこの時期として間違いないものと思われる。他のものはSB339, SB347と方向がほぼ同じであることからこの時代のものとしたが、SB354, SB355はやや無理があるかもしれない。

A．竪穴住居

SH316（第32図）　西区中央で検出した。SH317とは建て替えの関係にあるものと思われ、建て替え順はSH316→SH317である。周溝のみの検出であり、主柱穴や竈は検出できなかった。SB307, SB308, SD303等と方向が揃っており、これらに付属するものと考えられる。

SH317（第32図）　前述のようにSH316を若干縮小し、やや東へ移動して建て替えられたものである。やはり主柱穴、竈は検出できない。

B．掘立柱建物

SB307（第26, 27図）　西区東部で検出した7間×4間の東西棟である。東側に2間分の張り出し部が付属し、その東側には柱通りをほぼ揃えてSB357が位置する。張り出し部の柱間や柱穴の規模は身舎と同じである。当初、SB357をも含めて桁行11間の長大な建物としたが、2棟に分け、方向を1°ずらした方が柱通りがよく、柱間も等間になるため、この様な結果になった。北側には柱通りを揃えてSB308が位置するが、2棟の距離は1.3mしかない。さらに、これらの建物を取り囲むように巡るSD303との距離も非常に近い。また、西側の梁行を延長するかたちでSA303が取り付き、北側には4.4m離れてSA315が伴う。地山が南へ傾斜しているため、南の側柱列の一部は上層での検出となった。土器溜まりであるSZ301を含む層は非常に硬く締まっており、この建物の整地層である可能性が高い。また、東柱が検出できないものもあり、この部分が土間であった可能性もあるだろう。柱掘形は一部小さいものもあるが40cm～50cmの円形または不整円形を呈し、多くのものから10cm～20cmの石が、根石あるいは根巻き石として使用されていた様な状態で出土した。掘形が検出できずに、この石だけを検出したものもある。柱が残存しているものもあり、これによると直径約15cmの柱であったことがわかる。

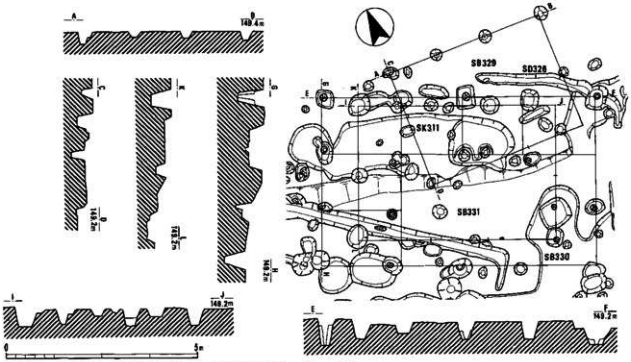
SB308（第26, 27図）　SB307の北側に、これと柱通りをほぼ揃えて建つ7間×3間の東西棟である。梁行がSB307より1間分短いが、桁行や柱間寸法は同じである。しかし柱掘形は、直径約30cmの不整円形のものがほとんどで、やや小規模である。前述したようにSB307とは接近しすぎていることや、SB308に伴うと考えられる柱列SA304が、東と南を囲むことから、SB307とは時期差を考える方が自然であるかもしれない。また、北の側柱列はSD303の掘形に接する位置にある。北と東西側の1間分には束柱が検出された。柱穴や柱間寸法に変化がないため廂としなかったが、確証はない。柱穴内から5cm～10cmの小石を検出したものもあり、根巻き石として使用されていたものであろう。また、北の束柱列では直径約15cmの柱が残存しているものがある。

SB309（第26, 27図）　SB308と重複して検出された4間×3間の東西棟である。SB307, SB308と比べ、桁行の柱間がやや短く2.4m、柱掘形は、直径15cm～30cmの円形でやや小規模である。東柱は1基も検出できなかった。柱穴内には10cm～20cmの石が入れられており、根石、あるいは根巻き石として使用されていたものであろう。北の側柱列を東に延長するかたちでSA313が取り付く。また、東側には約2.4m離れてSA304が伴う。

SB324（第32図）　西区中央で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は桁行、梁行とも等間で、掘形は35cm～50cmの円形または方形を呈する。SD303を伴うSB307, SB308と棟方向が同じであり、柱穴内に10cm前後の石が入れられていることも共通していることから、これらに付属する建物であるものと思われる。

SB330（第28図）　西区中央で検出した。4間×3間の東西棟で、SB331とは建て替えの関係にあるものと思われるが、SB330には北側と西側に1間分の束柱列がある。桁行は東西両端がやや広い不等間、梁行は等間である。柱掘形は、60cm×50cmの長方形を呈し、側柱は検出面から50cm以上の深いものが多い。

SB331（第28図）　削平のためか検出できない柱穴も多いが、3間×2間の東西棟と考えた。S



第28図　ＳＢ329～ＳＢ331，ＳＫ311，ＳＤ326実測図　（１：100）

B330とは建て替えの関係にあるが、柱穴の重複はなく前後関係は不明である。柱間は桁行、梁行とも不等間である。柱掘形は円形を呈するものもあるが、元は一辺約50cmの方形であったものと思われる。

ＳＢ３３３（第29図）　西区西部で検出した。検出できなかった側柱もあるが、他の柱穴も検出面から20cm足らずの深さしかないため削平を受けたものと考え、４間×２間の東西棟とした。柱間は桁行、梁行とも不等間で、特に桁行は北側と南側が対応しない。柱掘形は一辺40～50cmの方形が本来の姿であろう。

ＳＢ３３９（第23図）　西区南西部で検出した。北の側柱で検出できなかったものもあるが３間×２間の東西棟である。西に約２ｍ離れたSB345と、さらにその西のSB350とは棟方向がほぼ同じで、SB350とは北の側柱列を揃えている。柱間は桁行、梁行とも1.5ｍの等間で、掘形は一辺50cm～60cmのほぼ方形を呈する。直径20cm～30cmの柱痕跡を確認できたものも多い。

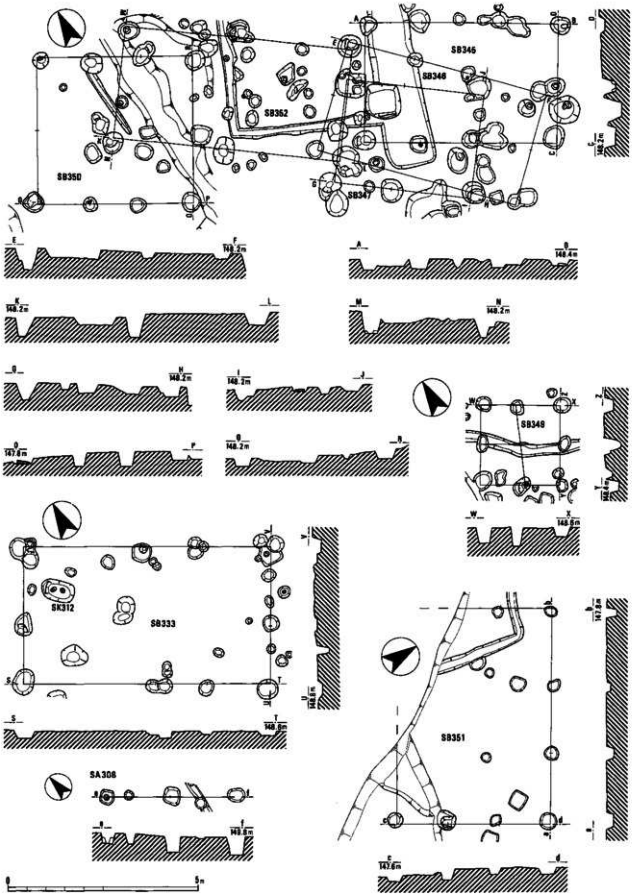
ＳＢ３４５（第29図）　西区南西部で検出した３間×２間の東西棟である。SB339，SB350とは、棟方向がほぼ同じである。SB339との距離は約２ｍ、SB350とは約4.5ｍである。桁行の中央が2.1ｍと広く、両端は1.5ｍ、梁行は1.5ｍの等間である。掘形は直径40cm～50cmの円形または方形で、底に平たい石が据えられているものがあり、根石として使用されたものであろう。

ＳＢ３４７（第29図）　西区南西部で検出した。検出できなかった柱穴もあり、桁行、梁行とも不等間で建物とするに疑問も多いが２間×２間の東西棟と考えた。柱掘形は50cm～60cmの円形を呈し、根石と思われる石の残るものがある。

ＳＢ３４９（第29図）　西区西端で検出した。２間×２間の総柱の南北棟である。柱間は、桁行1.05ｍの等間、梁行0.9ｍ＋1.2ｍでいずれも狭く、倉庫であったものと考えられる。柱掘形は、直径40cmの方形に近い円形を呈するものが多い。SB333，SB344とは方向がほぼ同じである。

ＳＢ３５０（第29図）　西区西部で検出した。東に4.5ｍ離れるSB345と棟方向は、ほぼ同じである。また、前述したようにSB339とは北の側柱列をほぼ揃えている。南の側柱列はSB351の北の側柱列にほぼ揃う位置にある。３間×２間の東西棟で、柱間は桁行、梁行とも等間、掘形は40cm～50cmの円形を呈する。根石と思われる平たい約35cmの石が、南西隅の柱穴に据えられている。

ＳＢ３５１（第29図）　西区南西端で検出した。全体の規模は不明確であるが３間×３間の東西棟と



第29図　ＳＢ333, ＳＢ345, ＳＢ346, ＳＢ349, ＳＢ350～ＳＢ352, ＳＡ308, ＳＫ312実測図　（1：100）

考えられる。前述したように北の側柱列はSB350の南の側柱列にほぼ揃う。桁行、梁行とも等間で、柱掘形は30cm～40cmの円形である。

SB354（第34図）　西区北西部で検出した4間×2間の南北棟である。桁行は等間であるが、寸法は1.2mで非常にせまい。掘形は直径50cmの円形で、直径20cmの柱痕跡を確認できたものもある。

SB355（第34図）　西区北西部で検出した3間×2間の東西棟である。北の側柱は攪乱により消滅したものと考えられる。東側妻柱には、根石と考えられる15cmほどの平らな石が据えられていた。梁行は等間であるが、桁行は著しい不等間で、掘形は直径20cm～40cmの円形である。

SB357（第26,27図）　西区東端で検出した4間×2間の南北棟である。前述したように最初はSB307と同一建物と考えていた。SB307とは、方向が若干異なるものの柱通りをほぼ揃えて建てられており、柱間、柱穴の規模も同様である。棟方向は、SB309と直角になり、SA314とは平行する。柱が残存しているものが多く、直径15cm～18cmの太いもので、掘形から16cmほど沈下しているものも認められる。また10cm～20cmの小石を根石、あるいは根巻き石状に入れているものもある。

C．柱列

SA302（第31図）　東区北西端で3間分を検出した柱列である。西に接する上野市教育委員会の調査区ではこの続きに相当する柱穴は検出されておらず[1]、3間以上延びることはないと思われる。しかし掘立柱建物の南の側柱列である可能性は残されている。

SA303（第26,27図）　SB307の西の梁行を延長するかたちで2間分を検出した柱列で、調査区外へ延びる可能性も大きい。柱間寸法はSB307の梁行と同じ2.3mであるが、掘形は小さく直径25cm～30cmの円形である。

SA304（第26,27図）　SB308を取り囲むように逆し字状に延びる柱列で、SB308との距離は東側、南側ともに3.3mである。南北は5間で等間、柱掘形は直径約50cmの円形で、直径15cm～20cmの柱痕跡を確認したものもある。これに対し東西は不等間で、柱掘形の形態も一辺約50cmの方形または円形と不揃いであるため柱列とするに疑問もある。直径10cmほどの柱が残存しているものもあるが、腐食が激しく元の太さは不明である。

SA308（第29図）　西区北部で2間分を検出した柱列である。SA309,SA310と同様、掘立柱建物の一部である可能性もある。柱間は1.7mの等間で、掘形は一辺30cm～45cmの方形である。直径15cmの柱痕跡を確認できたものもある。

SA313（第26,27図）　SB309の北の側柱列を東に延長するかたちで延びる柱列で、2間分を検出した。柱間はSB309と同様2.4mで、掘形は直径20cmの円形を呈する小規模なものである。

SA314（第26,27図）　SB309の東側に約2.4m離れて南北に延びる柱列で3間分を検出した。SB357とも平行しており、やはり2.4m離れる。柱間は等間で、掘形は直径20cm前後の円形を呈する小規模なもので、いずれの柱穴も重複が認められることから建て替えが行われたものと考えられる。

SA315（第26,27図）　SB307の北側を東西に延びる柱列で3間分を検出した。SB307の棟方向と平行しており、北の側柱列とは4.4mの距離である。中央2基の柱穴では、根石と思われる10cm～20cmほどの石が据えられていた。掘形は直径30cmほどの円形を呈する小さいものである。

D．溝

SD303（第26,27図）　西区東部で検出した。西に18mほど延びた地点で直角に南へ曲がり20mほど南下し消滅する。東端、南端とも削平により徐々に浅くなりながら消滅しており、従って本来の両端は確認できない。規模は、残りの良好な屈曲地点で計測すると幅約1.6m、深さ約40cmである。埋土は黒灰色で、粘土層や砂層はなく、水が流れたり溜まったりしていた痕跡は認められない。SB307,SB308等を取り囲むように位置するため、これらの建物に付属する施設であると考えられる。埋土からは墨書のある灰釉陶器（223）、黒色土器、土師器等比較的多くの遺物が出土した。

SD313（第12,27図）　西区東端で検出した。幅50cm～70cmで、検出面からの深さ10cm前後の浅い土坑状の溝である。南北に4.5m、南端で西へ屈曲し1.5mほどで終わる。埋土には炭を多く含んでお

り、比較的多くの土器片も出土した。同時期の建物SB307～SB309, SB357と関連するものである可能性が高いが、詳細は不明である。溝の北端で20cmほどの石を2個、南へ3.5mの地点で小石の集まりを検出した。掘立柱建物の根石の様だが、建物としてまとまらない。

E. その他の遺構

SZ301（第27図）　西区東南部で検出した約4m四方に広がる土器溜まりである。土師器杯、黒色土器椀を中心に大量の土器が出土した。特に土坑を形成している様子はなく、この土器溜まりを含む層はこの近辺の地山の低い部分のみに存在する。この層の厚さは最大30cmで、硬くよく締まっており、SB307の柱穴はこの層の上面から切り込んでいる。このためこの層は、SB307を建てる際の整地層と考えることができ、SZ301は、SB307より一時期古い時に形成されたものである。しかし、SZ301での土器の出土状況は、完形またはそれに近いものが多く、単なる整地層の一部とは考えにくい。整地に際して何か祭祀が行われたものであるのかもしれない。

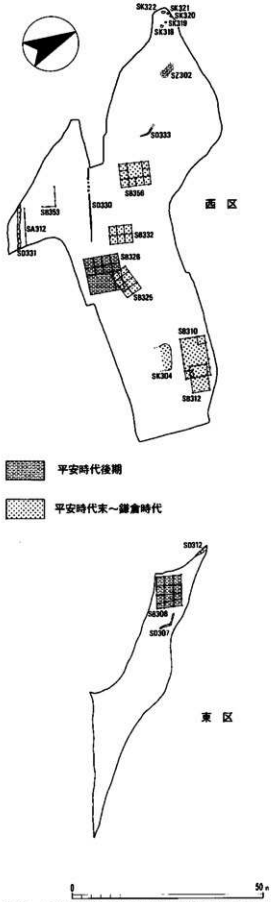
6. 平安時代後期の遺構

掘立柱建物は2棟のみであるが、調査区北西隅で多くの遺物が出土した小土坑群がある。

A. 掘立柱建物

SB306（第31図）　東区西端で検出した4間×3間の東西棟である。梁行は調査区外へ延びる可能性もあるが、桁行は西に接する上野市教育委員会の発掘調査では検出されておらず[2]、調査区内でおさまるものと考えられる。梁行の長さが東側で20cm長く歪んだ建物であり、しかも桁行、梁行とも不等間である。南の側柱で柱が残存しているものが2基あり、それによると直径約6cmの細い柱であったようだ。さらにその内の1基では、柱掘形に接して15cmほどの石を検出した。柱を固定するために置かれたものであろう。

SB326（第32図）　西区中央で検出した4間×4間の東西棟である。柱間は、桁行、梁行とも不等間で、掘形は直径25cm～30cmの円形を呈する小規模なものである。南東側の東柱が2基検出できなかったが、この部分は土間になるのかもしれない。また



第30図　平安時代後期,平安時代末期～鎌倉時代遺構配置図
(1：1,000)

北西隅の東柱から土師器皿(275)が完形で出土し、その東隣の東柱からも瓦器皿(276)が1/4の残存で出土した。

B．土坑

SK318　西区北西部で検出した。一辺80cmの不整方形を呈し、深さは検出面から2cm～3cmの浅いものである。埋土には炭を多く含んでおり、拳大の石と土師器台付皿3枚(277)～(279)が完形で出土した。これらは埋納されていたものと考えられ、隣接するSK319～SK322と同様祭祠に関連する遺構であるかもしれない。

SK319　SK318の北側で検出した直径30cmの不整円形を呈する柱穴状の土坑である。検出面からの深さは60cmで、土師器の「て」字口縁皿や火付けの木が出土している。

SK320　西区北西端で検出した直径40cmの円形を呈する柱穴状の土坑である。検出面からの深さは50cmほどで、「て」字口縁皿4枚(271)～(274)が完形で正立状態で出土し、その上に20cmほどの石が2個乗せられていた。皿は重ねられた状態ではなかったが、埋納されていたものと考えてよいだろう。

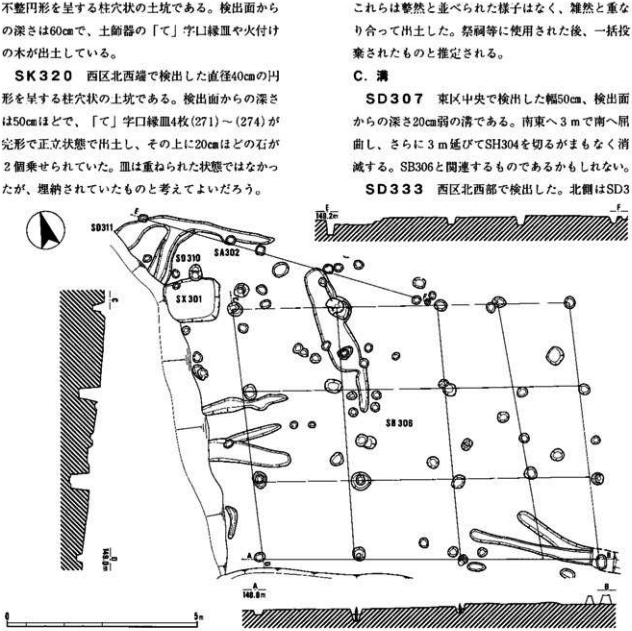
SK321　西区北西端で検出した直径20cmの円形を呈する柱穴状の小土坑である。「て」字口縁皿(268)と台付皿(269)が出土した。ともに完形ではないが残存度が高いため小土坑への混入とは考えにくく、故意に埋められたものと推測する。

SK322（図版15）　西区北西端で検出した。SD305との重複のため明確に検出できなかったが、長辺80cm、短辺40cmの長方形を呈する。検出面からの深さは20cm～30cmで、多量の土器が完形、または完形に近い状態で出土した。その内訳は、土師器杯1、台付皿大2、小3、「て」字口縁皿10、瓦器皿1である。土器の他に10cmほどの石も多数出土した。これらは整然と並べられた様子はなく、雑然と重なり合って出土した。祭祠等に使用された後、一括投棄されたものと推定される。

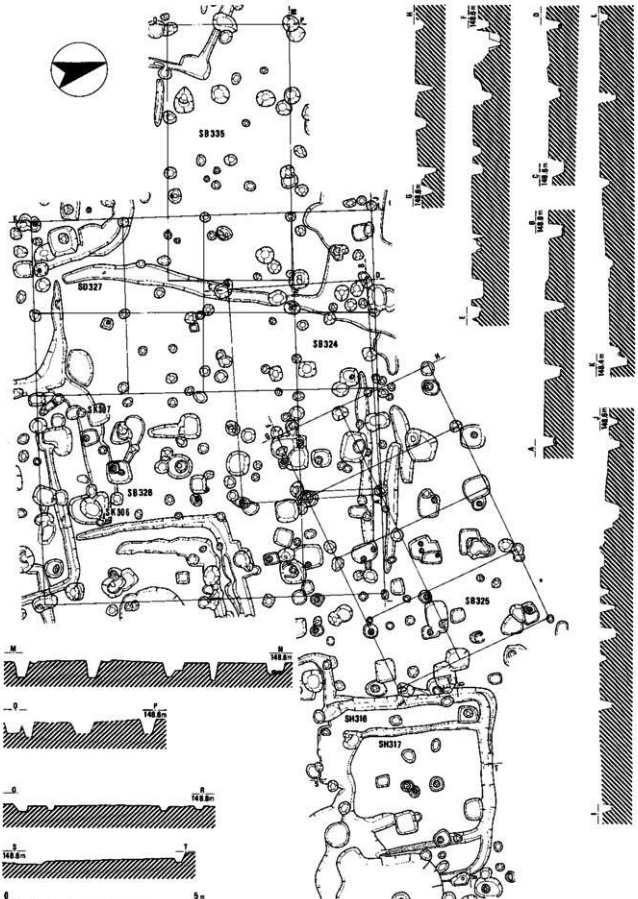
C．溝

SD307　東区中央で検出した幅50cm、検出面からの深さ20cm弱の溝である。南東へ3mで南へ屈曲し、さらに3m延びてSH304を切るがまもなく消滅する。SB306と関連するものであるかもしれない。

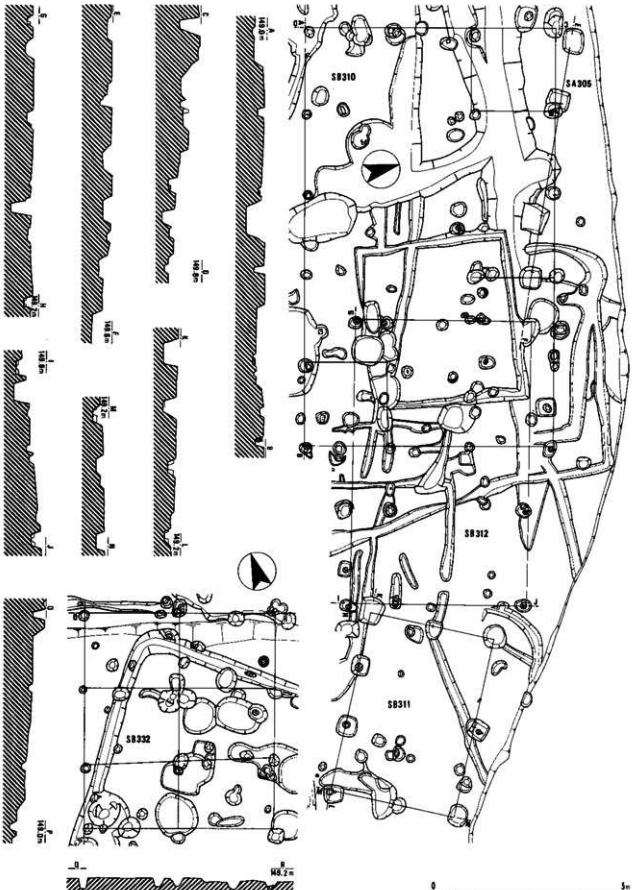
SD333　西区北西部で検出した。北側はSD3



第31図　SB306, SA302, SD310, SD311, SX301実測図　(1：100)



第32図　ＳＢ324～3B326, ＳＢ335, ＳＨ316, ＳＨ317, ＳＫ306, ＳＫ307, ＳＤ327実測図　（1：100）



第33図　ＳＢ310～ＳＢ312, ＳＢ332実測図　（１：100）

04との切り合いを確認できなかったため不明であり、南側は西に弯曲しながら5mほど延びて消滅する。幅30cm、検出面からの深さは、北側が最も深く15cmで南へ行くにつれて浅くなる。土師器杯(267)が出土した。

D. その他の遺構

SZ302　西区北東部で検出した土器溜まりである。大量の炭と共に瓦器椀(246)～(249)、土師器杯(236)，(237)、皿(238)～(243)、ロクロ土師器椀(244)，(245)の多種多様な土器が完形またはそれに近いかたちで出土した。しかしその状況に統一制は認められない。範囲は幅2m～3m、長さ8mほどの長方形状に広がり、地形がやや南東へ傾斜している程度で特に土坑等を伴うことはない。何らかの祭祀が行われた跡であるかもしれない。

7. 平安時代末期～鎌倉時代初期の遺構

掘立柱建物6棟をはじめ、柱列、土坑、溝がある。

A. 掘立柱建物

SB310（第33図）　西区北東部で検出した5間×3間の東西棟である。柱間は、桁行、梁行とも2.2mの等間で、掘形は直径25cm～30cmの円形を呈する。束柱は検出できないものが多く、一部に床が張られていただけか、間仕切りかもしれない。南東角の柱穴には、直径10cmほどの柱が残存していた。また、10cm～20cmほどの石が挿入されていたものが多く、南東の束柱では、掘形は検出できずに石のみを検出した。

SB312（第33図）　西区北東部で検出した3間×2間の東西棟である。柱間は、桁行、梁行とも等間で、掘形は直径25cm～35cmの円形を呈する。直径15cm前後の柱痕跡を確認できたものも多い。また掘形から15cmほどの石を検出したものがあり、柱の固定に使用されたものかもしれない。

SB325（第32図）　西区中央部で検出した4間×2間の東西棟である。柱間は、桁行の東端が2.0mと広いほかは1.8m、梁行は著しい不等間で建物とするに疑問も残る。掘形は直径30cm前後の円形を呈する。

SB332（第33図）　西区中央で検出した3間×2間の南北棟である。梁行は等間であるが、桁行は不等間で、柱掘形の大きさも不揃いである。棟方向はSD330と丁度直角になることから関連が考えられる。北西角の柱穴から10cmほどの石が数個出土した。根石として機能していたものと考えられる。

SB353（第34図）　西区南西部で検出した。削平が激しく全体の規模は不明であるが3間以上×2間以上の東西棟になるものと思われる。柱間は、桁行東端が1.6mと狭く、他は2.0m、梁行は1.7mの等間になるものと思われる。柱掘形は直径25cm～30cmの小さなものである。SA312とは方向がほぼ同じで、これに伴うものであるかもしれない。

SB356（第34図）　西区北西部で検出した3間×2間の南北棟である。桁行、梁行とも不等間で、桁行の西側が15cm長く、やや歪んだ建物である。柱掘形は直径30cm～20cmの小規模な円形で、削平、攪乱によって検出できなかったものもある。しかし、束柱が1基検出できなかったのは、この部分が土間であったためかもしれない。

B. 柱列

SA312（第34図）　西区南端で7間分を検出したが、東端は調査区外のため不明である。柱掘形は直径15cm～20cmの小規模なものである。時期決定資料に欠けるが、SB332, SD330と方向がほぼ同じであるためこの時代のものとした。南側には若干方向が異なるもののSD331が平行して延びている。

C. 土坑

SK304（第27図）　西区東部で検出した。南側は削平されているが、一辺7mの方形を呈するものと推定される。深さは、最も残りのよい北端部で20cmほどである。竪穴住居と考えられなくもないが、今回検出した竪穴住居は時代を問わず、すべて周溝を伴っている。SK304では、わずかに東側に溝状の部分が認められるもののはっきりせず、焼土等もないことから、ここでは土坑としておく。土師器皿(281)、瓦器椀(283)、皿(282)が出土した。

D. 溝

SD312　東区北西端で検出した南北に延びる溝である。幅50cm、検出面からの深さ40cmの比較的しっかりした溝であるが、その性格は不明である。

SD330　西区中央で検出した。幅30cm、検出面からの深さ10cm強の小溝である。調査区外からまっ

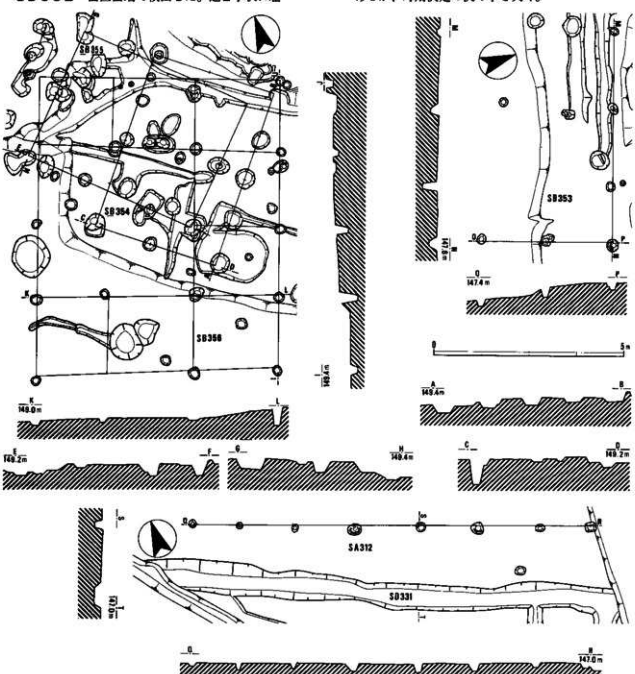
すぐ南東へ21mほどの地点で消滅する。本来はもっと延びていたことも予想され、埋土は灰色砂質土で、他の遺構とは異質である。SB332, SB353と方向が揃うため、これらを区画する溝であるものと考えられる。

SD331（第34図）　SA312の南側にほぼ平行して延びる幅60cm～80cmの浅い溝である。しかし、古墳時代の遺物しか出土しておらず、方向もやや異なることから古墳時代の溝の可能性もある。

8．時期不明の遺構

SD332　西区西端で検出した。逆L字状に屈曲する溝で、西と南側は調査区外へ続く。幅20cm～30cm、検出面からの深さ10cm前後の小溝で、竪穴住居の周溝である可能性も高いが、出土遺物もなく決め手に欠ける。

SX301（第31図）　西区北西端で検出した。長辺1.5m、短辺1.1mの長方形を呈し、深さは検出面から約30cmで、底部は平ある。壁はほぼ垂直で、四周とも厚さ1cmほどしっかり焼け、赤茶色を呈している。しかし、底部には焼土は認められない。埋土には炭を多く含んでおり、中世の火葬穴のようであるが、時期決定の決め手を欠く。



第34図　ＳＢ353～ＳＢ356, ＳＡ312, ＳＤ331実測図　（1：100）

Ⅳ. 遺　　物

1. 弥生時代の遺物

弥生時代の遺物は、包含層にもほとんど含まれず、その大部分はSD304第２，３層からの出土で一部中期に遡るものもあるが、大半は後期のものと思われる。

A. SK３１２出土の遺物（第37図）

図示できるものは(50)だけであるが、混入の可能性もある。砥石と思われ、４面とも使用されている。

B. SD３０４第２，３層出土の遺物（第35～37図）

〈弥生土器〉

広口壺A(１)～(４)　大きく外反する口縁部で端部はやや上下に肥厚し外に面をもつもの。(３)の口縁端部は折り返していることがわかる。(２)は口縁部外面に、(３)は上下端にヘラによる刻目を施すのに対し、(１)は櫛により羽状に刺突文を施している。その施文は下段、上段の順である。いずれも体部外面にはハケ目が残り、ヘラミガキは行っていない。(１)は文様として意識的に調整と同一原体で肩部に３条の横線を巡らし、上下端が右回り、中央が左回りである。おそらく回転台の使用によるものだろう。さらに口縁部内面にも、やはり同一原体で縦方向4方に直線文を施している。

広口壺B(５)～(８)　大きく外反する口縁部の端部をやや垂下させるもの。(５)の口縁部外面と内端部にはヘラによる刻目を施すが、他は無文である。(５)，(８)はヘラミガキで調整するが(６)は１㎝に８本以上の細かいハケ目である。

広口壺C(９)～(21)　小形のもので、体部の形態によりさらに細分される。算盤玉形の体部をもつものをＣ１(９)，(10)、長球状のものをＣ２(11)～(14)、球形に近いものをＣ３(15)～(21)とした。(10)は体部と頸部の境に凸帯を巡らし、その上下を櫛状工具によりナデたためか２～３条の浅い沈線が残る。施文するものは(19)のみで、体部上半に6本／8㎜の櫛による横線を２段に巡らし、その間に同一原体で波状文を施す。体部外面の調整は摩滅により不明確なものが多いが、ヘラミガキするもの(11)，(12)，(18)，(19)，(21)、ナデのもの(13)，(15)、ハケ目のもの(16)，(17)、上半をヘラミガキ、下半にハケ目を残すもの(９)，(10)、下半はヘラミガキだが上半はナデるもの(18)と様々である。ナデは板状工具により行われたものがほとんどで、(18)のものは浅いハケ目ともとれる。(13)，(14)の体部にはタール状の物質が付着し、(11)，(17)には穿孔が認められる。

広口壺D(22)　受け口状の口縁部を呈するもの。頸部に８本／２㎝の櫛状工具による横線を右回りに施し、さらに同一工具による刺突文を口縁部外帯面に山形状に施す。さらにヘラ状工具による刻目を口縁部外帯面の上下端に施す。

広口壺E(27)　有段口縁を呈するもの。体部と頸部の境にヘラ状工具による刺突文を巡らせ、さらに粘土帯を馬蹄状に張り付ける特殊な形態の壺である。

細頸壺A(23)，(24)　まっすぐ立ち上がる口縁部をもつもの。(23)の体部は算盤玉形に近い形態であるのに対し、(24)は球形である。また、(23)の口縁端部は肥厚する。調整も異なり、(23)はナデ、(24)はハケ目による。(23)の頸部から体部上半は、櫛状工具により施文される。波状文と横線文を交互に施すが、原体は異なり、前者は５本／1.4㎝、後者は５本／0.8㎝の工具によるものと思われる。施文は左回りに行われたようである。体部に欠損部があるが、穿孔であるかもしれない。

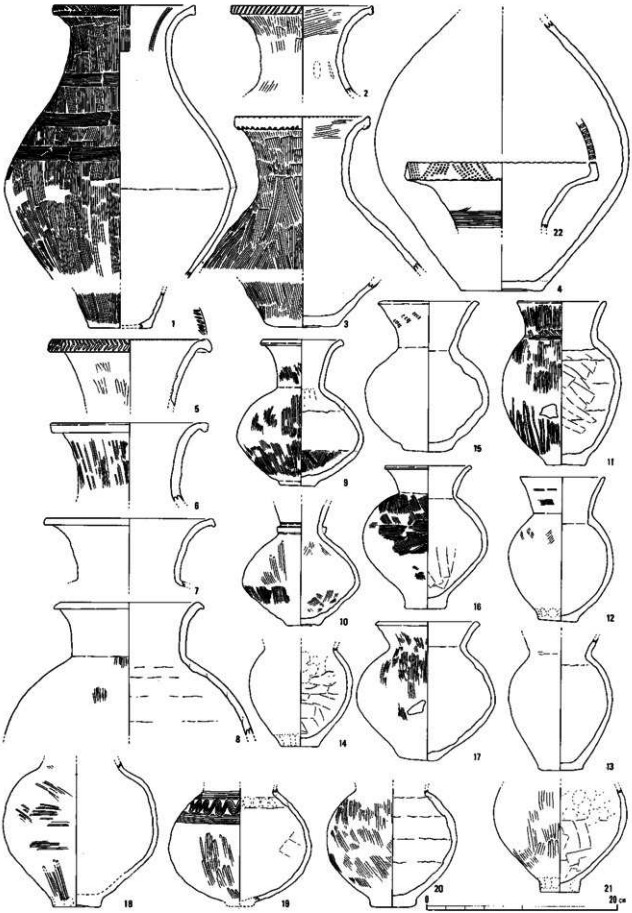
細頸壺B(25)　受け口状の口縁をもつもの。口縁部上端部外面から体部上半にかけて７本／１㎝の櫛状工具による横線文を９段に施す。施文はすべて右回りで行われているようである。

大型細頸壺(28)　口縁端部は内傾し、その外面に竹管文を巡らす。摩滅が激しいがヘラミガキを行っていないようだ。

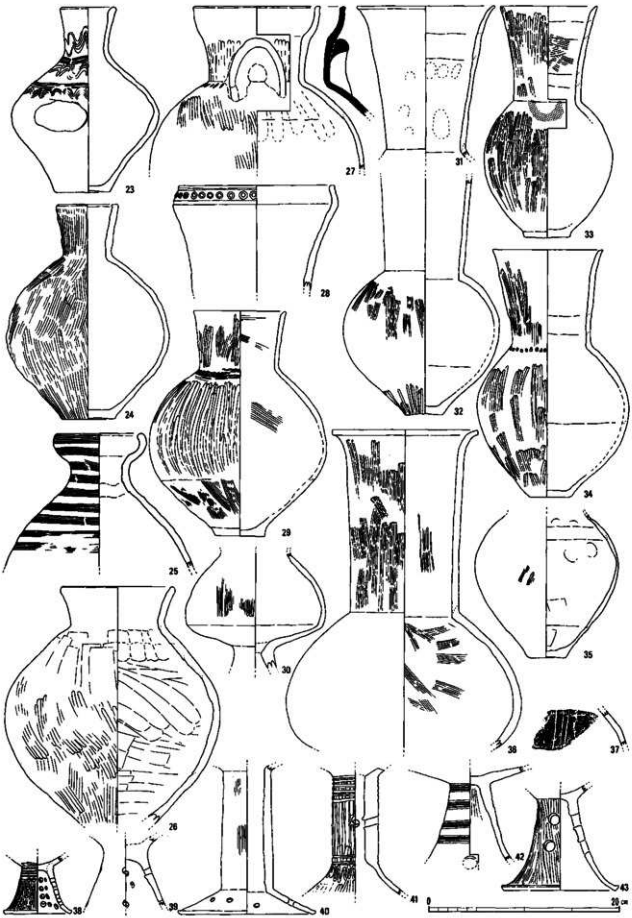
短頸壺(26)　ヘラミガキは肩部まで及んでおらず、板状工具によりナデられたままである。また、体部内面のナデは、上半を指、下半は板状工具による。

直口壺(29)　頸部と体部の境に５本／７㎜の櫛状工具による波状文を雑に施す。体部下半にはヘラミガキが及んでおらず、ハケ目のままである。

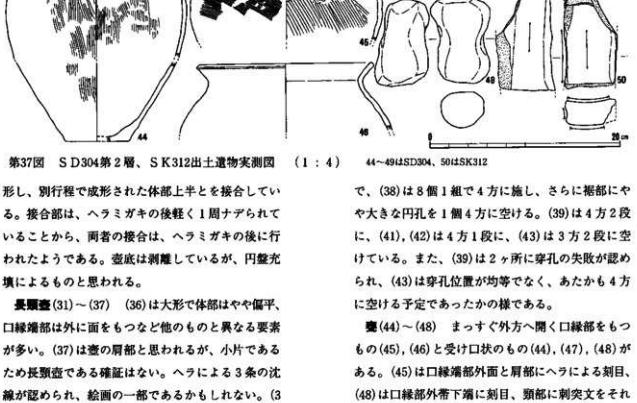
脚付壺(30)　脚部から体部下半までを連続して成



第35図　ＳＤ304第２，第３層出土遺物実測図　（１：４）　１～４，６は第３層、他は第２層



第36図　ＳＤ304　第２、３層出土遺物実測図　（１：４）　23,24は第３層、他は第２層



第37図　ＳＤ304第２層、ＳＫ312出土遺物実測図　（１：４）　44～49はSD304、50はSK312

形し、別行程で成形された体部上半とを接合している。接合部は、ヘラミガキの後軽く１周ナデられていることから、両者の接合は、ヘラミガキの後に行われたようである。壺底は剥離しているが、円盤充填によるものと思われる。

長頸壺(31)～(37)　(36)は大形で体部はやや偏平、口縁端部は外に面をもつなど他のものと異なる要素が多い。(37)は壺の肩部と思われるが、小片であるため長頸壺である確証はない。ヘラによる３条の沈線が認められ、絵画の一部であるかもしれない。(34)の肩部には、刺突による列点文が施され、(33)には一対の「U」字状の赤彩が施される。摩滅が激しいものも多いが外面はヘラミガキにより調整されるものと思われる。しかし、(31)は器壁の凹凸が激しく、(32),(35)はハケ目が認められることから、これらのヘラミガキは非常に雑であったものと考えられる。また、(32),(36)のハケ目は非常に浅く、ナデととることもできる。

高杯(38)～(43)　いずれも杯部を欠損している。「ハ」字に開く脚をもつもの(38),(39),(42),(43)と筒状のもの(40),(41)に細分できる。(38)は小形で、ヘラによる５条の沈線を巡らし、(42)は４本／0.8㎝の櫛状工具による横線が４段に施される。(41)は、乾燥不十分でヘラミガキが行われたためか、ナデに近い状態で、さらに同一工具により筒部上端に7条、下端に２条の浅い沈線を巡らす。沈線は左回りに施されたようである。さらに下端の沈線の下には、雑な波状文が巡る。これもヘラミガキと同一工具で施されており、文様として行ったのか波状にヘラミガキしただけなのかはっきりしない。透かし孔は多様で、(38)は８個１組で４方に施し、さらに裾部にやや大きな円孔を１個４方に空ける。(39)は４方２段に、(41),(42)は４方１段に、(43)は３方２段に空けている。また、(39)は２ヶ所に穿孔の失敗が認められ、(43)は穿孔位置が均等でなく、あたかも４方に空ける予定であったかの様である。

壺(44)～(48)　まっすぐ外方へ開く口縁部をもつもの(45),(46)と受け口状のもの(44),(47),(48)がある。(45)は口縁端部外面と肩部にヘラによる刻目、(48)は口縁部外帯下端に刻目、頸部に刺突文をそれぞれ施す。(47)は肩部に６本／1.9㎝の櫛状工具による刺突文、頸部にはヘラによる２状の沈線、口縁部外帯面にはヘラによる刻目と刺突文をそれぞれ施し、壺とすべきかもしれない。(45)のハケ目は11本／１㎝と５本／１㎝の２種類のものが認められる。(44),(45),(48)の外面には煤が付着している。

〈石製品〉

出土したものは(49)のみである。中央がくびれる形態から石錘と思われるが、上下端が面取りされており、別の用途に使用されたものかもしれない。

C．ＳＤ３０１第３層出土の遺物（第39図）

(74)のみ出土した。受け口状の口縁部をもつ壺で、ミニチュア土器としてもよいほど小形である。口縁部外帯面と肩部に、７本／1.1㎝の櫛状工具による刺突文を施す。

2．古墳時代の遺物

SD304第１層、竪穴住居、溝等から出土した。特にSD302からは多量の土師器、須恵器が出土した。しかし、竪穴住居は30数棟検出されているが、周溝

のみのものが多いためか良好な一括資料となるものは少ない。

A. SH302出土の遺物（第40図）

土師器の杯(80)、須恵器の蓋(82)，(83)で、いずれも天井部と口縁部の境の稜は比較的鋭い。(82)は有蓋高杯の蓋であるかもしれない。

B. SH303出土の遺物（第40図）

土師器の甑(84)、須恵器の高杯(81)がある。(81)の波状文は7本／6㎜の櫛状の工具で雑に施している。

C. SH306出土の遺物（第40図）

土師器の杯(85)、壺(88)、甕(86)，(87)、須恵器の蓋(89)、杯(90)～(92)がある。(86)，(87)，(89)～(91)は、最初SD301の第2層で取り上げたが、これらを含む層がSH306の埋土であることが判明したため、ここで取り扱うことにした。(86)の内面は粘土紐接合痕が明瞭に残る。(87)は摩滅により調整が不明確であり、板状工具によるナデと判断したがハケ目が施されていた可能性もある。(86)，(87)とも外面に煤が付着している。(90)、(92)の体部外面には、焼成前に刻まれた浅い6本の平行沈線があるが(91)には施されていない。

D. SH324出土の遺物（第40図）

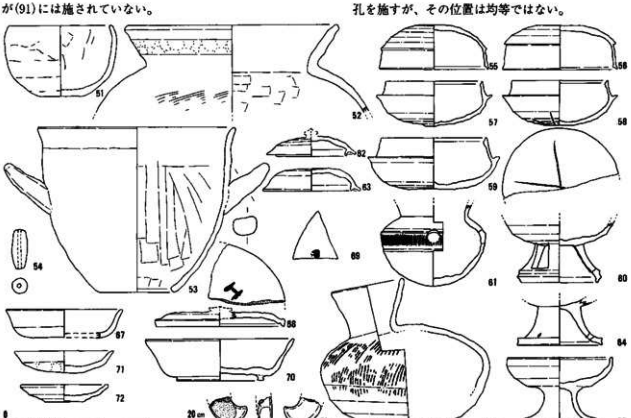
周溝から比較的まとまって出土した。(93)～(100)は土師器椀、(101)は甕、(102)は高杯、(103)，(104)は須恵器の蓋である。土師器椀は、口縁端部が屈曲して外反するもの(93)～(95)、若干外反するもの(99)，(100)、外反せずに内に面をもつもの(96)～(98)の3形態が存在する。体部は、おおむね半球状を呈するが、(98)はやや偏平、(96)は底部が平で器壁が厚く他のものとやや異なる。調整は一部外面未調整のもの(94)，(97)があるほかはナデにより調整され、(97)の内面には板状工具痕が残る。(97)の内面と(102)の杯部内面にはタール状の物質が付着している。さらに(95)の外面の一部にも同様のものが認められる。(102)の杯部は(99)，(100)と同様な形態で、脚柱部は指により強く面取り状にナデられている。

E. SH329出土の遺物（第40図）

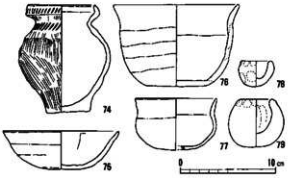
(105)，(106)は土師器の壺、(107)は甕で、(105)，(106)は周溝からの出土である。(105)，(106)共に焼成不良で、大部分が黒斑になっている。

F. SH310出土の遺物（第40図）

(108)は須恵器の高杯である。3方に角形の透かし孔を施すが、その位置は均等ではない。



第38図　SD304第1層出土遺物実測図　（1：4）



74は第3層、75～77は第2層、78,79は第1層

第39図　SD301出土遺物実測図

G. SH313出土の遺物（第40図）

(109)は須恵器の杯である。口縁端部には弱い段があり古相を残す。

H. SH314出土の遺物（第40図）

土師器の甕(110)、ミニチュア土器(111)、須恵器の蓋(112),(114)、杯(113),(115)がある。須恵器蓋は口縁部と天井部の境が凹線のもの(112)と弱い稜をもつもの(114)がある。須恵器蓋、杯の口縁端部は(112),(113)は段、(114)は弱い面、(115)は浅い沈線と様々であるが、丸くおさめるものはない。

I. SH315出土の遺物（第41図）

図示できるものは(118)のみで、土製の紡錘車である。

J. SH312出土の遺物（第41図）

(119)は土師器の椀、(120)は須恵器の高杯、(121),(122)は蓋、(123)は杯である。(120)は円形の透かし孔を3方に空けるが、その位置は均等でない。(121)の天井部外面は⅓をロクロケズリし、口縁部との境に弱い稜をもつのに対し、(122)では未調整で稜も消滅している。

K. SH311出土の遺物（第41図）

(124)は須恵器の蓋である。天井部と口縁部の境に沈線を巡らす。

L. SK302出土の遺物（第41図）

(116),(117)は、土師器の甕である。両者とも球形の体部をもつものと思われるが、(116)は体部外面をヘラミガキし、口縁部も弱い二重口縁を呈し、壺と呼ぶべきかもしれない。体部内面にはヘラ状工具で掻き取ったような痕跡が認められる。

M. SK306出土の遺物（第41図）

(125),(126)は土師器の椀である。両者とも粘土紐接合痕が明瞭に残る。

N. SK307出土の遺物（第41図）

(127)は土師器の椀である。内面のナデは板状工具による。

O. SK308出土の遺物（第41図）

(128)は土師器の椀である。焼成不良のためか大部分が黒斑である。

P. SK317出土の遺物（第41図）

(129)は土師器の甕である。体部外面は、ハケ目が認められずナデにより調整している。

Q. SK303出土の遺物（第41図）

(130)は土師器のミニチュア土器である。甕の形態で、口縁部は横ナデ、内面はナデにより調整される。

R. SK316出土の遺物（第41図）

(131)は滑石製有孔円盤である。直径約2.5㎝の円孔が一対空けられる。

S. SK309出土の遺物（第41図）

(132)は須恵器の蓋である。口径に比して器高が高く天井部外面の⅓以上をロクロケズリするが、口縁部との境の稜は鋭さに欠ける。

T. SK305出土の遺物（第41図）

(133)は須恵器の蓋である。口径16㎝以上の大形のものである。

U. SD304第1層出土の遺物（第38図）

この層には古墳時代の遺物だけでなく、飛鳥時代から平安時代までのものが混在する。

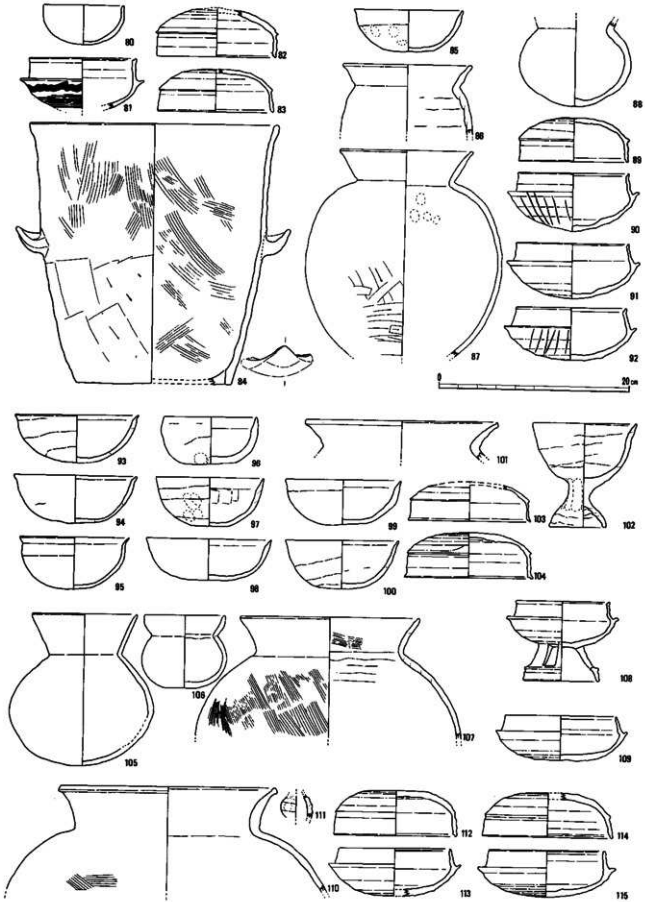
〈土師器〉

(51)は椀、(52)は甕、(53)は甑である。(51)は粘土紐接合痕を残し、内面のナデは板状工具による。(52)の口縁部のヨコナデは上半のみのため指頭圧痕が多く残る。内面のナデは板状工具によるが、外面のハケ目は非常に浅いものでその後軽くナデているようだ。(53)は砲弾に近い形態を呈し、内外面にハケ目は認められず板状工具によるナデで調整される。棒状の把手は接合しなかったが、図上で合成した。

〈須恵器〉

蓋(55),(56)　天井部は、(55)が丸味をもつのに対し、(56)は平である。両者とも天井部外面のほとんどをロクロケズリするが、(55)は非常に丁寧である。しかし、口縁部との境の稜は(56)の方が高く鋭い。

杯(57)～(59)　(59)は他のものより口径が大きく、



80, 82, 83はSH302、81, 84はSH303、85～92はSH306、93～104はSH324、105～107はSH329、108はSH310、109はSH313、110～115はSH314

第40図　古墳時代竪穴住居出土遺物実測図

やや偏平な形態である。いずれも口縁端部内面に面をもつが、(57)は段状になり他のものより鋭い。(58)の底部外面には「×」のヘラ記号が焼成前に刻まれている。

高杯(60)　3方に方形の透かし孔を空ける。倒立状態で焼成されたためか、外面から脚部内面まで自然釉がかかる。

鼓(61)　体部に沈線を2段に巡らし、その間に櫛状工具による刺突文を施す。

〈土製品〉

(54)は土錘である。この時代のものとは限らないが、一応ここで取り上げておく。

〈石製品〉

(73)は、半分を欠損しているが勾玉であろう。さらに片面の大半は剥離状に欠損する。おそらく故意に破壊されたものであろう。

V. SD301第1,2層出土の遺物（第39図）

(75)～(77)は土師器の椀、(78),(79)はミニチュア土器である。椀としたものの形態はそれぞれ大きく異なり、(75)は杯にちかく、(76)は鉢とすべきかもしれない。(77)は須恵器の椀と似た形態である。(75),(76)は粘土紐接合痕が残り、(75)の内面のナデは板状工具による。(79)は無類としたが、摩滅のため断定はできないものの口縁部が欠損しているようにも観察できる。

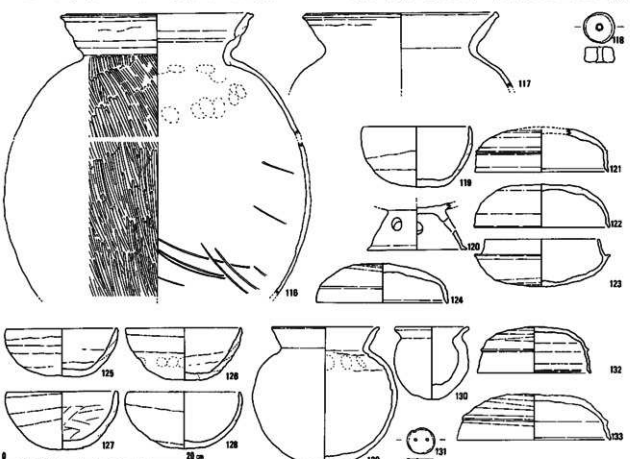
W. SD302出土の遺物（第42図）

小規模な溝からの集中的な出土であるため、一括性は高いものと思われる。

〈土師器〉

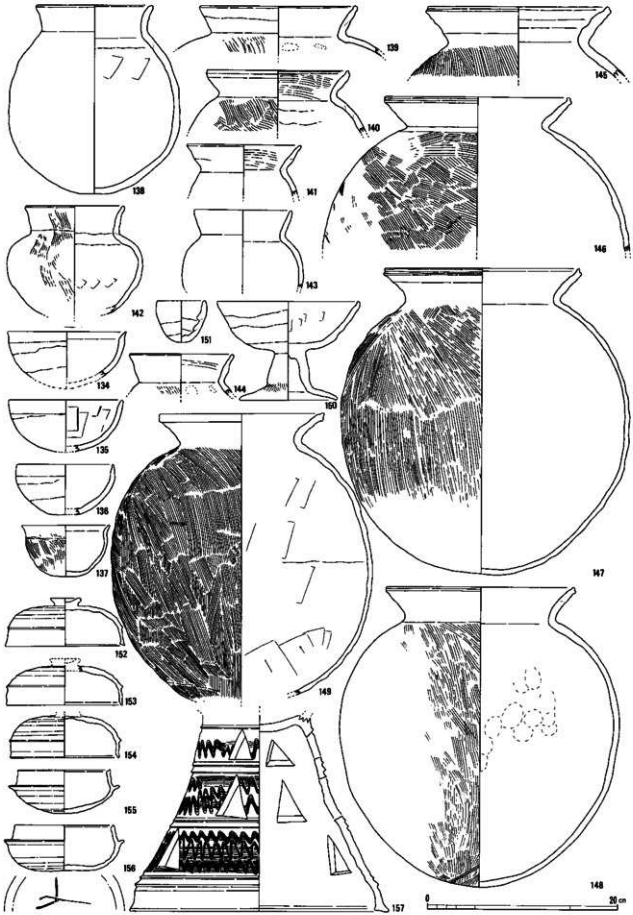
椀(134)～(137)　口縁端部が外反しないもの(135),(136)、若干外反するもの(134)、大きく外反するもの(137)がある。(134)～(136)の外面は、粘土紐接合痕が残るもののナデにより調整されるが、(137)は6本／1cmのハケ目である。(135)の内面には板状工具の痕跡が残る。

甕(138)～(149)　やや下膨れの体部のもの(138)と球形のもの(139)～(149)がある。後者は口径12cm以下の小形のもの(141)～(144)、14cm～16cmの中形



118はSH315、119～123はSH312、124はSH311、116,117はSK302、130はSK303、125,126はSK306、127はSK307、128はSK308、129はSK317
132はSK09、131はSK316、133はSK305

第41図　古墳時代遺物実測図　（1：4）



第42図　ＳＤ302出土遺物実測図　（１：４）

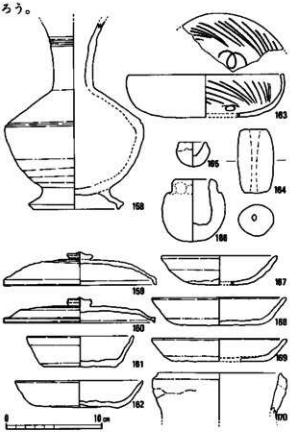
のもの(139),(140)、20cm前後の大形のもの(145)～(149)に分類できる。(140),(146)～(148)の口縁端部外面には一条の沈線または凹線が巡る。調整は、外面ハケ目、内面ナデであるが、(138)は摩滅も激しいがハケ目は確認できず、下半をヘラケズリするようである。(145)はハケ目の原体幅が確認でき、7本／1.6cmである。内面のナデは、板状工具によるものが多く、(138),(139),(142),(143),(147)～(149)でその痕跡が確認できる。(139)の口縁部には粘土紐接合痕が残る。

高杯(150)　杯部には粘土紐接合痕が残るやや粗雑な調整である。脚裾部外面にはハケ目が残るが、他はナデで杯部内面は板状工具による。

ミニチュア土器(151)　ミニチュアの鉢であるが、粘土紐で成形している。

〈須恵器〉

蓋(152)～(154)　いずれも中央が窪んだつまみの付くもので、高杯の蓋である。(154)は天井部外面の下半のみに自然釉がかかる。重ね焼きのためであろう。



158は SH318、159は SB302、160は SB323、161は SD308、162は SB341
163,164は SD326、165は SB346、166は SB304、167～170は SK310

第43図　飛鳥・奈良時代遺物実測図　(1：4)

杯(155),(156)　(156)は口径が大きくやや偏平な形態で、底部外面にヘラ記号が刻まれる。

器台(157)　受部を欠損しているが大形のものである。2条1組の凸線を3段に、受部との境近くにも1条の凸線を巡らす。これらの凸線間はカキ目で調整し、その後9本／1.1cmの櫛状工具により波状文を施す。波状文は、上部が1段、中央部が2段、下段は3段に施される。施文順は下から上で、左回りである。さらに三角形の透かし孔を4方3段に空ける。受部内面には同心円文が残り、脚部下端の一部は焼成不良になっている。

3．飛鳥時代の遺物

掘立柱建物の柱穴出土の小片がほとんどで、図示できるものはＳＨ318、ＳＤ304第1層に若干あるのみである。

A．ＳＨ３１８出土の遺物（第43図）

(158)は須恵器の長頸壺である。頸部に2条、肩部に1条の沈線を巡らす。頸部から肩部と脚部に自然釉がかかり、脚部は焼き歪みが大きい。

B．ＳＤ３０４第１層出土の遺物（第38図）

(62),(63)は須恵器の蓋、(64),(65)は高杯、(66)は平瓶である。(62)はかえりが口縁部より下に突き出るが、(63)は口縁部内におさまる。また、前者のつまみは欠損しているが、後者のつまみは元々付けられておらず、ヘラ切り未調整のままである。したがって杯とした方がよいかもしれない。天井部外面に小さく「×」のヘラ記号が焼成前に刻まれている。(64)の透かし孔は、ヘラ状工具により刺突状に空けられる。古墳時代としたほうがよいかもしれない。(66)は口縁部内面まで自然釉がかかり調整が不明確だが、体部上半はタタキ、下半はロクロケズリである。

4．奈良時代の遺物

遺物の大半が掘立柱建物柱穴からの出土であるため、飛鳥時代のものと同様小片がほとんどで、良好な一括資料に恵まれなかった。

A．ＳＢ３０２出土の遺物（第43図）

(159)は須恵器の蓋である。丸味のある天井部であるが、ロクロケズリの範囲は狭い。

B．SB304出土の遺物（第43図）

(166)はミニチュア土器である。強い指押さえによって口縁部を成形する。

C．SB323出土の遺物（第43図）

(160)は須恵器の蓋である。平らな天井部から屈曲する口縁部をもつ。

D．SB341出土の遺物（第43図）

(162)は土師器の杯である。内外面ともナデにより調整するが、口縁部は底部との境までヨコナデする。

E．SB346出土の遺物（第43図）

(165)はミニチュア土器である。口縁部は、指押さえにより成形される。

F．SK310出土の遺物（第43図）

(167)～(169)は土師器の杯、(170)は製塩土器と思われる。(168),(169)は底部から屈曲して立ち上がる口縁部で、底部近くまでヨコナデするが底部は未調整である。(167)は底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、やや粗製のものである。

G．SD308出土の遺物（第43図）

(161)は須恵器の杯である。底部外面は未調整であるが、口縁部との境を弱く1周ロクロケズリする。

H．SD326出土の遺物（第43図）

(163)は土師器の杯、(164)は土錘である。(163)は内弯する口縁部で、内面に粗い放射とラセン暗文を施す。さらに底部外面のナデも雑である。

J．SD304第1層出土の遺物（第38図）

(67)は土師器の杯、(68)は須恵器の蓋、(69),(70)は須恵器の杯である。(67)の口縁部は底部との境近くまでヨコナデされるが、底部外面は未調整である。(69),(70)の底部外面も未調整であり、(68)は天井部をロクロケズリするがその範囲はせまい。(68),(69)には墨書がある。(68)のものは「工」と読めなくもないが、文字というよりも「H」状の記号と考えた方がよいかもしれない。(69)は小片であるが杯の底部であろう。墨書は外面で、「田」と読める。しかし「男」等の一部である可能性が大きい。

5．平安時代中期の遺物

SH316,317、SD303、SZ301から、土師器、黒色土器を中心に多量の遺物が出土した。黒色土器はすべてB類である。

A．SZ301出土の遺物（第44図）

〈土師器〉

杯A1(171)～(177)　底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもち、端部が外反するもの。口径10.4cm～11.6cm、器高2.1cm～2.8cmのものがあるが、法量による細分は不可能である。口縁部の1/4～1/3をヨコナデし、底部外面は、指頭圧痕が残る程度に軽くナデる。(171),(174)の外面の一部は、焼成不良のためか黒斑状を呈する。

杯A2(178)～(183)　底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつが、端部は外反せずにそのままっすぐ延びるもの。(179)は赤味の強い色調で口縁端部をつまみ上げることなど他のものと異色である。口径9.2cm～11.4cm、器高1.8cm～2.8cmで、杯A1よりばらつきがやや大きい。調整は杯A1と同じであるが、(183)の内面にはヘラ状工具の痕跡が認められる。(181)の内面の一部は黒斑状を呈する。

杯B(184)～(188)　底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつもの。(188)の口径は9.4cmしかなく、他のもの(11cm前後)よりやや小形である。調整は杯Aと同じである。(187)の底部は、外から内に穿孔されている。

甕(189),(190)　両者とも体部外面にハケ目は認められずナデによるものと思われ、(189)の内面のナデは板状工具による。

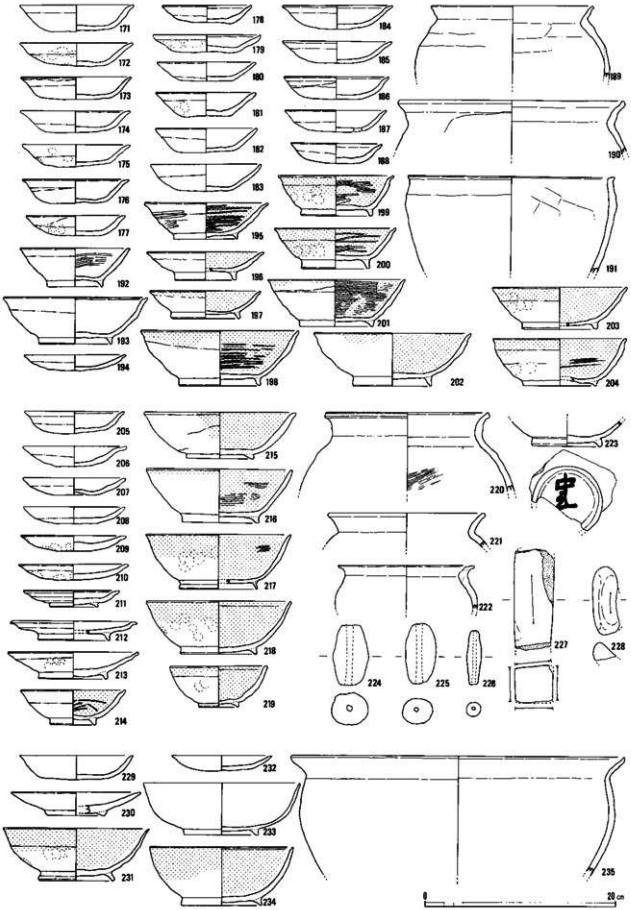
鉢(191)　体部外面は口縁部のみをヨコナデし、他は未調整、内面のナデは板状工具による。

椀(192),(193)　(192)は底部から屈曲してまっすぐ外方に延びる体部をもつ杯に近い形態であるのに対し、(193)は丸味をもって立ち上がる体部である。(192)は、その形態や内面をハケ目で調整するなど黒色土器と共通の要素が多い。したがって黒色土器の未製品とした方がよいかもしれない。

皿(194)　底部と口縁部の境が不明瞭な形態である。

〈黒色土器A類〉

椀Ⅰ(195),(198)～(201)　底部と体部の境が明瞭でちょうど杯Aに高台を張り付けたような形態のもの。口径12cm～13cmの小形のもの(195),(199),(200)と14cm以上の大形のもの(198),(201)がある。外面は未調整であるが、(195)だけは簡単なヘラミガキ



171～204はSZ301、205～227はSD303、228はSB307、229～231はSH317、232～235はSH316

第44図　平安時代中期遺物実測図　（1：4）

を行う。内面は簡単なヘラミガキを行うが、(201)は8本／1cmのハケ目である。(199)のヘラミガキは、見込み、器壁の順に行っていることが看取できる。(195)のいぶしは、口縁端部まで及んでいない。

椀Ⅱ(202)～(204)　丸味をもつ体部のために底部との境は不明瞭になるもの。口径約14cmの(203),(204)と約16cmの(202)があるが、その差は椀Ⅰほど明瞭ではない。外面は未調整で、内面は簡単なヘラミガキを行うが、(203)の内面にはヘラミガキが認められない。

椀Ⅲ(196),(197)　口径に比して器高が非常に低い皿に近い形態のもの。両者とも内面のヘラミガキは認められない。

B. SD303出土の遺物（第44図）

〈土師器〉

杯(205),(206)　(205)は底部から屈曲して立ち上がる口縁部をもつ杯Aであるが、SZ301出土のものより屈曲は弱く、口径もやや小さい。(206)は底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ杯Bであるが、口径、器高とも小さく皿に近い形態である。

皿(207)～(210)　(207)は底部中央がやや上げ底状になる。口縁端部は(207),(208)はそのまま丸くおさめるが、(209),(210)は外反する。

台付皿(211)～(213)　口縁端部が外反するもの(211),(212)と外反しないもの(213)がある。(212)は強いヨコナデのために特に外反が強い。

甕(220)～(222)　口縁部が鋭く屈曲するもの(221)、緩やかに外反するもの(220)、短いもの(222)とその形態は様々である。ハケ目が図示されていないが、摩滅が激しいためハケ目が消滅した可能性もある。

〈黒色土器A類〉

椀Ⅰ(215)～(217)　(215),(217)の口縁端部は若干外反するが、(216)はそのまま丸く納める。外面は(216)はナデ、(215)は未調整、(217)は指頭圧痕が残る程度の簡単なナデと様々である。

椀Ⅱ(218)　内面はヘラミガキを行わずに、板状工具によりナデられている。

小椀(214),(219)　両者とも椀Ⅱを小型にしたものであるが、(214)は口径に比して器高が低い皿に近い形態であるのに対し、(219)は器高が高く丸味が強い。調整も両者は異なり、(214)は外面ナデ、内面ヘラミガキであるが、(219)は外面未調整、内面ナデである。

〈灰釉陶器〉

椀(223)　出土したものは(223)のみで、灰釉は付け掛けされるが底部外面はロクロケズリである。底部外面に墨書がある。墨痕は鮮明であり、安直には「逆」と読める。

〈土製品〉

土錘(224)～(226)　径の太いもの(224),(225)と細いもの(226)がある。

〈石製品〉

砥石(227)　四面とも使用痕が認められる。

C. SB307出土の遺物（第44図）

(228)は砥石であるが、特に加工した痕跡は認められず、自然石をそのまま使用しているようである。混入遺物であるかもしれない。

D. SH317出土の遺物（第44図）

〈土師器〉

(229)は、あえて分類するなら杯Aか。口縁部には焼成不良のためと思われる黒斑がある。(230)は台付皿である。器壁は非常に厚い。

〈黒色土器A類〉

(231)は椀Ⅱである。薄い器壁で、比較的高い高台を張り付ける。摩滅のために内面のミガキの有無は確認できない。

E. SH316出土の遺物（第44図）

〈土師器〉

(232)は杯Bに近い形態の皿、(233)は椀、(235)は甕である。(233)は椀としては底部が広い形態で、外面は未調整かもしれない。(235)は鍋に近い形態で、調整にはハケ目を用いない。

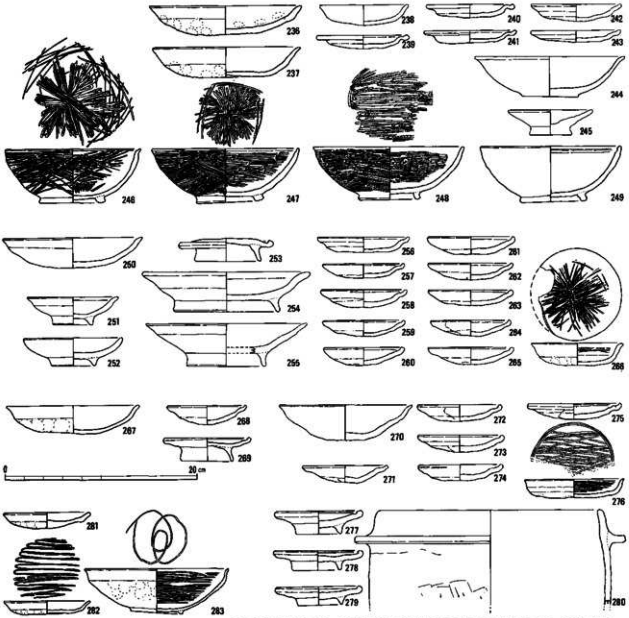
〈黒色土器A類〉

(234)は椀Ⅱである。丸味の強い体部で口縁端部内面に沈線を巡らす黒色土器B類に多い形態である。摩滅により調整不明であるが、見込みには平行ミガキが施されていることがわかる。

6. 平安時代後期の遺物

調査区北西隅の小土坑SK320～322の埋納遺物やSZ302等比較的良好な一括資料に恵まれた。

A. SZ302出土の遺物（第45図）



236～249はSZ302、250～266はSK322、267はSD333、268,269はSK321、270～274はSK320
275,276はSB326、277～280はSK318、281～283はSK304

第45図　平安時代後期～鎌倉時代遺物実測図　（1：4）

〈土師器〉

杯(236),(237)　両者とも底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ杯Bである。口径15cm以上を測る大形のものである。両者とも底部外面は未調整で指頭圧痕を多く残す。

皿(238)～(243)　(238)は口径に比して器高が高く杯に近い形態である。(239)～(243)は口縁部が「て」字状に屈曲するが、(242),(243)はその屈曲が弱い。外面の調整はナデのもの(238)～(240)と未調整のもの(241)～(243)がある。

〈ロクロ土師器〉

(244)は椀、(245)は皿である。両者とも粘土塊から糸切りにより切り離されるが、高台を意識してやや下方で切り離されている。

〈瓦器〉

椀(246)～(249)　いずれも厚い器壁で幅の広い角形高台を張り付ける出現期に近い瓦器である。(249)は摩滅のためミガキが図示できなかったが、他のものと同様なミガキが施されるものと思われる。しかし胎土は砂粒を含む粗いものである。口縁端部内面には一条の沈線を巡らすが、(248)はそのまま丸くおさめる。ミガキの様子はそれぞれ若干異なる。(246),(248)の外面のミガキは5分割で行われるが、(246)は4分割である。見込みのミガキは菊花状の

もの(246),(247)と平行のもの(248)がある。(246)は体部内面のミガキの後に見込みを行うが、(247)は逆である。(248)の見込みのミガキは、平行に行った後、直角に方向を変えて再び平行に行う。後の見込みのミガキは体部内面のものの後に行っているが、最初の見込みのミガキと体部内面のものの前後関係は不明である。

B. SK322出土の遺物(第45図)

〈土師器〉

杯(250)　底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ杯Bである。底部外面はナデにより調整される。

台付皿(251)～(255)　小形で小椀に近い形態のもの(251),(252)、口縁端部を内に巻き込み高い高台を張り付けるもの(253)、大形で高い高台を張り付けるもの(254),(255)がある。(251),(254)の口縁端部は外反するのに対し(252),(255)はそのまま丸くおさめる。(255)の外面は未調整であるが、他はナデにより調整される。(251)の内面は板状工具による。

皿(256)～(265)　すべて口縁部が「て」字状に屈曲する。(256)～(258)は屈曲が比較的強いのに対し、(259)～(265)は弱く直線に近い。(258)は口縁端部内面に1条の沈線を巡らす。外面の調整は、すべて簡単なナデまたは未調整で、(257)の口縁端部には煤が付着している。

〈瓦器〉

(266)は皿である。口縁部内面と見込みにはヘラミガキを施すが、外面には認められない。

C. SD333出土の遺物(第45図)

図示できたものは土師器の杯(267)のみである。底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ杯Bで、底部外面は未調整である。

D. SK321出土の遺物(第45図)

(268),(269)とも土師器の皿であるが、(269)は細く高い高台を張り付ける。両者とも口縁部はわずかに「て」字状に屈曲する。

E. SK320出土の遺物(第45図)

出土したものは全て土師器である。

杯(270)　杯Bに似た形態であるが、口径、器高とも大きく半球状を呈する。雑な調整のため器壁の凹凸が激しい。

皿(271)～(274)　口縁端部は「て」字状に屈曲するが、SZ302のものに比べてその屈曲は非常に弱く痕跡程度である。(274)の口縁部外面には1条の浅い沈線が巡る。(271),(272)の底部外面はナデで調整するのに対し、(273),(274)は未調整である。

F. SB326出土の遺物(第45図)

(275)は土師器の皿、(276)は瓦器の皿である。口縁部はSZ302のものと同様大きく「て」字状に屈曲するが、口径が大きく偏平な形態である。(276)の見込みのミガキは斜格子状で、器壁の前に施される。

G. SK318出土の遺物(第45図)

(277)～(279)は土師器の皿、(280)は土師器の羽釜である。(277)～(279)は、口縁部がわずかに「て」字状に屈曲し、高台を張り付ける。高台は、SK321のものと比べ低く厚いものである。(280)の体部下半は上から下へヘラケズリされる。

H. SD304第1層出土の遺物(第38図)

(71)は土師器の杯、(72)はロクロ土師器の皿である。(71)は底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ杯Bである。(72)の底部は糸切りにより粘土塊から切り放されたものと思われるが、特に高台を意識した様子はない。

7. 平安時代末期～鎌倉時代の遺物

この時代に属する遺物は極めて少なく、SK304出土のもの以外は、掘立柱建物柱穴から出土した小片である。

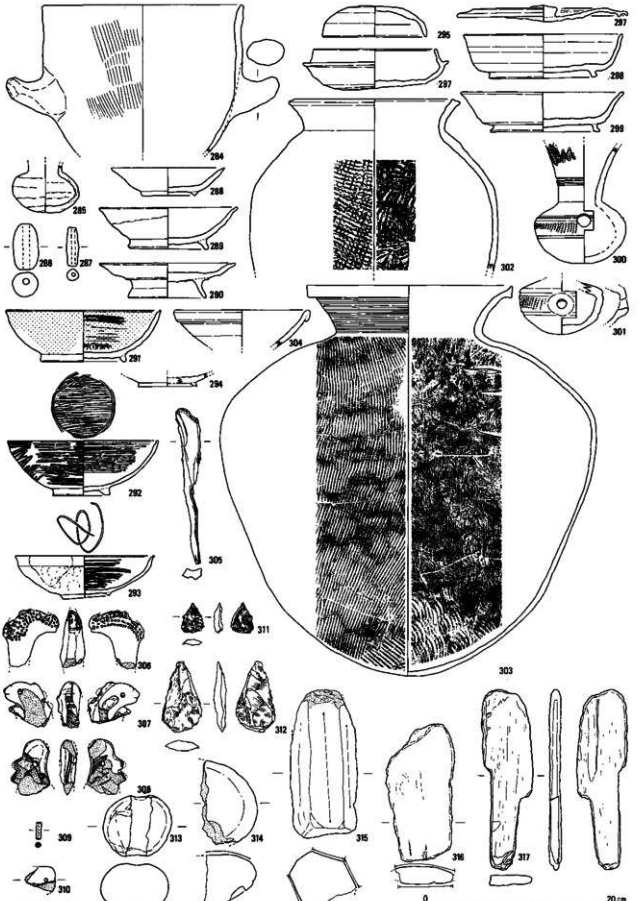
A. SK304出土の遺物(第45図)

(281)は土師器の皿、(282)は瓦器の皿、(283)は同じく椀である。(281)の器壁は全体に厚いが、外面の指押さえが強いため一部極端に薄い箇所もある。(282)は全体に薄く仕上げられており、(283)の見込みのミガキは、連結輪状文2個を重ねる。

8. 包含層出土の遺物(第46図)

〈土師器〉

(284)は甑、(285)はミニチュアの壺、(288),(289)は椀、(290)は台付き皿である。(285)はミニチュア土器ではあるが、粘土紐接合痕が明瞭に残り、粘土紐を巻き上げて成形していることが容易に観察でき



第46図　包含層出土遺物実測図　（1：4）

る。粘土紐接合痕は(289)にも明瞭に認められる。(288)は口径に比して器高が低く杯あるいは皿にちかい形態であるが一応椀としておく。(290)は比較的大形のものであるが、高台や口縁部は薄いものである。

〈須恵器〉

蓋(295),(296)　(295)の天井部外面は未調整であるが、口縁部との境近くを軽く1周ロクロケズリする。(296)は大形で天井部中央が落ち込む偏平な形態であるが、宝珠つまみは比較的高いもので口縁端部内面にはかえりが残る。

杯(297)～(299)　受部をもつもの(297)と受部をもたず、高台を張り付けるもの(298),(299)がある。3者とも口径に比して器高が低い偏平な形態である。(298)の底部外面はナデで調整するのに対し(299)はロクロケズリである。

甕(302),(303)　(303)の口縁部は大きく外反し、端部は若干肥厚して面をもつ。体部も(303)は肩が張るのに対し、(302)は球形に近いものである。(302)の叩き板は木目に直行するように刻まれているためか、一見格子状を呈する。内面のあて道具痕は、菊花を模したような特殊なもので、他に類例を見ない。(303)は普通の同心円文であるが、そのほとんどをナデ消す。

甑(300),(301)　(300)は球形の体部であるが(301)はやや肩が張り注口も若干隆起している。両者とも体部に2条の沈線を巡らし、その間に櫛状工具による刺突文を施している。さらに(300)は同一工具による波状文を頸部にも施す。原体は、(300)が6本／1㎝、(301)が6本／1.5㎝である。

〈黒色土器B類〉

(291)は椀である。外面の炭素吸着は不十分であるが、外面もヘラミガキで調整すること等からB類とした。口縁端部内面に1条の沈線を巡らし、内面のヘラミガキは器壁、見込みの順である。

〈瓦器〉

(292),(293)ともに椀で口縁端部内面に沈線を巡らす。(292)は幅の広い高台を張り付けるが、(293)のものは断面三角形の小さなものである。(292)のヘラミガキは内外面とも施されるが、外面は3分割で行われている。内面は見込み、器壁の順である。(293)の外面はヘラミガキが施されておらず、炭素吸着不十分な部分も大きい。

〈緑釉陶器〉

(294)は椀の底部と思われるが、硬質で、見込みに1条の浅い痕跡程度の沈線が巡る。高台の接地面は弱い段を呈する。

〈白磁〉

(304)は玉縁口縁をもつ椀であるが、釉の発色はやや黄色味が強い。

〈土製品〉

(286),(287)は土錘、(306)は土馬である。(306)は頭部のみの残存である。刺突文により鬣を表現しており、口はヘラによる刻目で現している。ちょうど目にあたる箇所に小石が認められる。目を表現したものか、偶然であるのか判断に迷う。

〈木製品〉

(305)は、先端が焼けていることから火付けの木と思われる。割木を利用したもので特に加工を施しているわけではない。当遺跡からは、このほかにも多数出土しており、自然木の枝を利用したものもある。

〈石製品〉

(307),(308)は子持ち勾玉である。(307)は縦にも半裁されている。故意に破壊されたものであろう。穿孔が目、刻目が口を表現しているようにも見える。(308)の腹部には2条の線刻が認められる。

(309)は管玉、(310)は携帯用砥石と思われるが小片のため確かではない。

(311),(312)は石錘の未製品、(313)は石錘、(314)は摺石と思われる。(314)は使用のためか表面が滑らかである。

(315)は砥石である。もとは六角柱を呈していたものと思われ、現存する4面の内3面が使用されている。

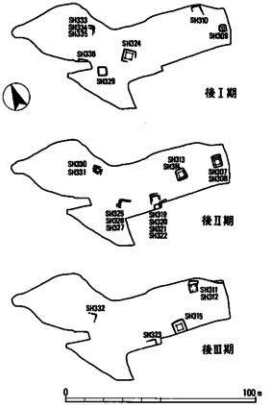
(316),(317)は、石製品とするには疑問もあるが、両者とも表面が磨かれ滑らかである。(316)はこの他には加工を施した痕跡は認められないが、(317)は下からの打撃により両端を剥離させ、一見紡錘形を呈する。(317)と同様なものがもう1点出土している。

V. 結　　語

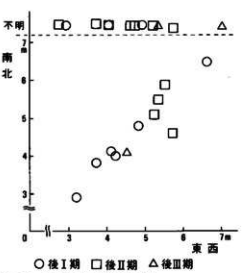
1．竪穴住居

竪穴住居は、全部で37棟を検出した。しかしその残存度は悪く、ほとんどが周溝のみの検出である。そのため竪穴住居とするに疑問の大きいものも数棟含まれ、逆にSD321, SD325の様に溝としたものの中に竪穴住居の一部である可能性が大きいものもある。時期は、弥生時代、飛鳥時代のもの各１棟、平安時代中期のもの２棟のほかは古墳時代のものである。すべて方形を呈するが、弥生時代のものは丸味が強い。また、設定は等高線に直交しており、方向に規則性は認められない。すべてのものが周溝を伴っており、SH310、SH313, 314、SH324では周溝から住居外へ排水溝が延びている。この様な排水施設の充実は、北側に接する丘陵からの湧水に対応するためと思われる。

古墳時代の33棟は、出土遺物に須恵器を伴っており、すべて古墳時代後期に属するものであるが、これらの須恵器を基準に時期の細分を試みることにする。前述したように残存度の悪いものが多いため、良好な一括資料に恵まれたものが少ない。したがって細片に頼る結果となりがちで、時期細分に危険を含むことを断っておく。まず、壷(82), (83), (89), (103), (104)は天井部外面の½以上をロクロケズリし、口縁部との境の稜は比較的高いもので、口縁端部内面に段をもつ。また、有蓋高杯(108)は短脚で立ち上がりは高く端部内面に段をもつ。以上の特徴からこれらの須恵器は陶邑の編年でいうⅠ－４～Ⅰ－５[3]に並行するものと思われ、この時期を後Ⅰ期とする。およそ６世紀初頭前後か。これに属する竪穴住居はSH301～SH303, SH305, SH306, SH309, SH310, SH324, SH329, SH333～SH336の計13棟である。その他の遺構ではSK309, SK313, SK314, SK315, SD302, SD314, SD328, SD329がこれに属する。次に壷(112)は天井部と口縁部の境の稜が消滅し、代わりに沈線が巡る。(114)は稜が残るものの、後Ⅰ期のものとくらべ幅が広く低い。杯(109), (113), (114)は立ち上がりがやや低くなり、口径が大きくなることによりやや偏平な形態となっている。これらの須恵器のロクロケズリの範囲はいずれも½以下であり、陶邑編年Ⅱ－１～Ⅱ－２[3]に並行するものと思われる。この時期を後Ⅱ期とし、およそ６世紀前～中頃に相当するものと思われる。これに属する竪穴住居はSH307, SH308, SH313, SH314, SH319～SH322, SH325



第47図　西区竪穴住居変遷図　（1：2,000）



第48図　竪穴住居規模比較図

～SH327, SH330, SH331の計13棟である。その他の遺構では、SK301, SK306, SK307, SK308, SK316, SD306, SD322がこれに属する。蓋(122)は口縁端部の段は残るものの天井部との境の稜は消滅しており、蓋(124)と杯(123)は口縁端部の段がほとんど消滅している。これらは陶邑編年Ⅱ－3～Ⅱ－4[5]に並行するものと思われ、後Ⅲ期とした。およそ6世紀後半と考えられ、これに属するものはSH311, SH312, SH315, SH323, SH322の計5棟である。その他の遺構では、SB303, SK305, SK317, SD316, SD321, SD323, SD324がこれに属する。SH304, SH337, SK303, SD309, SD310, SD311, SD315, SD317, SD318, SD319, SD325, SD327, SD322からは有効な須恵器の出土がなく、時期の細分は不可能である。

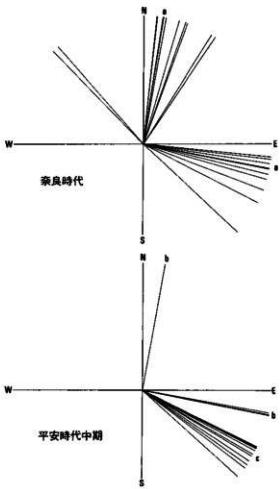
第47図はこれら3期の竪穴住居の変遷を西区について表したものである。後Ⅱ期の場合、竪穴住居の占地が5ヶ所に別れることが顕著に現れ、それぞれほぼ同一場所で2～3回の建て替えが行われている。このことにより、同時に存在した竪穴住居は最大5棟であることが予想できる。この場合それぞれの住居は、約15mの等間隔で建てられており、建て替えの際もこの間隔は守られている。この傾向は、やや不鮮明ではあるもののⅠ期に遡ることが可能であり、Ⅲ期にも受け継がれているようである。伊賀で古墳時代後期の竪穴住居の集落跡が報告されている天道遺跡の場合は、小調査区ではあるものの4棟の同時存在が考えられている[6]。しかしその間隔は約5～20mと様々であり、それぞれ同一場所での多数の建て替えはない。西沖遺跡の場合では、この時期の竪穴住居が33棟報告されている[7]が、その間隔はやはり様々である。しかし、同一場所で建て替えるSB38～SB45と、SB86～SB96の2群が注目され、その間隔は約18mで当遺跡の場合と似た結果となる。一般集落において宅地としての占有の永続化は7世紀初頭とされる[8]。しかし当遺跡では、6世紀にはその傾向が認められることになり、より先進的あるいは上級な集落であったようである。

次に、第48図は後Ⅰ～Ⅲ期の竪穴住居のうち東西、南北のいずれかの規模が明確なものを比較したものである。後Ⅰ期のものは一辺5m未満の小規模なものがほとんどであるが、後Ⅱ期になると一辺5～6mのやや規模が大きなものが増える。後Ⅲ期では規模の明確なものが少なく傾向をつかむのが困難であるが、後Ⅱ期の傾向がそのまま継承されている可能性がある。後Ⅲ期のSH315は一辺約7mの当遺跡最大規模で他のものを圧倒している。後Ⅰ期ではSH324がやや規模が小さいものの一辺約6.5mで他のⅠ期の建物より圧倒的に大きいものである。後Ⅱ期ではこの様な建物は存在しないが、調査区外にある可能性は残されている。これらは、特定の有力世帯の存在を示すものと考えられよう。

2．掘立柱建物

掘立柱建物は57棟を検出した。時期は各時代にわたっており、古墳時代のもの1棟、飛鳥時代のもの10棟、奈良時代のもの22棟、平安時代中期のもの16棟、平安時代後期のもの2棟、平安時代末期～鎌倉時代のもの6棟である。

多数検出した奈良時代と平安時代中期のものにつ

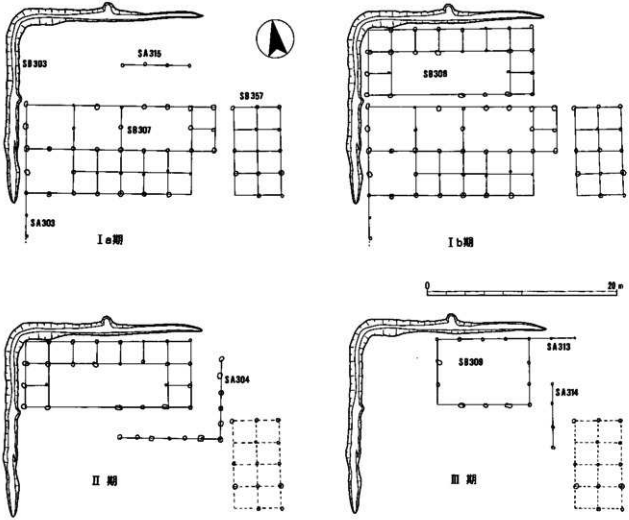


第49図　掘立柱建物棟方向比較図

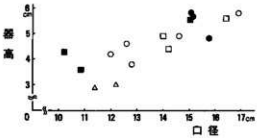
いて、棟方向を第49図に表してみた。奈良時代のものは棟方向のばらつきが大きいものの、図中aのN9°Eとそれに直行するものに多少の規則性が認められる。この一群は、第一次、第二次調査で検出した大型掘立柱建物群とも方向をほぼ揃えるものである。なかでもSB338とSB341は一辺70cm以上の大型の掘形をもち、北側梁行を揃えて建てられている。また、これを東に延長すると同様な掘形をもつ長大な建物SB321の南側梁行とほぼ揃うなど規則的な配列が認められる。また、これらとは方向が異なるものの奈良時代の掘立柱建物は北側の丘陵際でも検出された。さらに丘陵南斜面に広がっていくことが予想され、第一次、第二次調査結果と合わせると、かなり広範囲に分布していることが明確となった。

次に平安時代中期のものであるが、図中bのE11°Sとそれに直行する一群、同じくcのE20°～40°Sの一群に明確に別れる。b群の建物が中世的な総柱の形態をとることから、c群→b群の変遷が考えられる。b群の建物は、区画溝(堀)を伴う大型の建物を中心に、それに付属すると思われるSB324、竪穴住居SH316, SH317で構成される。

区画溝SD303内には、SB307～SB309, SB357の4棟の掘立柱建物と、SA303, SA304, SA313～SA315の5棟の柱列が検出されている。これらの建物は重複して建てられているものの、柱穴の切り合いは少なくSB308→SB309、SB307→SA304の新旧関係が検出できたにとどまる。SA304は、SB308あるいはSB309を逆L字状に囲む構列と考えられ、これによりSB307→SB308→SB309と変遷するものと思われる。SB357は、SB307と柱通りを揃えており、方向が1°異なるものこれに付属する建物と考えて良いだろう。これら2棟に構列SA303, 305を加えⅠa期



第50図　掘立柱建物変遷図　(1：400)



	椀Ⅰ	椀Ⅱ	椀Ⅲ
SZ301	○	□	△
SD303	●	■	

第51図　黒色土器法量比較図

と考えた。

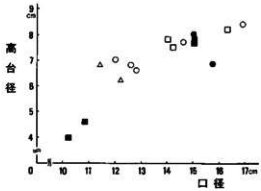
次にSB308であるが、SB307の北側に柱通りを揃えて建てられている。しかし両者の間隔は1.3mしかなく、同時に存在したとすれば非常に接近した建物となる。北と西側をSD303によって限定されているため柱通りが偶然揃うことも十分考えられ、同時存在の証明となり得ない。しかし、これらを承知のうえで同時存在の可能性を考えてみたい。SB307はSD303にほとんど接するように建てられており、北側にSD308を配すればちょうどSD303で囲まれた区域いっぱいに建物が配置されることになるからである。この2棟が並存した可能性をⅠb期とた。

SB307が廃絶した後にSA304が建てられ、これをⅡ期とした。Ⅲ期では、SB308は縮小してSB309に建て替えられ、柵列SA313, SA314が伴う。Ⅲ期の建物は、方向がE10°Sで他の時期より1°異なる。Ⅰ期の建物としたSB357は方向ではⅢ期の建物に揃うことになる。ここではⅠ期の建物と考えたが、Ⅲ期であるか、あるいはⅠ期からⅢ期まで存続した可能性も考えられよう。しかし、Ⅰb期で最盛期をむかえ、その後徐々に縮小、衰退してく傾向にあると推測されるので、SB357はⅠ期に属するものと考えられる。

これら平安時代中期の建物は、後述する遺物の検討により10世紀中～後半に属し、この頃側柱建物から束柱をもつ中世的な総柱建物への移行があったことを示す貴重な資料となるものである。

3．黒色土器

伊賀地方の黒色土器は、大門遺跡[9]、神部遺跡[20]、上寺遺跡[11]等でわずかに小片が報告されているにとどまっていた。しかし、平成元年度に森脇遺跡[12]、同2年度には浮田遺跡[13]からの出土があり徐々にではあるが資料の蓄積が進んでいる。そして今回の調査では、純粋な一括資料ではないもののSZ301、SD303から比較的まとまって黒色土器が出土した。



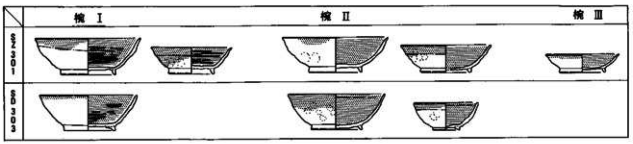
SZ301は、既述したように整地と思われる層の一部から集中的に土器が出土したもので、土師器の杯と共にA類の椀が出土した。図示できたものは(195)～(204)の10個体である。

SD303は、SB307に伴う区画溝で、SB307の柱穴がSZ301を切るため、遺構のうえではSZ301→SD303の順が確認できる。図示できたものは(214)～(219)の6個体で、すべてA類の椀である。

既述したように平らな底部から屈曲してまっすぐ外方に立ち上がる体部をもつものを椀Ⅰ、底部から内弯気味に立ち上がる体部をもつものを椀Ⅱ、椀Ⅱに似た体部だが口径に比して器高が非常に低い皿に近い形態のものを椀Ⅲとした。

第51図は口径と器高、口径と高台径の関係を比較したものである。SZ301では、椀Ⅰ、椀Ⅱ、椀Ⅲが混在する。椀Ⅰは口径14cm以上の大形のものと13cm以下の小形のものに分かれる。椀Ⅱも大小が認められるが、その差は椀Ⅰより小さく曖昧である。また、両者とも個体差が大きい。それに対してSD303では、椀Ⅲは出土していない。やはり大小が認められ、大形のもは椀Ⅰ, 椀Ⅱともに個体差が少なく口径15cm、器高5.3cm前後に集中する。さらに小形のものは椀Ⅱのみで、口径の縮小が激しく、いわゆる小椀と呼ばれる形態を呈し、別器種となるまでにその差が拡大する。

遺構から得たSZ301→SD303の時間的流れにたっ



第52図　黒色土器対象図（1：6）

て言い換えると椀ⅠはSZ301ですでに大小2形態が存在するが、SD303では小形のものが消滅した可能性がある。椀ⅡもSZ301で大小の分化が認められ、SD303では別器種へと発展する。小形のものは瓦器の小椀へつながるものであろう。大形のものは椀Ⅰ、椀Ⅱを問わず法量の規格化が進むようである。椀ⅢはSZ301にのみ存在し、大小の分化は認められない。また、両遺構間では、口径に対する高台径の縮小は認められず、時期差は非常に小さいものと考えられる。このことはSZ301が、SD303, SB307等の整地層内の検出であることとも矛盾しない。

次に実年代であるが、SD303で共伴する灰釉陶器椀(223)は、底部外面をロクロケズリするものの灰釉は漬け掛けであることから折戸53号窯式の古段階に比定でき10世紀後半の早い段階[14]であるものと思われる。

少ない資料での検討であるため、以上の事象が当遺跡の黒色土器の様相を正確に表していないかもしれず、まして伊賀地域を表すものになり得ない。しかし、今後の資料の蓄積により、近い将来当地域の黒色土器の様相が明らかになるものと思われる[15]。

［註］

① 調査担当の上野市教育委員会前川佐久雄氏の御教示による。

② 前掲①に同じ

③ 中村浩ほか 『陶邑Ⅲ』 大阪府教育委員会 1978

④ 前掲③に同じ

⑤ 前掲③に同じ

⑥ 平子弘ほか 『天道遺跡発掘調査報告』 三重県教育委員会 1989. 3

⑦ 森前稔ほか 「西沖遺跡」 『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981. 3

⑧ 山田猛 「7世紀初頭における集落構成の変質」 『考古学研究第28巻第3号』 考古学研究会 1981.12

⑨ 杉谷政樹 「大門遺跡・他」 『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1984. 3

⑩ 駒田利治 「神部遺跡」 『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1981. 3

⑪ 山田猛 「上寺遺跡他」 『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会 1980. 3

⑫ 前掲①に同じ

⑬ 森川常厚 「浮田遺跡」 『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第三分冊－』 三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991. 3

⑭ 斎藤孝正 「猿投窯における灰釉陶器の展開」 『考古学ジャーナル 211』 ニュー・サイエンス社 1982

⑮ 黒色土器については三重歴史文化研究会の方々の助言を賜った。

第1表　竪穴住居一覧表

番号	規模(m、m²)(直角)×(対之)=(面積)	方向	時期	備考
SH301	4.2×(4.0)=16.8	N64°E	古墳後Ⅰ期	SH302に切られる。
SH302	4.1×(4.1)=16.8	N49°E	〃	SH301の建て替え
SH303	4.0×－＝－	N53°E	〃	北に拡土
SH304	3.8×－＝－	N36°E	古墳後？期	SD307に切られる。
SH305	2.9×－＝－	N47°E	古墳後Ⅰ期	SH306に切られる。
SH306	3.2×2.9=9.28	N48°E	〃	SH305を切る。
SH307	5.7×－＝－	N12°E	古墳後Ⅱ期	SH308に切られる。北に張
SH308	5.2×5.1=26.5	N5°E	〃	SH307の建て替え、SH309を切る。北に拡
SH309	3.7×3.8=14	N10°E	古墳後Ⅰ期	SH308に切られる。
SH310	4.9×－＝－	〃	〃	SH311、SD303に切られる。埋土に炭
SH311	5.3×－＝－	N21°E	古墳後Ⅱ期	SH310の建て替え、北に拡土
SH312	4.5×4.1=18.5	N8°E	〃	北に拡土
SH313	5.5×5.9=32.5	N5°E	古墳後Ⅱ期	SH314に切られる。西に拡土
SH314	5.3×5.5=29	〃	〃	SH313の建て替え、東に拡土
SH315	7.0×－＝－	N1°E	古墳後Ⅱ期	
SH316	4.0×4.5=18	N13°E	平安中期	SH317に切られる。
SH317	4.1×(4.0)=16.4	N11°E	〃	SH316の建て替え
SH318	5.0×－＝－	N7°E	飛鳥	SH319を切る。
SH319	5.2×－＝－	N10°W	古墳後Ⅱ期	SH318に切られる。
SH320	4.6×－＝－	N4°E	古墳後Ⅱ期	
SH321	4.0×－＝－	N8°E	〃	SH321とは建て替えの関係
SH322	2.7×－＝－	N1°E	〃	SH323に切られる。
SH323	－×－＝－	N	古墳後Ⅲ期	SH322を切る。北に拡土
SH324	6.6×6.5=42.9	N37°E	古墳後Ⅰ期	
SH325	－×－＝－	N28°E	古墳後Ⅱ期	SH326、327と建て替えの関係
SH326	5.7×4.6=26.2	N31°E	〃	SH325、327と建て替えの関係
SH327	－×－＝－	N32°E	〃	SH325、326と建て替えの関係
SH328	－×－＝－	N40°E	弥生	
SH329	4.8×4.8=23	N20°E	古墳後Ⅰ期	北に炭
SH330	4.7×－＝－	N42°E	古墳後Ⅱ期	SH331に切られる。
SH331	3.7×－＝－	N44°E	〃	SH330の建て替え
SH332	－×－＝－	N34°E	古墳Ⅲ期	北に拡土
SH333	－×－＝－	N33°E	古墳Ⅰ期	SH334、335と建て替えの関係
SH334	－×－＝－	N32°E	〃	SH333、335と建て替えの関係
SH335	－×－＝－	〃	〃	SH333、334と建て替えの関係
SH336	－×－＝－	N37°E	〃	
SH337	－×－＝－	N43°E	古墳後？期	

第2表　掘立柱建物・柱列一覧表

番号	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
SB301	3×3以上	E36°S	4.1	2.7以上	1.2+1.35+1.55	1.35+1.35+？	飛鳥	梁北線の可能性もある。SB302に切られる。
SB302	2×2	N44°W	3.7	3.4	(1.4+2.3)	1.7+1.7	奈良	東西線の可能性もある。SB301を切る。
SB303	2×1	N39°E	3.0	2.5	1.3+1.7	2.5	古墳後Ⅲ	
SB304	4×3	N41°W	6.2	4.1	2.1+1.2+1.3+1.6	1.5+0.9+1.7	奈良	北側に廂
SB305	2以上×2	N34°E	1.5以上	4.5	1.5+?	2.4+2.1	〃	
SB306	4×3	E22°S	8.9	6.7 6.9	2.7+2.7+1.6+1.9 2.4+2.8+2.2+1.5	2.2+2.4+2.1 2.2+2.4+2.3	平安後	歪みが著しい。
SB307	7×4	E11°S	17.15	9.2	2.45+2.45+2.45+2.45+2.45+2.45+2.45	2.3+2.3+2.3+2.3	平安中	東側に2間分の張り出し部あり。
SB308	7×3	E11°S	17.15	6.9	2.45+2.45+2.45+2.45+2.45+2.45+2.45	2.3+2.3+2.3	〃	
SB309	4×3	E10°S	9.6	6.9	2.4+2.4+2.4+2.4	2.3+2.3+2.3	〃	
SB310	5×3	E14°S	11.0	6.6	2.2+2.2+2.2+2.2+2.2	2.2+2.2+2.2	平安末～鎌倉	
SB311	3×2 2×2	E27°S	4.8	3.3	1.5+1.5+1.8 2.4+2.4	1.65+1.65	奈良	桁行柱数が不揃いの変則的建物
SB312	3×2	E15°S	7.5	4.6	2.5+2.5+2.5	2.3+2.3	平安末～鎌倉	
SB313	5×4	N6.5°W	8.25	5.85	1.65+1.65+1.65+1.65+1.65	1.5+1.35+1.5+1.5	飛鳥	SB307に切られる。
SB314	3×2	N3°W	5.1	3.6	1.7+1.7+1.7	1.8+1.8	〃	
SB315	1以上×2	N4°W	1.8以上	3.3	1.8+?	1.65+1.65	〃	
SB316	3×2	N6°E	5.4	3.6	(1.8)+(1.8)+1.8	1.8+1.8	奈良	
SB317	4×3	E1.5°N	6.6	4.95	1.65+1.65+1.65+1.65	1.65+1.65+1.65	飛鳥	東に1間の廂
SB318	4×3	N6°E	6.8	4.05	1.7+1.7+1.7+1.7	1.35+1.35+1.35	奈良	
SB319	3×1以上	E7°S	5.25	1.8以上	1.8+1.8+1.65	1.8+?	〃	
SB320	3×2	E6°S	5.7	3.6	1.65+2.4+1.65	1.8+1.8	〃	

第２表　掘立柱建物・柱列一覧表

番号	規模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m) 桁行	柱間寸法(m) 梁行	時期	備考
ＳＢ321	6×2	N10°E	9.18	2.8	1.53+1.53+1.53+1.53+1.53+1.53	1.4+1.4	奈良	
ＳＢ322	4×2	E11°S	6.4	3.7	1.6+1.6+1.6+1.6	1.7+2.0	〃	
ＳＢ323	4×2	E 9°S	6.6	4.0	1.9+1.6+1.7+1.4	2.0+2.0 1.9+2.1	〃	
ＳＢ324	3×2	E11°S	5.7	3.6	1.9+1.9+1.9	1.8+1.8	平安中	
ＳＢ325	4×2	E11°N	7.4	4.4	1.8+1.8+1.8+2.0	2.6+1.8	平安末～鎌倉	
ＳＢ326	4×4	E13°S	10.1	8.9	2.7+2.0+2.7+2.7（北） 2.4+2.3+2.8+2.7（南）	2.1+2.3+2.1+2.4	平安後	
ＳＢ327	?×2	N20°E	4.1	3.3	?	1.8+1.5	奈良	
ＳＢ328	4×2	E21°S	6.8	4.5	1.7+1.7+1.7+1.7	2.25+2.25	〃	
ＳＢ329	3×2	E 4°S	4.2	3.2	1.35+1.35+1.5	1.6+1.6	飛鳥	
ＳＢ330	4×3	E26°S	7.2	4.5	2.1+1.6+1.6+1.9	1.5+1.5+1.5	平安中	一部開仕切りあり。
ＳＢ331	3×2	E26°S	5.2	3.6	1.9+1.5+1.8	1.9+1.7	〃	
ＳＢ332	3×2	N20°E	5.7	5	2.0+1.8+1.9 2.0+2.0+1.7	2.5+2.5	平安末～鎌倉	
ＳＢ333	(4)×2	E30°S	6.5	3.6	?+?+1.65+1.8 ?+?+1.35+1.65	2.1+1.5	平安中	
ＳＢ334	4×2	N44°W	7.5	3.3	2.1+1.9+1.6+1.9	1.65+1.65	飛鳥	
ＳＢ335	4×2 5×2	E14°S	6.7	3.2	1.8+2.0+1.2+1.7 1.2+1.2+1.4+1.6+1.3	1.6+1.6	奈良	
ＳＢ336	3×2	N 9°E	3.6	3.0	1.2+1.2+1.2	1.5+1.5	奈良	ＳＢ337を切る。
ＳＢ337	5×2以上	E16°S	7.8	3.6以上	1.5+1.5+1.5+1.5+1.8	1.8+1.8+?	〃	ＳＢ336に切られる。
ＳＢ338	2以上×2	N 9°E	4.2以上	4.8	2.1+2.1+?	2.4+2.4	〃	
ＳＢ339	3×2	E27°S	4.5	3.0	1.5+1.5+1.5	1.5+1.5	平安中	
ＳＢ340	3×2以上	E 5°S	3.6	2.4以上	1.2+1.2+1.2	1.2+1.2+?	飛鳥	
ＳＢ341	2以上×2	N 9°E	4.2以上	5.1	2.1+2.1+?	2.55+2.55	奈良	
ＳＢ342	2×2	E6.5°N	4.2	3.8	2.1+2.1	1.9+1.9	飛鳥	
ＳＢ343	4×2	N16°E	6.0	3.6	1.5+1.5+1.5+1.5	1.8+1.8	奈良	
ＳＢ344	2×2	N32°E	2.8	2.8	1.4+1.4	1.4+1.4	〃	
ＳＢ345	3×2	E28°S	5.1	3.2	1.5+2.1+1.5	1.6+1.6	平安中	
ＳＢ346	3×(3)	E43°S	5.4	3.0	1.8+1.3+2.3	(1.5)+(1.5)	奈良	
ＳＢ347	2×2	E35°S	3.6	2.8	1.5+2.1	1.2+1.6	平安中	
ＳＢ348	1×1	N19°E	3.0	2.8	3.0	2.8	奈良	南北線と仮定
ＳＢ349	2×2	N31°E	2.1	2.1	1.05+1.05	0.9+1.2	平安中	
ＳＢ350	3×2	E27°S	4.05	3.9	1.35+1.35+1.35	1.95+1.95	〃	
ＳＢ351	3×(3)	E33.5°S	5.7	(4.05)	1.9+1.9+1.9	1.35+1.35+1.35	〃	
ＳＢ352	2×1	E34°S	6.0	3.0	3.0+3.0	3.0	飛鳥	
ＳＢ353	3以上×2以上	E20°S	5.6以上	3.4以上	?+2.1+2.1+1.4	1.7+1.7+?	平安末～鎌倉	東西線と仮定
ＳＢ354	4×2	N37°E	4.8	3.2	1.2+1.2+1.2+1.2	1.4+1.8	平安中	
ＳＢ355	3×2	E42°S	4.65	3.6	1.5+1.95+1.2	1.8+1.8	〃	
ＳＢ356	4×3	N19°E	7.8～7.95	6.3	1.95+1.95+1.8+1.95 1.8+2.1+1.95+2.1	1.95+2.1+2.25 1.8+2.25+2.25	平安末～鎌倉	やや歪む
ＳＢ357	4×2	N10°E	9.2	4.9	2.3+2.3+2.3+2.3	2.45+2.45	平安中	
ＳＡ301	3	E41°S	4.05	—	1.35+1.35+1.35	—	奈良	掘立柱建物の桁行か？
ＳＡ302	3	E40°S	7.5	—	2.4+2.7+2.4	—	平安中	
ＳＡ303	2以上	N11°E	4.6(以上)	—	2.3+2.3+?	—	〃	ＳＢ307の梁行の延長
ＳＡ304	東西6 南北5	E11°S	東西10.5	南北8.25	東西1.8+1.65+1.8+1.65+1.8+1.8	南北1.65+1.65+1.65+1.65+1.65	〃	ＳＢ308に伴う
ＳＡ305	5	E23°S	7.5	—	1.5+1.5+1.5+1.5+1.5	—	奈良	
ＳＡ306	3	E 9°S	4.5	—	1.5+1.5+1.5	—	〃	
ＳＡ307	3	EW	5.1		1.7+1.7+1.7		飛鳥	
ＳＡ308	2	E43°S	3.4	—	1.7+1.7	—	平安中	掘立柱建物の梁行か
ＳＡ309	2	N31°E	3.3	—	1.65+1.65	—	奈良	掘立柱建物の梁行か
ＳＡ310	5	E31°S	7.5	—	1.5+1.5+1.5+1.5+1.5	—	〃	掘立柱建物の桁行か
ＳＡ311	4	E 6°S	9.4	—	2.4+2.2+2.6+2.2	—	飛鳥	ＳＢ329に伴う
ＳＡ312	7以上	E19°S	10.4以上		1.2+1.4+1.6+1.7+1.5+1.6+1.4+?		ＳＤ331に伴う	
ＳＡ313	2	E10°S	4.8	—	2.4+2.4	—	平安中	ＳＢ309に伴う
ＳＡ314	3	N10°E	6.9	—	2.3+2.3+2.3	—	〃	ＳＢ309に伴う
ＳＡ315	3	N11°E	6.9	—	2.3+2.3+2.3	—	〃	ＳＢ307に伴う

第3表　出土遺物観察表

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
1	S D304 第3層	J－26 將4	弥生土器	広口壺A	口径 15.6 底径 6.7	やや長胴の算盤玉形の体部に大きく外反する口縁部が付く。口縁端部はやや肥厚し外に面をもつ。	外面ハケ目、内面板状工具によるナデ	灰褐色	1㎜の微砂多含	½	口縁部外面に横による羽状刺突文	057-02
2	〃	J－25 將4	〃	〃	口径 15.0	大きく外反する口縁部で端部は外に面をもつ。	外面横ハケ、口縁部内面横ハケ、頸部内面指押え	〃	1～2㎜の砂粒含	½	口縁部外面にヘラによる刺目文	069-02
3	〃	J－26 將4	〃	〃	口径 13.8 底径 7.4	大きく外反する口縁部で端部は折り返し外に面をもつ。	外面横ハケ、口縁部内面横ハケ、体部内面ナデ	〃	〃	口縁部完存	口縁端部外面の上下に刺目文	070-01
4	〃	〃	〃	〃	底径 8.2	やや長胴の算盤玉形の体部であるが、体部中央はやや丸味をおびる。	体部外面上半ハケ目、下半板状工具によるナデ、内面ナデ	灰黄色～灰褐色	0.5～2㎜の砂粒、雲母多含	体部完存	摩滅のため調整不明確	040-01
5	S D304 第2層	L－26 將4	〃	広口壺B	口径 16.0	外反する口縁部の端部を中ほど下まで、外に面をもつ。	外面ヘラミガキ、内面ナデかヘラミガキ	灰黄色	4㎜以下の小石含	½	摩滅のため調整不明確。口縁部外面に羽状刺目文、上面に刺目文。	062-05
6	S D304 第3層	J－26 將4	〃	〃	口径 16.4	〃	外面横ハケ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	灰褐色	1～2㎜の砂粒含	口縁部完存	摩滅のため調整不明確	069-01
7	S D304	P－23 將4	〃	〃	口径 17.4	大きく外反する口縁部の端部を若干垂下まで、外に面をもつ。	口縁部ヨコナデ	灰黄色	5～2㎜の小石含	口縁部ほぼ完存	摩滅が激しく調整不明	075-01
8	S D304 第2層	〃	〃	〃	口径 14.2	外反する口縁部の端部を若干垂下まで、外に面をもつ。	体部外面ヘラミガキ、内面未調整、口縁部ヨコナデ	褐色	3.5㎜以下の砂粒多含	口縁部½ 体部½	摩滅のため調整不明確	035-01
9	〃	L－26 將4	〃	広口壺C_1	口径 8.0 胴径 15.4 底径 3.6	丸味のある算盤玉形の体部に大きく外反する口縁部が付き、端部は外に面をもつ。	体部外面下半ハケ目、他はヘラミガキ、体部内面下半ハケ目、他はナデ	灰褐色	5㎜の小石多含	体部下半½欠損	〃	046-01
10	〃	M－25 將4	〃	〃	底径 3.4	算盤玉形の体部に外反する口縁部が付くものと思われ、頸部に凸帯を貼り付ける。	体部下半内外面ハケ目、上半外面ヘラミガキ、内面ナデ	灰黄色	0.5～3㎜の砂粒含	低部完存	〃	074-02
11	〃	L－26 將4	〃	広口壺C_2	口径 9.2 胴径 17.3 底径 4.0	長球状の体部に外方へ開く口縁部が付く。	外面ヘラミガキ、体部内面板状工具によるナデ、口縁部内面ヨコナデ	灰褐色	2㎜の砂粒含	ほぼ完形	〃	047-01
12	S D304	〃	〃	〃	口径 8.8 胴径 15.2 底径 4.0	〃	体部外面ヘラミガキ、口縁部外面横ハケが残る。	〃	3㎜の砂粒含	口縁部一部欠損	摩滅が激しく調整不明確	057-01
13	S D304 第2層	〃	〃	〃	底径 4.6	長球状の体部に外方へ開く口縁部が付くものと思われる。	内外面板状工具によるナデ	褐灰色～黒褐色	0.5～3㎜の砂粒、雲母含	体部ほぼ残存	摩滅が激しく調整不明確。体部下半に炭素吸着	046-02
14	〃	K－26 將4	〃	〃	底径 3.7	〃	胴部内面未調整、体部内面板状工具によるナデ	灰褐色～暗褐色	0.5～4㎜の砂粒多含	½	摩滅が激しく外面調整不明	062-03
15	〃	L－26 將4	〃	広口壺C_3	口径 9.4 胴径 15.8 底径 5.0	球形の体部に外方へ開く口縁部が付く。	外面タタキ後板状工具によるナデ、内面ナデ	褐灰色～黒褐色	4㎜以下の砂粒含	口縁部½欠損	摩滅のため調整不明確	036-02
16	〃	J－25 將4	〃	〃	口径 8.7 胴径 15.1 底径 4.5	〃	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	灰黄色～黒褐色	0.5㎜～4㎜の砂粒含	〃	摩滅のため調整不明確	047-03
17	〃	L－25 將4	〃	〃	口径 10.2 胴径 14.5 底径 3.8	丸味のある算盤玉形の体部に外方へ開く口縁部が付く。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	灰褐色	5㎜の小石雲母多含	〃	摩滅のため調整不明確、体部に穿孔	036-01
18	〃	K－23 將4	〃	〃	底径 4.6	球形の体部に外方へ開く口縁部が付くものとおもわれる。	体部外面下半ヘラミガキ、上半ナデ、内面ナデ	黄灰色	0.5～5㎜の小石含	体部完存		075-02
19	〃	K－26 將4	〃	〃	—	〃	外面ヘラミガキ、内面ナデ	褐灰色	0.5～1㎜の微砂、雲母含	½	体部上半に2条の櫛描横線文とその間に櫛描波状文	075-03
20	〃	L－26 將4	〃	〃	底径 4.8	〃	外面ハケ目、内面ナデ	灰褐色～黒褐色	0.5～4㎜の砂粒含	体部完存	摩滅のため調整不明確	046-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
21	S D304 第2層	J－26 #4	弥生土器	広口壺C$_1$	底径 4.0	球形の体部に外方へ開く口縁部が付くものとおもわれる。	外面ヘラミガキ、内面上半本調整、内面板状工具によるナデ	褐灰色～灰褐色	0.5～3㎜の砂粒含	¼	摩滅のため調整不明確	062-01
22	〃	J－29 #4	〃	広口壺D	口径 19.6	大きく外反する受け口状の口縁部をもつ。	内外面ナデ	灰褐色	1～3㎜の砂粒含	¼	頸部に櫛描波線文口縁部外面に刺突列点による山形文上下端に附B	068-03
23	S D304 第3層	J－26 #4	〃	縦瓶壺A	口径 5.2 胴高 19.4 底径 5.8	算盤玉形の体部に直立する口縁部が付き端部は肥厚する。	内外面ナデか	〃	2.5㎜以下の砂粒多含	完形	頸部から胴部に櫛描波状文と横線を交互に施す。摩滅のため調整不明確。体部に穿孔？	039-01
24	〃	J－25 #4	〃	〃	口径 6.4 胴高 22.5 底径 5.6	球形の体部に直立する口縁部が付く。	外面ハケ目、内面ナデ	褐灰色～暗灰黄色	1～2㎜の砂粒含	ほぼ完形		069-01
25	S D304 第2層	L－24 #4	〃	縦瓶壺B	口径 9.2	受け口状の口縁部で端部は内に肥厚する。		灰褐色	1～4㎜の砂粒含	½	外面に櫛描波線文を2段施文。摩滅のため調整不明	039-01
26	〃	K－23 #4	〃	縦瓶壺	口径 10.2	球形の体部に短かく外方へ開く口縁部が付く。	体部上半横状工具によるナデ、下半ヘラミガキ、内面板状工具によるナデ	淡黄色～暗灰黄色	6㎜以下の小石多含	¼	摩滅のため調整不明確	051-01
27	〃	K－26 #4	〃	広口壺E	口径 13.0	有段口縁をもち、頸部に馬蹄形に粘土板を張り付ける。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	灰黄色	0.5～7㎜の小石多含	口縁部完存	頸部に刺突文、摩滅が激しく調整不明確	052-01
28	〃	P－23 #4	〃	大型瓶類壺	口径 16.0	若干外反する口縁部で端部は内傾する。	ナデか？	明褐灰色～淡褐色	0.5～5㎜の小石含	¼	摩滅が激しく調整不明確	074-01
29	〃	J－24 #4	〃	壺D壺	口径 9.4 胴高 23.7 底径 5.0	球形の体部に直立する口縁部が付き端部は内に面をつ。	体部外面下半ハケ目、他はヘラミガキ、内面ハケ目か	褐灰色	1～2㎜の砂粒含	ほぼ完形	頸部に櫛描波状文体部外面下半に篠付痕	037-02
30	〃	L－26 #4	〃	鉢付壺	—	下膨れの算盤玉形の体部に脚を付ける。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	暗黄褐色	0.5～4㎜の砂粒、雲母含	体部完存	体部外面に炭素吸着	047-02
31	S D304	K－23 #4	〃	長頸壺	口径 14.2	外方に開く長い口縁部で端部は大きく外反する。	外面ヘラミガキ、内面本調整	純黄褐色	2㎜以下若干含	¼	摩滅が激しい	056-02
32	〃	〃	〃	〃	底径 3.9	直立する長い口縁部をもつ。	体部外面下半ヘラミガキ、他は長いハケ目、内面ナデ	暗茶色	1㎜の砂粒雲母若干含	口縁部欠損		058-02
33	〃	K－26 #4	〃	〃	口径 10.1 胴高 24.2 底径 5.0	長球状の体部にやや外方に開く長い口縁部が付く。	外面ヘラミガキ、内面ハケ目	黄褐色	2㎜の砂粒含	ほぼ完形	頸部と一列の「U」字状赤彩あり	056-03
34	S D304 第2層	S－25 #4	〃	〃	口径 11.6 胴高 26.0 底径 4.4	長球状の体部に直立する口縁部が付き、端部はやや外反する。	外面ヘラミガキ、内面ナデか	褐灰色	4㎜以下の砂粒多含	〃	頸部に一条の刺突列点文あり	058-01
35	S D304	L－23 #4	〃	〃	底径 3.7	長球状の体部に長い口縁部が付くものと思われる。	外面ハケ目、内面ナデ	外：褐灰色、内：黒色	1～4㎜の砂粒多含	¼	摩滅のため調整不明確	037-01
36	S D304 第2層	L－26 #4	〃	〃	口径 15.0	大型で、球形の体部に直立する口縁部が付き、端部は大きく外反する。	外面ヘラミガキ、口縁部内面ヘラミガキか、体部内面長いハケ目	灰褐色	1㎜以下の砂粒多含	½	摩滅のため調整不明確	066-01
37	S D304	L－23 #4	〃	壺	—	壺の頸部と思われる。	内外面ナデか	褐黒色	1㎜の砂粒、雲母含	小片	外面に篠目	091-01
38	S D304 第2層	K－26 #4	〃	高杯	脚径 6.8	「ハ」字に開く短かい脚部。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	純褐色	0.5～3㎜の砂粒含	½	脚上端に5条の沈線、8個1組で四方に円形透し孔	048-03
39	〃	P－23 #4	〃	高杯	—	「ハ」字に開くやや短かい脚。	内面ナデ	純黄褐色	4㎜以下の砂粒多含	脚上半完存	四方円形透孔を2段に施す。摩滅が激しく外面調整不明	048-02
40	〃	L－26 #4	〃	〃	脚径 13.8	柱状の脚部は下端近くで大きく「ハ」字に開く。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	褐橙色～純褐色	3㎜以下の砂粒多含	脚部完存	2個1組で三方に透し孔を施す。	035-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
41	S D304	K－26 柄4	弥生土器	高杯	—	杯状の脚部は下端近くで大きく「ハ」字に開く。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	純褐色	4 ㎜以下の砂粒、雲母多含	脚部完存	脚部の上下端に接した杯部を落ちし、中央に四方円形透し孔を施す。	048-04
42	S D304 第2層	L－25 柄4	〃	〃	—	「ハ」字に開く長い脚	外面ヒラミガキ、内面しぼり痕	灰白色～純褐色	5 ㎜以下の砂粒多含	脚部完存	脚接続部を4段に落ちし、四方円形透し孔を施す。	062-02
43	S D304	J－27 柄4	〃	〃	脚径 11.7	「ハ」字に開く中や短かい脚部で、端部は外に面をもつ。	外面ヘラミガキ、内面ナデ	灰褐色	0.5～3.5㎜の砂粒多含	脚部完存	三方2段に円形透し孔を施す。	035-02
44	S D304 第2層	L－22 柄4	〃	壺	口径 15.5 胴高 10.9 底径 6.4	「く」字に屈く肩曲する短かい口縁部で、端部は受け口状になる。	内外面ハケ目	〃	0.5～3 ㎜の砂粒、雲母多含	¼	体部外面に煤付着	063-01
45	S D304	K－26 柄4	〃	〃	口径 16.6	球形の体部に「く」字に屈曲する口縁部が付き、端部は外に面をもつ。	〃	褐色	4 ㎜以下の砂粒含	¼	口縁端部と頸部に刻目を施す。外面に煤が厚くかかる。	034-01
46	S D304 第2層	M－25 柄4	〃	〃	口径 18.0	「く」の字に屈曲するロ縁部で端部は外に面をもつ。	内外面ナデか	明褐灰色	0.5～5 ㎜の砂粒、雲母多含	¼	摩滅が激しく調整不明	064-01
47	〃	〃	〃	〃	口径 9.4	ゆるやかに外反するロ縁部で端部は上方へ引面し受け口状になる。	内外面ナデ	褐灰色～黒褐色	3 ㎜以下の砂粒多含	¼	ロ縁部外面に刻目、頸部にヘラ沈線、肩部に櫛による斜格円点文を施す。	064-02
48	〃	L－26 柄4	〃	〃	口径 14.0	〃	内外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	浅黄褐色	1～3 ㎜の砂粒、雲母含	¼	口縁部に刻目、頸部に刻文を施す。	062-04
49	〃	O－23 柄4	石製品？	—	長 9.0 重 336.0g	中央がくびれ、上下端は面取りされる。	—	淡灰色	花崗岩	完形		068-03
50	S K312	Q－30 P 5	〃	砥石	—	断面長方形で枕状	—	淡灰色	〃	—	四面とも使用されている。	069-03
51	S D304 第1層	L－26 柄4	土師器	鉢	口径 10.4 胴高 7.5 底径 4.6	小さい底部から内弯ぎみに立ち上がるロ縁部をもつ。	内外面ナデ、内面は板状工具による。	浅黄橙色	2.5㎜の砂粒多含	¼	粘土紐接合痕が明瞭に残る。	053-02
52	〃	K－26 柄4	〃	甕	口径 21.8	体部より「く」字に屈曲して外方へ開くロ縁部で端部は外に折い面をもつ。	体部外面ハケ目後ナデ、内面ナデ。ナデは板状工具による。	純黄橙色	5～1 ㎜の雲母、小石多含	〃		055-01
53	〃	K－25 柄4	〃	鉢	口径 20.4 胴高 17.3 底径 7.8	体部からそのまま上方に延びるロ縁部で端部は若干外反する。	内外面ナデ。ナデは板状工具による。	純褐色	1～2.5㎜の砂粒含	〃		054-01
54	〃	N－25 柄4	〃	土師	9.42g	錘状で、上下端はやや細くなる。	手づくね	純黄橙色	1㎜以下の砂粒多含	完形		054-04
55	〃	K－27 柄4	須恵器	壺	口径 11.4 胴高 4.65	丸味のある天井部から垂下するロ縁部で、天井部との境に稜、端部内面に段をもつ。	天井部外面ロ縁部近くまでロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	3～6 ㎜の小石含	¼	ロクロ右回転	059-01
56	〃	L－26 柄4	〃	〃	口径 12.0 胴高 4.7	天井部から垂下するロ縁部で、天井部との境に稜、端部内面に段をもつ。	天井部外面の3/4をロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	1～3.5㎜の砂粒含	〃	ロクロ左回転 天井部外面に自然釉	051-02
57	〃	K－27 柄4	〃	杯	口径 10.1 胴高 4.8	丸味のある天井部からやや内傾して立ち上がるロ縁部で端部は内に段をもつ。	体部外面の3/4をロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	3㎜以下の砂粒含	〃	ロクロ右回転	059-02
58	〃	J－27 柄4	〃	〃	口径 10.0 胴高 4.75	丸味のある体部から立ち上がるロ縁部で端部は内に段をもつ。	〃	青灰色	1～3.5㎜の砂粒含	〃	ロクロ左回転 底部外面に「×」のヘラ記号	059-06
59	〃	L－24 柄4	〃	〃	口径 11.0 胴高 5.3	やや張平な体部からやや内傾して立ち上がるロ縁部で端部は内に稜・段をもつ。	体部外面の3/4をロクロケズリ、他はロクロナデ	〃	3～5 ㎜の砂粒少量含	¼	ロクロ右回転	059-04
60	〃	M－24 柄4	〃	高杯	脚径 8.0	低脚で三方に透し孔をもつ。有蓋高杯であろう。	杯部外面下部ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	2.5～5 ㎜の砂粒少量含	¼	脚内外面に自然釉がかかる	060-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
61	SD304 第1層	K−27 溝4	土師器	甕	—	球形の体部に円形の往口を空ける。	ロクロナデ	灰色～青灰色	3㎜以下の砂粒含	口縁部欠損	体部に擦による調整痕。胴部に自然釉付着	060-04
62	〃	L−26 溝4	〃	壺	口径 7.4	口縁端部より下方に延びるかえりをもつ。	天井部外面の1/4をロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	0.5～3㎜の砂粒多含	つまみ欠損	ロクロ右回転	059-03
63	〃	J−26 溝4	須恵器	壺	口径 10.3 器高 2.4	かえりは、口縁端部と同じ長さで、つまみは付けられていない。	天井部外面ヘラ切り未調整、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	暗青灰色	2.5㎜以下の砂粒含	ほぼ完形	天井部内面に「×」のヘラ記号	051-03
64	〃	M−25 溝4	〃	高杯	脚径 8.9	低脚で、逆しれは三方に飯列な工具で刺突状にあける。	ロクロナデ	灰白色～明青灰色	0.5～1.5㎜の砂粒含	脚部完存		060-02
65	〃	J−25 溝4	〃	〃	口径 10.9 器高 7.0 脚径 7.6	椀蓋高杯で、偏平な杯部に細く低い脚が付く。	〃	灰白色	2㎜以下の砂粒含	1/4		055-03
66	〃	〃	〃	平底	口径 7.6 器高 15.4	偏平な体部にまっすぐ外方へ開く口縁部が斜方向につく。	底部から体部下半ロクロケズリ、体部上半タタキ、他はロクロナデ	明青灰色～暗青灰色	2.5㎜以下の砂粒含	口縁部若干欠損		055-02
67	〃	K−27 溝4	土師器	杯	口径 12.0 器高 3.0	平らな底部から外方へのびる口縁部で端部は若干外反する。	口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	浅黄橙色	2.0～0.5㎜の砂粒含	1/4		060-03
68	〃	L−26 溝4	須恵器	壺	口径 13.4	平らな天井部で、口縁部はS字状に屈曲する。	天井部外面ロクロケズリ、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	暗青灰色	砂多含む	1/4	ロクロ右回転 天井部外面に墨書	057-02
69	〃	〃	〃	杯	—	高台の付くものと思われる。	内面ナデ、外面未調整	〃	5㎜の小石含	底部小片	底部外面に墨書	057-03
70	〃	〃	〃	〃	口径 15.5 器高 4.4 高台径 9.2	平らな底部から屈曲して外方へまっすぐ延びる口縁部をもち、高台を張底には付ける。	底部外面ヘラ切り未調整、他はロクロナデ	灰色	2㎜以下の砂粒含	口縁部1/4		059-05
71	〃	L−22 溝4	土師器	杯B	口径 10.3 器高 2.35	底部より丸味をもって外方へ立ちあがる口縁部で端部は若干外反する	底部外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	橙色	0.5～2㎜の砂粒含	完形		054-03
72	〃	〃	ロクロ土師器	皿	口径 9.0 器高 1.8 底径 4.1	平らな底部とより外方に開く口縁部をもつ。	底部外面糸切り未調整、他はロクロナデ	純橙色	0.5㎜の微砂、雲母を含む	1/4		054-02
73	〃	K−27 溝4	石製品	勾玉	残存重 20.5g	—	—		滑石	〃	故意に破損か	071-05
74	SD301 第3層	W−65 溝1	弥生土器	壺	口径 7.2 器高 11.2 底径 4.4	小底で受け口状の口縁部をもつ。	外部ハケ目、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	淡黄色	1～3㎜の砂粒含	完形	胴部と口縁部外面に擦による刺突文を施す。	017-03
75	SD301 第2層	〃	土師器	杯	口径 12.0 器高 4.0	半球状の形態で、口縁端部は若干外反する。	内面板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ	明褐灰色～浅黄橙色	0.5～1㎜の砂粒多含	1/4	摩滅のため外面調整不明	017-02
76	〃	〃	〃	鉢	口径 13.0 器高 8.6 底径 6.5	平な底部からやや内弯ぎみに立ちあがる体部で、口縁部は短かく外へ開く。	底部外面未調整、他はナデ	浅黄橙色～明褐灰色	1.5～4㎜の砂粒多含	1/4	摩滅のため調整不明瞭。粘土紐接合痕が明瞭に残る。	010-03
77	〃	〃	〃	椀	口径 8.4 器高 5.4	半球状の体部に外方へ開く口縁部がつく。	口縁部ヨコナデ、他はナデ	純橙色	0.5㎜の微砂、雲母含	1/4		017-02
78	SD301 第1層	〃	〃	ミニチュア鉢	口径 3.0 器高 2.7	半球状の形態を呈する。	内面ナデ、外面弱いナデ	灰白色	1㎜以下の微砂含	完形	黒斑あり	010-02
79	〃	〃	〃	〃	口径 3.2 器高 5.0	〃	外面未調整、内面、指による強い押さえ	浅黄橙色	0.5～1㎜	口縁部1/4欠損		010-01
80	SH302	Y−65 SD1	〃	杯	口径 8.2 器高 4.2	平坦状の形態を呈し、口縁端部は内に開をもつ。	平坦状の外面未調整、内面ナデ、口縁部はヨコナデ	〃	1㎜以下の微砂若干含	1/4	摩滅により調整不明瞭、内面のナデは板ナデか	050-06

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
81	SH302	V－62 覆穴2	須恵器	高杯	口径 11.1	立ち上がりは高く、端部内面は段をもつ。	杯部外面下半はカキメ、他はロクロナデ	灰赤色	1～2㎜の砂粒若干含	口縁部¼	杯部外面に線描状紋文	067-06
82	〃	Y－65 SD1	〃	蓋	口径 12.4 器高 5.0	丸味のある天井部から垂下する口縁部をもつ。口縁部は、天井部との間に弱い段、端部内面に弱い段をもつ。	天井部の¼をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	中々粗	½	ロクロ右回転	050-05
83	〃	〃	〃	〃	口径 12.0 器高 4.5	丸味のある天井部から垂下する口縁部で、天井部との間に弱い段、端部内面に段をもつ。	〃	外：白灰色、内：灰色	4～2㎜の砂粒含	½	ロクロ左回転 外面に自然釉がかかる	056-01
84	〃	W－63 覆穴2	土師器	甕	口径 25.8 器高 27.2	体部からそのまま直立する口縁部は端部で若干外反する。体部中央に一対の鍋平な把手をもつ。	体部外面下半ヘラケズリ、他はハケ目	浅黄橙色	0.5～3㎜の砂粒含	½	摩滅のため換成不明確	085-01
85	SH306	Y－66 P5No1	〃	杯	口径 11.3 器高 4.4	半球状の形態を呈し、口縁端部は強いヨコナデのため若干外反する。	口縁部ヨコナデ、他は指調圧痕が残るがナデ	赤橙色	1㎜以下の砂粒を若干含	½		065-01
86	SH306	Y－67 溝1第2層	〃	壺	口径 13.4	体部から肩負して外方へ開く口縁部で、端部は丸くおさめる。	ナデ	外：暗灰色、内：明褐灰色	0.5～5㎜の砂粒含	½	外面部付着、摩滅により調整不明確	017-03
87	〃	X－66 溝1第2層	〃	〃	口径 13.6	〃	体部外面下半ヘラケズリ、他はナデ	浅黄色～灰褐色	1～4㎜の砂粒多含	½	〃	010-04
88	〃	Y－66 P5No2	〃	壺	—	球形の体部から、まっすぐ外方に開く口縁部がつくりのと思われる。	内面ナデ	橙色	1㎜の砂粒含	〃	内面焼成不良による黒斑	065-03
89	〃	Y－67 溝1第2層	須恵器	蓋	口径 11.4 器高 4.6	丸味のある天井部から垂下する口縁部で、天井部との間に弱、端部内面に弱い段をもつ。	天井部外面の¾をロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	1～3㎜の砂粒を含む	完形	ロクロ右回転、口縁部外面に自然釉がかかる。	016-01
90	〃	X－66 溝1第2層	〃	杯	口径 11.5 器高 6.1	丸味のある天井部から、若干内傾して立ち上がる比較的高いロ縁部をもつ。	体部外面の¾をロクロケズリし、他はロクロナデ	〃	0.5～4㎜の砂粒含	ほぼ完形	体部外面に6本の平行ヘラ状紋 ロクロ左回転	016-04
91	〃	Y－67 溝1第2層	〃	〃	口径 9.8 器高 5.8	〃	体部外面の¾をロクロケズリ、他はロクロナデ	〃	1～2㎜の砂粒含	¾		016-02
92	〃	Y－66 P5No3	〃	〃	口径 11.6 器高 5.5	〃	体部外面の¾をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒多含	ほぼ完形	ロクロ左回転、体部外面に4本の平行ヘラ状紋	065-02
93	SH324	Q－32 SD3	土師器	鉢	口径 12.9 器高 5.0	半球状の体部で、口縁端部は抓曲して外反する。	ナデ	黄橙色	3㎜の砂粒多含	〃	粘土接合痕が明瞭に残る。	061-02
94	〃	〃	〃	〃	口径 12.7 器高 5.0	〃	外面未調整、口縁部ヨコナデ、内面ナデ	〃	2㎜以下の砂粒含	〃		061-04
95	〃	〃	〃	〃	口径 11.4 器高 5.4	〃	ナデ	〃	3㎜の砂粒多含	〃	底部外面に黒色の変色あり、黒斑とは思えない	061-03
96	〃	〃	〃	〃	口径 9.6 器高 5.0	底部から内弯ぎみに立ち上がる口縁部で、端部は内に面をもつ。	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面簡単なナデかあ未調整	浅黄橙色	3㎜の砂粒若干含	¾	摩滅のため外面調整不明瞭	067-02
97	〃	〃	〃	〃	口径 11.2 器高 5.0	半球状の体部で、口縁端部は内に面をもつ。	口縁部ヨコナデ、内面板状工具によるナデ、外面未調整	黄橙色	1㎜以下の砂粒若干含	½	粘土接合痕が残る。内面金属黒斑か。	067-01
98	〃	〃	〃	〃	口径 13.0 器高 4.4	〃	ナデ	浅黄橙色	2㎜以下の砂粒多含	¾	摩滅が激しく調整不明確	061-05
99	〃	〃	〃	〃	口径 12.0 器高 4.6	半球状の体部で、口縁端部は外反する。	〃	黄橙色	1㎜の砂粒多含	ほぼ完形		061-06
100	〃	〃	〃	〃	口径 11.8 器高 5.1	〃	〃	浅黄橙色	4㎜の砂粒若干含	〃	粘土接合痕が明瞭に残る。	061-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
101	SH324	Q－32 SD3	土師器	甕	口径 20.0	「く」字に屈曲する口縁部で、端部はつまん上げられた外に開きをもつ。	ヨコナデ	浅黄橙色～橙色	5～2㎜の砂粒多含	½		067-04
102	〃	〃	〃	高杯	口径 10.7 器高 10.8 脚径 5.8	半球状で口縁部は雫干外反する杯部に短かく「ハ」字に開く脚がつく。	ナデ	浅黄橙色	3～4㎜の砂粒多含	完形	全体に黒い仕上げ、杯内面黒色に変色	067-07
103	〃	〃	須恵器	蓋	口径 12.8 器高 3.8	平らな天井部との境に稜をもつ口縁部で、端部は内に開きをもつ。	天井部の ½をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	2㎜の砂粒若干含	½	ロクロ右回転	067-03
104	〃	〃	〃	〃	口径 13.3 器高 4.8	平らな天井部との境に弱い稜をもつ口縁部で、頂部内面に弱い段が残る。	〃	〃	2㎜の砂粒含	½	ロクロ右回転	067-05
105	SH329	R－28 SD14	土師器	椀	口径 10.8 器高 16.0	球形の体部に、まっすぐ外方へ開く口縁部がつく。	ナデか？	明褐灰色	精良	½	摩滅のため調整不明。大半が風蝕	039-03
106	〃	S－28 SD16	〃	〃	口径 8.3 器高 7.6	球形に近い体部に内湾する口縁部がつく。	口縁部内面板状工具によるナデ、体部内面指押え後ナデ、外面ナデか？	黒色	1㎜の砂粒多含	〃	焼成不良、外面摩滅により調整不明	039-02
107	〃	S－28 SK5	〃	甕	口径 18.6	体部から「く」字に屈曲してまっすぐ外方へ開く口縁部で端部は外に弱い面をもつ。	内面ナデ、外面ハケ目、口縁部ヨコナデ	明褐灰色	9㎜～1㎜の小石含	½	体部外面黒色変色あり	044-01
108	SH310	M－43 SK5	須恵器	高杯（有蓋）	口径 9.7 器高 8.4 脚径 7.8	口縁部は比較的高く立ち上がり端部は内に面をもつ。短脚で三方に透し孔を開ける。	杯部外面ヘラケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	4～2㎜の砂粒含	½	ロクロ左回転	080-05
109	SH313	P－41 SD11	〃	杯	口径 11.6 器高 4.7	やや扁平な形態で、口縁部は内傾するが端部に弱い段をもつ。	底部外面の ½をロクロケズリし、他はロクロナデ	外面灰～黒白色、内面灰～褐灰色	1～4㎜の砂粒若干含	〃	ロクロ左回転、体部外面に自然釉がかかる。	033-03
110	SH314	P－40 SD8	土師器	甕	口径 22.4	外反するロ縁部で、端部は上下に肥厚し外に面をもつ。	体部外面ハケ目、口縁部ヨコナデ、内面ナデか？	浅黄橙色	1～3㎜の砂粒多含	½	摩滅のため調整不明瞭	079-01
111	〃	〃	〃	ミニチュア壺？	—	球形の体部をもつものと思われる。	手づくね	明褐灰色	やや粗	底部、口縁部欠損	粘土紐接合痕が明瞭に残る。	033-06
112	〃	〃	須恵器	蓋	口径 12.6 器高 4.8	平らな天井部から丸味をもって垂下する口縁部で天井部との境に稜あり、頂部内面に弱い段をもつ。	天井部外面の ½をロクロケズリ、他はロクロナデ	内：白灰～褐灰色、内：青灰色	1㎜の砂粒若干含	½	ロクロ左回転、外面に自然釉がかかる。	033-01
113	〃	〃	〃	杯	口径 11.6 器高 5.0	平球形の体部に若干内傾するロ縁部がつき、端部は内に段をもつ。	体部外面の ½をロクロケズリし、他はロクロナデ	灰色	1～3㎜の砂粒若干含	½	ロクロ左回転	033-05
114	〃	P－40 SK4	〃	蓋	口径 13.5 器高 4.5	天井部から丸味をもって垂下する口縁部は天井部との境に弱い稜、端部内面に面をもつ。	天井部外面の ½をロクロケズリ、他はロクロナデ	〃	〃	½	ロクロ左回転	033-04
115	〃	P－40 SD8	〃	杯	口径 12.2 器高 4.9	直立するロ縁部で端部内面に浅い沈線が巡る。	体部外面の ½をロクロケズリ、他はロクロナデ。	灰色	2～4㎜の小石若干含	½	ロクロ右回転	033-03
116	SK302	R－40 SK2	土師器	壺	口径 19.0	2段に外反するロ縁部をもち、体部は雫干長球状を呈する。	外面ヘラミガキ、体部内面下半ヘラ状工具で撫き上げたような痕跡あり、上半は未調整	浅黄橙色～灰褐色	2.5㎜以下の砂粒を含む	½		048-01
117	〃	〃	〃	甕	口径 19.8	外方へまっすぐ開く口縁部で端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、内面未調整、口縁部ヨコナデ		0.5～3㎜の砂粒多含	½	口縁部に粘土紐接合痕あり	043-02
118	SH315	R－39 SD9	土製品	紡錘車	径 3.2 高 1.6 重 20g	円柱状を呈し、中央に直径5㎜の穿孔あり。	ナデ	黄褐色～黄褐色	0.5～2㎜の砂粒多含	完形	摩滅のため調整不明瞭	043-03
119	SH312	M－43 SK10	土師器	椀	口径 11.0 器高 6.4	半球状を呈する器みが大きい。	ナデか？	黄橙色～橙色	3.5㎜以下の砂粒多含	ほぼ完形	摩滅のため調整不明瞭	079-04
120	〃	〃	須恵器	高杯	底径 10.4	「ハ」字に開く短かい脚で、三方に円形透し孔を施す。	ロクロナデ	青灰色	0.5～2㎜の砂粒多含	脚部ほぼ完存		079-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
121	SH312	N−43 SK10	須恵器	蓋	口径 14.0 器高 4.6	平らな天井部から盛下する口縁部で、端部内面に面、天井部との境に弱い稜をもつ。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	明青灰色	0.5～4㎜の砂粒多含	1/4	ロクロ左回転	079-02
122	〃	〃	〃	〃	口径 14.2 器高 4.55	平らな天井部から内湾して垂下する口縁部で端部内面に弱い段をもつ。	天井部外面未調整、他はロクロナデ	灰白色	2.5㎜以下の砂粒含	1/4	焼成不良、摩滅のため調整不明瞭	079-05
123	〃	〃	〃	杯	口径 12.0 器高 5.0	偏平な体部に内接する口縁部が付き端部は丸くおさめる。	体部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	明青灰色	0.5～3.5㎜の砂粒含	略ほ完形	ロクロ左回転	079-01
124	SH310	M−43 SK4	〃	蓋	口径 13.6 器高 4.15	偏平な体部で、天井部と口縁部の間に比較を巡らし、口縁端部内面に弱い段をもつ。	天井部外面の1/2をロクロケズリし、他はロクロナデ	青灰色	0.5～4㎜の砂粒含	1/4	ロクロ右回転	080-01
125	SK306	S−36 P8	土師器	鉢	口径 11.4 器高 5.6	半球状の体部で口縁端部は丸くおさめる。	口縁部簡単なヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	灰白色～黄褐色	2㎜以下の砂粒含	完形	粘土粒剥合痕が残る	083-05
126	〃	〃	〃	〃	口径 12.6 器高 6.1	半球状の体部で、口縁端部は若干内傾する。	〃	暗茶色	2㎜の砂粒、雲母含	1/2	粘土粒剥合痕が明瞭に残る	087-04
127	SK307	S−35 P20	〃	〃	口径 11.4 器高 6.1	半球状の体部で口縁端部は丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、内面板状工具によるナデ、外面未調整	黄褐色	2.5㎜以下の砂粒含	完形	粘土粒剥合痕が残る	084-02
128	SK308	Q−33 P21	〃	〃	口径 11.7 器高 5.95	半球状の体部で口縁端部は若干内傾する。	〃	黒色～黒灰色	0.5～5㎜の砂粒多含	略ほ完形	焼成不良のため大部分が黒斑となる 粘土粒剥合痕が	084-03
129	SK317	O−25 SK1	〃	鉢	口径 11.0 器高 14.5	球形の体部に外方へ開く口縁部が付き、端部は丸くおさまる。	口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ。	浅黄橙色～灰褐色	0.5～2㎜の砂粒、雲母多含	底部欠損	摩滅のため調整不明瞭	043-01
130	SK303	Q−45 P13	〃	ミニチュア鉢	口径 7.4 器高 7.7	若干長球状を呈する体部は外方へ開かく開く口縁部が付く。	口縁部ヨコナデ、他は未調整	純黄橙色	2㎜以下の砂粒少量含	口縁部大部分欠損		083-03
131	SK316	O−29 P7	石製品	有孔円盤	径 2.8 厚 0.3 重 4.3g	円盤状を呈し、一対の円孔を穿す。		淡褐灰色	緻石	完形		071-06
132	SK309	S−31 P17	須恵器	蓋	口径 11.9 器高 4.9	大味のある天井部から垂下する長い口縁部で、天井部との間に稜、端部内面に弱い段をもつ。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	1～4㎜の砂粒含	略ほ完形		084-01
133	SK305	R−39 P3	〃	〃	口径 16.2 器高 4.8	偏平な形態を呈し、口縁部は天井部との境に弱い稜、端部内面に段をもつ。	天井部外面の1/2を縦ヒロクロケズリ、他はロクロナデ	褐灰色～黒褐色	1～2㎜の砂粒含	〃	焼成不良 ロクロ右回転	069-02
134	SD302	R−43 SD1	土師器	鉢	口径 12.2 器高 5.8	半球状の体部で口縁端部は外反し、内に面をもつ。	口縁部はヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	橙色～淡橙色	1.5㎜以下の砂粒含	1/2	粘土粒剥合痕が残る。	007-04
135	〃	R−44 SD1	〃	〃	口径 11.7 器高 5.4	半球状の体部で、口縁端部は短くなっておわる。	口縁部ヨコナデ、内面板状工具によるナデ、他は未調整	浅黄橙色	3㎜以下の砂粒少量含	1/2	粘土粒剥合痕が残る。	007-05
136	〃	R−45 SD1	〃	〃	口径 9.9 器高 5.3	半球状の体部で口縁端部内面に面をもつ。	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	純黄橙色	0.5～2㎜の雲母、砂粒含	1/2	粘土粒剥合痕が残る。	007-03
137	〃	R−44 SD1№2	〃	〃	口径 9.0 器高 5.4	半球状の体部で口縁端部は大きくかえす。	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケ目	浅黄橙色～黄褐色	2㎜の以下の砂粒含	略ほ完形	歪みが著しい	007-06
138	〃	R−45 SD1 №5−1	〃	鉢	口径 11.8 器高 19.8	やや長球状で下膨れの体部に短かく外反する口縁部が付く。	口縁部ヨコナデ、内面板状工具によるナデ、外面下反ヘラケズリ	明橙灰～褐灰	5㎜以下の砂粒多含	3/4	摩滅が著しく調整不明瞭	005-01
139	〃	R−44 SD1№2	〃	〃	口径 16.3	外方へまっすぐ開く口縁部で端部は若干肥厚する。	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ	明橙灰～褐灰色	4㎜以下の砂粒含	1/4	粘土粒剥合痕が残る。	001-02
140	〃	R−45 SD1 №5−1	〃	〃	口径 14.6	外方へまっすぐ開く口縁部で、端部は外に反状の面をもつ。	口縁部ハケ目が残るがヨコナデ、体部外面ハケ目、内面ナデ	褐灰色	雲母含やや粗	1/4		005-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
141	SD302	R－45 SD1	土師器	甕	口径 11.8	小型で外方へまっすぐ開く比較的長い口縁部で端部は丸くおさめる。	口縁部ハケ目が残るがヨコナデ、頸部内面指押さえ	暗褐灰色	1.5mm以下の砂粒、雲母含	¼		005-02
142	〃	R－45 SD1 №5－3	〃	〃	口径 10.3 器高 11.8	球形の体部に直立ぎみの口縁部がつく(縦に近い)形態	口縁部＝コナデ、体部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ	淡褐灰色	2mmの砂粒含	底部欠損		003-01
143	〃	R－45 SD1	〃	〃	口径 10.0	球形の体部に若干内寄りる体部が付き端部は丸くおさめる。	口縁部＝コナデ、体部外面ハケ目ヨ、内面板状工具によるナデ	桃色～褐灰色	0.5～2mmの砂粒、雲母多含含	¼	摩滅が激しく調整不明確	006-01
144	〃	〃	〃	〃	口径 10.8	外方へまっすぐ開く口縁部で端部は丸くおさまる。	口縁部ハケ目が残るがヨコナデ、頸部内面指押さえ	暗褐灰色	2mmの砂粒含	¼		003-03
145	〃	〃	〃	〃	口径 19.0	外方へまっすぐ開く口縁部で端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、内面ナデ、口縁部＝コナデ	灰白色	1～2mmの砂粒含	¼		003-01
146	〃	〃	〃	〃	口径 19.4	球形の体部に外方へまっすぐ開く口縁部がつき、端部はつまみ上げられ外に面をもつ。	〃	〃	1mmの砂粒多含	口縁部完存	歪みあり	002-01
147	〃	R－44 SD1№1	〃	〃	口径 20.0 器高 32.2	〃	体部外面ハケ目、内面板状工具によるナデかつ、口縁部ヨコナデ	内：灰黄褐色 外：明褐灰色	0.5～2mmの砂粒含	ほぼ完形		008-01
148	〃	R－45 SD1	〃	〃	口径 20.0 器高 31.5	球形の体部にまっすぐ外方へ開く口縁部がつき、端部は若干肥厚し、外に一条の沈線を巡らす。	体部外面ハケ目、内面中央部水調整、他は板状工具によるナデか	淡褐～黒褐色	1～4mmの砂粒、雲母多含	〃	黒斑あり、外面煤付着	030-01
149	〃	〃	〃	〃	口径 17.2 器高 31.0	若干肉厚部の体部にまっすぐ外方へ開く口縁部がつき、端部は外に面をもつ。	体部外面ハケ目、内面板状工具によるナデ	外：暗灰～褐黄灰色、内：黒黄褐色	0.5～2mmの砂粒、雲母含	¾	外面下半に煤付着	004-01
150	〃	R－44 SD1№4 R－45 SD1	〃	高杯	口径 14.7 器高 10.4 脚径 9.9～10.2	杯部はまっすぐ外方に延び、脚部は中脹の筒状で、裾部で大きく「ハ」字に開く	脚部外面ハケ目、他はナデ、一部に板状工具痕あり	褐灰色	0.5～3mmの砂粒、雲母多含	杯部3/4欠損	摩滅のため調整不明確、歪みが大きい	006-04
151	〃	R－45 SD1	〃	ミニチュア鉢	口径 4.8 器高 4.3	小さな底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ半球状に近い形態	指痕をナデと指押さえ	淡黄色	4mm以下の砂粒含	½	粘土塊接合痕が明瞭に残る。	007-02
152	〃	R－45 SD1 №5－2	須恵器	蓋(高杯)	口径 12.4 器高 5.05	天井部との境に稜をもち垂下する口縁部は端部内面に面をもつ。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	3mm以下の砂粒含	〃	ロクロ右回転	006-05
153	〃	R－45 SD1	〃	〃	口径 12.0	〃	天井部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	暗青灰色	5～1.5mmの砂粒含	¼	ロクロ右回転	006-02
154	〃	〃	〃	蓋(高杯)	口径 11.2	丸味のある天井部との境に稜をもって垂下する口縁部で端部は内に尖鋭を巡らす。	天井部外面1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	外：明青灰～青灰色、内：暗青灰色	5～2mmの砂粒含	¾	ロクロ右回転	006-03
155	〃	R－45 SD1№6	〃	杯	口径 9.5 器高 4.65	半球状の体部から若干内傾ぎみに立ち上がる口縁部で端部は内に面をもつ。	体部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	外：暗青灰色、内：黄灰色	1～2mmの砂粒含	¼	ロクロ左回転、歪みが大きい	007-01
156	〃	R－45 SD1 №5－2	〃	〃	口径 10.2 器高 4.8	扁平な体部からやや内傾して立ち上がる口縁部で端部は内に細い面をもつ。	〃	青灰色	1～1.5mmの砂粒少量含	口縁部1/4欠損	ロクロ左回転、歪みが大きい。黒部外面にヘラ記号	006-06
157	〃	R－45 SD1 №5－1	〃	器台	脚径 26.8	「ハ」字に開く脚部で、三段四方に三角形の透し孔を施す。	外面ヨヤ目、内面ロクロナデ	灰色	1～2mmの砂粒多含	¼	外面に棚状状文を施す。焼成不良部分あり	014-01
158	SH318	S－38 SK3	〃	長頸壺	脚径 8.9	やや肩の張る体部に大きく外反する長い頸部と短かく「ハ」字に開く脚が付く。	体部外面下半ロクロケズリ、他はロクロナデ	青灰色	0.5～6mmの砂粒含	口縁部欠損	頸部と脚部に沿跡を残す。胴部に自然釉がかかる。	039-02
159	SB302	X－66 溝1第2層	〃	壺	口径 16.0 器高 3.5	丸味のある天井部にやや緩平なつまみを張り付ける。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、他はロクロナデ	灰白色	0.5～1mmの砂粒含	¾		016-03
160	SB323	R－36 P7	〃	〃	口径 16.1 器高 2.7	緩平な天井部に「S」字に屈曲する口縁部がつく。	天井部外面の1/2をロクロケズリ、内面ナデ、他はロクロナデ	白灰色	4mmの砂粒若干含	¼	焼成不良 ロクロ右回転	086-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
161	SD308	T−57 SD2	須恵器	杯	口径 11.2 器高 3.3	平らな底部からまっすぐ外方へ開く口縁部がつく。	底部外面未調整、口縁部との間をヨコロクロ、内面仕上げナデ、他はロクロナデ	明褐灰色	5mの小石含	完形	自然釉が若干みられる	087-05
162	SB341	T−30 P5	土師器	〃	口径 13.2 器高 2.9	平らな底部からまっすぐ外方へ延びる口縁部がつく。	口縁部ヨコナデ、他はナデ	淡赤黄色	2mの砂粒 雲母少量含	¼		087-08
163	SD326	P−35 SD9	〃	〃	口径 15.9 器高 4.5	平らな底部から内弯して立ち上がる口縁部で、端部は若干肥厚して丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、他はナデ	浅黄橙色～橙色	精良	¼	口縁部内面に放射線文、底面内面にラセン線文を施す。	042-02
164	〃	P−34 SD5	〃	土錘	径 3.8 長 6.8 重 100g	円筒状を呈する。	手づくね	灰黄色	2mより下の砂粒、雲母含	完形		041-05
165	SB346	S−29 P7	〃	ミニチュア鉢	口径 2.7 器高 2.6	半球状を呈し、口縁端部は尖がりぎみにおわる。	〃	灰白色	0.5～3mの砂粒、雲母多含	¾		083-02
166	SB304	Y−02 P1	土師器	ミニチュア壺	口径 3.8 器高 6.5	楕形に近い体部に短かく直立する口縁部がつく。	口縁部外面指押さえ、他はナデ	明褐灰色～黒褐色	1～5mの砂粒含	¾		083-01
167	SK310	T−23 SK11	〃	杯	口径 12.0 器高 3.1	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。	口縁部ヨコナデ、底部外面未調整、内面ナデ	浅黄橙色	3mより下の砂粒多有	¼	粘土接着金属が残る。	042-04
168	〃	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 2.9	平な底部から長曲して立ち上がる口縁部をもつ。	口縁部ヨコナデ、底部外面未調整、内面ナデ	浅黄橙色	2.5mm以下の砂粒含	½	摩滅のため調整不明瞭	042-03
169	〃	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 2.45	〃	〃	淡橙色	3mより下の砂粒多含	¼	摩滅のため調整不明瞭	042-05
170	〃	〃	瓶類土器	鉢	口径 12.8	口縁端部は外に開をもったために尖りぎみになる。	内面ナデ、外面未調整	橙色	1.5mの砂粒、雲母含	¼	粘土接着金属が明瞭に残る。	043-06
171	SZ301	R−43 SX1	土師器	杯A₁	口径 11.6 器高 2.8	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部は外反する。	口縁部ヨコナデ、底部内外面ナデ	黄褐色	2.3mm以下の砂粒多含、雲母若干含	体部完形	摩滅が激しい。外面黒斑が大きい。やや焼成不良	021-05
172	〃	〃	〃	〃	口径 11.6 器高 2.5	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部は若干外反する。	口縁部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ、内面ナデ	淡橙色	0.5mm以下の砂粒多含、雲母含	完形	摩滅が激しい。	021-04
173	〃	〃	〃	〃	口径 11.4 器高 2.4	〃	口縁端部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ、内面ナデだが見込みは指押さえ	〃	2mm以下の砂粒含	体部完形	やや歪む、粘土接着金属が残る。	022-03
174	〃	〃	〃	〃	口径 11.4 器高 2.3	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部は外反する。	口縁部ヨコナデ、底部外面ナデ、内面簡単なナデ	淡橙色～橙色	2.3mm以下の砂粒含	〃	口縁部の一部に黒変あり	022-01
175	〃	〃	〃	〃	口径 11.2 器高 2.3	〃	口縁部ヨコナデ、底部外内面簡単なナデ	橙色	1～2mの砂粒多含、雲母含	〃	摩滅が激しい。やや歪みあり	021-03
176	〃	〃	〃	〃	口径 11.1 器高 2.5	〃	〃	淡橙色	1～2mの砂粒含、雲母含	〃	やや歪む。	024-01
177	〃	〃	〃	〃	口径 10.4 器高 2.1	〃	〃	灰白色	2mの砂粒、雲母多含	〃	摩滅が激しい。粘土接着金属が残る。	023-04
178	〃	〃	〃	杯A₂	口径 9.2 器高 1.8	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部はそのまま丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ、内面ナデ	黄橙色	5mm砂粒、雲母小片含	〃	やや歪む	024-03
179	〃	〃	〃	〃	口径 11.2 器高 1.8	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部は軽くつまみ上げる。	口縁部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ、内面ナデ	白赤色	1～2mの砂粒多含、雲母含	½	やや歪む	021-02
180	〃	〃	〃	〃	口径 10.3 器高 2.0	平らな底部から長曲して立ち上がる口縁部で端部はそのまま丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、底部内外面ナデ	浅黄橙色	2～0.5mm砂粒含、雲母片含	体部完形	摩滅が激しい	023-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
181	S Z301	R－43 S X 1	土師器	杯A₂	口径 10.4 器高 2.5	平らな底部から斜直して立ち上がる口縁部で端部はそのまま丸くおさめる。	口縁部ヨコナデ、外面簡単なナデ、内面ナデ	沢白色	精良	ほぼ完形	内面の一部に黒炭あり	023-01
182	〃	〃	〃	〃	口径 10.5 器高 2.5	〃	口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面簡単なナデ	暗赤色	3㎜以下の砂粒多含、雲母若干含	完形	摩滅、歪みが激しい	022-06
183	〃	〃	〃	〃	口径 11.4 器高 2.8	平らな底部から斜直して立ち上がる口縁部で端部は若干内傾ずみになる。	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ、内面にヘラ状工具痕あり	淡橙色	1～2㎜の砂粒含	ほぼ完形	底部外面に黒変状の粘土殻接合痕	022-02
184	〃	〃	〃	杯B	口径 11.3 器高 2.5	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は外反する。	口縁部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ、内面ナデ	橙色	2～3㎜の砂粒含	〃	粘土殻接合痕が残る。	022-05
185	〃	〃	〃	〃	口径 11.2 器高 2.3	〃	口縁部ヨコナデ、底部外面簡単なナデ&未調整、内面ナデ	淡橙色	2㎜以下の砂粒多含	〃		022-04
186	〃	〃	〃	〃	口径 11.0 器高 2.4	〃	口縁部ヨコナデ、底部外面ナデ、内面簡単なナデ	沢白色	精良	〃	摩滅が激しい	023-04
187	〃	〃	〃	〃	口径 10.6 器高 2.2	〃	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ	〃	砂粒、雲母片を含む が精良	〃	外から内へ穿孔？あり、摩滅が激しい	023-05
188	〃	〃	〃	〃	口径 9.4 器高 2.1	〃	口縁部ヨコナデ、外面ナデ、内面簡単なナデ	淡橙色	2㎜の砂粒多含	〃		024-02
189	〃	〃	〃	甕	口径 17.0	球形の体部から「く」字に屈曲する短かい口縁部がつく。	内外面ナデ、内面板状工具痕あり	浅黄橙色	0.5～2㎜の砂粒含	½		026-01
190	〃	〃	〃	〃	口径 23.4	体部から「く」字に屈曲する口縁部で端部は外に開をもつ。	内外面ナデ	外：沢黄褐色 内：浅黄橙色	1～2㎜の砂粒含	½	粘土殻接合痕が残る。	026-02
191	〃	〃	〃	鉢	口径 21.6	体部からそのまま口縁部となり端部は若干外へ引き出す。	口縁部ヨコナデ、体部外面未調整、内面板状工具によるナデ	明褐灰色	1～4㎜の砂粒、雲母含	〃		025-01
192	〃	〃	〃	鉢	口径 11.4 器高 4.0 高台径 5.7	底部から屈曲してまっすぐ外方へ開く体部をもつ。	口縁部ヨコナデ、内面ハケ目、外面未調整	外：沢白色、内：浅黄橙色	0.5～5㎜の砂粒含	¼	黒色土器の未製品か	025-03
193	〃	〃	〃	〃	口径 14.8 器高 4.9 高台径 7.4	底部から丸味をもって立ち上がる体部で、口縁端部内側に開をもつ。	口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外面未調整	褐黄橙色～鈍赤褐色	1～5㎜の砂粒含	½		025-02
194	〃	〃	〃	皿	口径 10.6 器高 1.6	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は若干外へ引き出される。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	外：沢白色、内：淡赤橙色	0.5～2㎜の砂粒含	½		026-03
195	〃	〃	黒色土器A類	椀Ⅰ	口径 12.8 器高 3.8 高台径 6.6	底部から若干内傾ずみに外方へ開く体部で、口縁端部は外反する。	外面単位ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	褐灰色	0.5～4㎜の砂粒、雲母含	〃	いぶしの範囲が、口縁端部内面まで及んでいない。	027-02
196	〃	〃	〃	椀Ⅰ	口径 12.2 器高 3.0 高台径 6.2	口径に比して器高が低い。器に近い形態	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	明赤灰色～明褐灰色	1～3㎜の砂粒含	½		025-05
197	〃	〃	〃	〃	口径 11.4 器高 2.9 高台径 6.8	〃	〃	沢白色	0.5～1㎜の砂粒含	¼		025-04
198	〃	〃	〃	椀Ⅰ	口径 16.9 器高 5.8 高台径 8.4	底部から若干内傾ずみに立ち上がる口縁部で、端部は上方へつまみ上げる。	内面ヘラミガキ、外面未調整、口縁部ヨコナデ	浅黄橙色	1～2㎜の砂粒含	〃		028-04
199	〃	〃	〃	〃	口径 12.0 器高 4.2 高台径 7.0	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部は外へ引き出される。	外面未調整、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	沢白色	0.5～2㎜の砂粒含	½		027-01
200	〃	〃	〃	〃	口径 12.6 器高 4.6 高台径 6.8	底部から屈曲して立ち上がる口縁部で端部は若干外へ引き出される。	内面単位ヘラミガキ、外面未調整、口縁部ヨコナデ	明褐灰色	0.5～1㎜の砂粒含	〃		027-04

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
201	S Z301	K−43 SX1	黒色土器 A類	椀I	口径 14.6 器高 4.9 高台径 7.7	底部から屈曲して立ち上がるロ縁部で端部は若干外へ引き出される。	内面ハケ目、外面未調整、ロ縁部ヨコナデ	純黄橙色	1〜2㎜の砂粒含	¼		029-01
202	〃	〃	〃	〃	椀II	底部から内弯ぎみに立ち上がるロ縁部で端部は若干外反する。	内面比較的ていねいに立ち上がるロ縁部ヨコナデ、外面未調整、ロ縁部ヨコナデ	浅黄橙色	0.5〜1㎜の砂粒含	¼		028-01
203	〃	〃	〃	〃	口径 14.2 器高 4.4 高台径 7.5	〃	内面ナデ、外面未調整、ロ縁部ヨコナデ	黄橙色	0.5〜2㎜の砂粒含	〃		027-03
204	〃	〃	〃	〃	口径 14.0 器高 4.9 高台径 7.8	〃	内面薄革なヘラミガキ、外面未調整、ロ縁部ヨコナデ	黄褐色	1〜3㎜の砂粒、雲母含	¼		026-03
205	S D303	M−41 SD3	土師器	杯A1	口径 10.2 器高 2.4	底部から屈曲して立ち上がるロ縁部で端部は若干外反する。	内外面ナデ、ロ縁部ヨコナデ	淡茶白色	1.5㎜以下の砂粒少量含	¾	歪みが激しい	012-06
206	〃	O−39 溝3	〃	杯B	口径 10.6 器高 2.0	底部から丸味をもって立ち上がるロ縁部で端部は大きく水平近くまで外反する。	外面未調整、内面ナデ、ロ縁部ヨコナデ	浅黄橙色	0.5〜2㎜の砂粒含	¼		013-02
207	〃	〃	〃	皿	口径 10.6 器高 1.8	底部中央がやや盛り上がり、ロ縁部はまっすぐ外方へ延びる。	〃	淡黄色	0.5〜2㎜の砂粒多含	完形	赤褐色に変色	013-03
208	〃	M−41 SD3	〃	〃	口径 10.4 器高 1.8	比較的厚い底部からまっすぐ外方へ延びるロ縁部をもつ。	〃	黄橙色	1.5㎜以下の砂粒含	¾		012-05
209	〃	M−42 SD3	〃	〃	口径 10.8 器高 1.65	厚い底部から低かく外方へ延びるロ縁部をもつ。	〃	純橙色	0.5〜1.5㎜の砂粒含	¾		012-08
210	〃	M−41 SD3	〃	〃	口径 11.2 器高 1.7	やや厚い底部から外方へまっすぐ延びるロ縁部をもつ。	〃	浅黄橙色〜橙色	4㎜以下の砂粒多含	ロ縁部少量欠損	歪みが激しい	012-07
211	〃	M−42 SD3	〃	台付皿	口径 9.4 器高 1.75 高台径 5.0	外反するロ縁部をもち、新面三角形の高台を張り付ける。	内外面ナデ、ロ縁部ヨコナデ	乳白〜明橙灰色	精良	¾	歪みが激しい	015-02
212	〃	P−39 溝3	〃	〃	口径 12.3 器高 2.0 高台径 7.4	大きく水平まで外反するロ縁部をもち、新面三角形の高台を張り付ける。	内外面ナデ、ロ縁部強いヨコナデ	乳白色	3㎜の砂粒若干含	ロ縁部小片		015-03
213	〃	N−39溝3	〃	〃	口径 13.4 器高 2.8 高台径 7.2	底部からまっすぐ外方へ延びるロ縁部をもち、新面三角形の高台を張り付ける。	外面簡単なナデ、内面ナデ、ロ縁部のみヨコナデ	淡橙色	3㎜の砂粒含	¼		015-01
214	〃	M−41 SD3	黒色土器 A類	小椀 (椀II)	口径 10.8 器高 3.6 高台径 4.6	底部から丸味をもって立ち上がる体部をもつ。	外面ナデ、内面ヘラミガキ、ロ縁部ヨコナデ	明橙灰色	精良	¼		015-04
215	〃	M−41 SD3	〃	椀I	口径 15.7 器高 4.85 高台径 6.8	比較的厚い体部で、ロ縁部は若干外反する。	外面未調整、内面ナデ、ロ縁部ヨコナデ	浅黄橙色〜灰褐色	0.5〜5㎜の砂粒多含	¼		012-04
216	〃	M−41 SD3	〃	椀I	口径 15.0 器高 5.65 高台径 7.8	底部から屈曲して直線的に立ち上がる体部をもつ。	外面ナデ、内面ヘラミガキ、ロ縁端部ヨコナデ	浅黄橙色〜橙色	0.5〜3㎜の砂粒含	口縁部完形	摩滅が激しい	012-02
217	〃	N−39 溝3	〃	〃	口径 15.0 器高 5.75 高台径 8.0	底部から丸味をもって立ち上がる体部をもち、比較的高い高台を張り付ける。	外面簡単なナデ、内面ヘラミガキ、ロ縁部ヨコナデ	浅黄橙色	0.5〜1㎜の砂粒、雲母少量含	¾		013-01
218	〃	M−41 SD3	〃	椀II	口径 15.0 器高 5.5 高台径 7.7	底部から丸味をもって立ち上がる体部をもつ。	外面未調整、内面板状工具によるナデ、ロ縁部ヨコナデ	明橙灰色	0.5〜2㎜の砂粒含	ロ縁部小片		012-03
219	〃	M−39 溝3	〃	小椀 (椀II)	口径 10.2 器高 4.3 高台径 4.0	小さい底部から内弯ぎみに立ち上がる体部をもつ。	外面未調整、内面ナデ、ロ縁部ヨコナデ	淡橙灰色	2㎜の砂粒若干含	¾		015-05
220	〃	N−39 溝3	土師器	甕	口径 16.6	外反するロ縁部で端部は外に面をもつ。	外面ハケかナデ、内面ハケ目	淡橙灰色	2㎜の砂粒含	¾	摩滅が激しく調整不明瞭、外面煤付着	019-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
221	SD303	M−43 SD3	土師器	甕	口径 16.0	"く」字に屈曲する口縁部で端部は外に面をもつ	口縁部ヨコナデ、外面ナデ?	赤茶色	2.5mm の砂粒含	¼	摩滅が激しく調整不明確	080-03
222	〃	M−41 SD3	〃	〃	口径 14.0	外反する短かい口縁部をもつ。	外面ハケ目か、内面板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ	褐灰色	1mm の砂粒含	〃	摩滅が激しく調整不明確	019-02
223	〃	M−42 SD3	灰釉陶器	鉢	高台径 7.1	角形高台を張り付ける。	底部外面糸切り未調整、他はロクロナデ	白灰色	精良	½	内外面に施釉 底部外面に墨書	087-01
224	〃	N−39 溝3	土製品	土錘	径 3.7 重 70g	最大径が中央にある紡状を呈する。	手づくね	暗茶色	3mm の砂粒含	完形	焼成やや不良	015-05
225	〃	P−39 溝3	〃	〃	径 3.2 重 48.2g	〃	〃	〃	4mm の砂粒含	〃		015-06
226	〃	M−42 SD3	〃	〃	径 1.5 重 9.3g	最大径が中央にある細い紡状を呈する。	〃	淡赤茶色	砂粒を若干含むが精良	〃		019-03
227	〃	M−43 SD3	石製品	砥石	—	四角柱を呈する。		乳白色	細沢岩	上下端欠損		080-04
228	SB307	R−43 P3	〃	〃	—	円柱状の自然石		灰色	強質真岩	½		064-05
229	SH317	Q−38 SD10	土師器	杯	口径 11.8 器高 2.5	広い底部をもつが、口縁部への器面はゆるやかである。		橙色	1mm の砂粒含	ほぼ完形	焼成がやや不良 摩滅が激しく調整不明	050-07
230	〃	〃	〃	台付皿	口径 13.6 器高 2.5	底部からまっすぐ外方へ延びる口縁部で、底の広い高台を張り付ける。		〃	3mm の砂粒若干含	½	摩滅が激しく調整不明	050-01
231	〃	〃	黒色土器 A類	椀II	口径 15.2 器高 5.5 高台径 7.7	底部から内湾して立ち上がる口縁部で、端部は外反する。	外面未調整、口縁部ヨコナデ、内面ミガキ確認できず	浅黄橙色	1mm以下の砂粒少量含	〃	摩滅のため調整不明確	053-03
232	SH316	Q−37 SD9	土師器	皿	口径 10.6 器高 1.6	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。		浅黄橙色	1.5mm の砂粒多含	ほぼ完形	摩滅が激しく調整不明	050-02
233	〃	〃	〃	椀	口径 16.4 器高 5.5 高台径 7.6	広い底部から丸味をもって立ち上がる体部をもつ。	ナデで調整するが、外面凹凸が激しく未調整か	橙色	1～4mm の砂粒多含	⅔	摩滅が激しく調整不明確	050-03
234	〃	Q−38 SD7	黒色土器 A類	椀II	口径 15.0 器高 6.0 高台径 8.2	底部から内湾して立ち上がる体部で、口縁端部内面に沈線を巡らす。	底部内面平行ミガキ	明褐色	4mm の砂粒多含	¼	摩滅が激しく調整不明確	053-01
235	〃	Q−37 SD9	土師器	甕	口径 34.8	頸部の縊りが弱い倒に近い形態	外面櫛単位ナデ、内面板状工具によるナデ、口縁部ヨコナデ	淡橙色	4～2mm の砂粒多含	¼	摩滅が激しく調整不明	053-02
236	SZ302	L−22 SX2	〃	杯B	口径 16.0 器高 3.0	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもつ。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	黄灰橙色	1～7mm の砂粒含	完形		031-03
237	〃	〃	〃	〃	口径 15.4 器高 3.2	〃	〃	灰白色	雲母片若干含	½		031-01
238	〃	〃	〃	皿	口径 9.1 器高 2.1	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、やや浅く杯に近い形態。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	黄橙色	精良	½		020-01
239	〃	〃	〃	皿	口径 9.3 器高 1.4	「て」字状に大きく屈曲する口縁部をもつ。	〃	淡橙色	2mm以下の砂粒含	口縁部一部欠損		020-02
240	〃	〃	〃	〃	口径 9.0 器高 1.4	〃	〃	灰褐色～灰黄褐色	1mm以下の砂粒、雲母含	〃		020-03

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	図版番号
241	SZ302	L−22 SX2	土師器	皿	口径 9.2 器高 1.4	「て」字状に大きく屈曲する口縁部をもつ。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	浅黄橙色	1mの砂粒 雲母含	¾	摩滅が激しく調整不明瞭	020-07
242	〃	〃	〃	〃	口径 9.4 器高 2.6	口縁部は「て」字状に弱く屈曲する。	〃	淡橙色	雲母含	¾		020-05
243	〃	〃	〃	〃	口径 9.2 器高 1.2	〃	〃	〃	2mm以下の砂粒多含、雲母若干含	ほぼ完	摩滅が激しく調整不明瞭	020-06
244	〃	〃	ロクロ土師器	椀	口径 15.6 器高 4.3	底部は厚く高台を貼付した形態で、口縁端部は外反する。	底部回転糸切り未調整、他はロクロナデ	灰白色	1〜2mmの砂粒多含、雲母含	¾		021-01
245	〃	〃	〃	皿	口径 8.6 器高 2.6	非常に厚い高台状の底部からまっすぐ外方に延びる口縁部をもつ。	〃	褐橙色	0.1〜0.2mmの砂粒、雲母多含	〃		020-04
246	〃	〃	瓦器	椀	口径 14.0 器高 5.6 高台径 6.7	幅の広い角形高台を張り付けロ縁端部に沈線を巡らす。	外面5分側のヘラミガキ、内面ヘラミガキ、見込みは菊花状ヘラミガキ	灰色	精良	ほぼ完形		031-04
247	〃	〃	〃	〃	口径 15.4 器高 6.6 高台径 6.0	〃	外面4分側のヘラミガキ、内面ヘラミガキ、見込みは菊花状ヘラミガキ	〃	〃	¾		032-01
248	〃	〃	〃	〃	口径 15.7 器高 5.6 高台径 6.0	幅の広い角形高台を張り付けるが、口縁端部内面に沈線はない。	外面5分側のヘラミガキ、内面ヘラミガキ、見込み平行は平行ヘラミガキ	暗灰色	〃	¾	若干変化	034-04
249	〃	〃	〃	〃	口径 14.8 器高 5.8 高台径 6.3	幅の広い角形高台を張り付けロ縁端部内面に沈線を巡らす。		黒褐色	1〜3mmの砂粒含	ほぼ完形	摩滅のためミガキ消滅	033-02
250	SK322	K−18 P1	土師器	杯B	口径 14.6 器高 3.1	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は若干外反する。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	褐灰色	雲母片含			011-06
251	〃	〃	〃	台付皿	口径 9.4 器高 2.8 高台径 4.0	平坦状の体部に高台を張り付ける小粒に近い形態 高台縁部は外反する。	〃	黄橙色	精良	¼		011-02
252	〃	〃	〃	〃	口径 10.3 器高 2.9 高台径 4.5	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部をもち、高台は張り付けられる。	〃	灰白色	雲母片含	口縁部小片底部完存		011-04
253	〃	〃	〃	〃	口径 10.0 器高 2.4 高台径 6.8	短かい口縁部で端部は内に巻き込む。高い高台を張り付ける。	〃	〃	〃	¼		018-02
254	〃	〃	〃	〃	口径 17.6 器高 4.2 高台径10.8	外反する口縁部をもつ大形の皿で比較的高い高台を張り付ける。	〃	黄褐色	1〜5mmの砂粒含	¼		011-03
255	〃	〃	〃	〃	口径 16.8 器高 4.5 高台径 8.0	底部からまっすぐ外方に延びる口縁部で高い高台を張り付ける。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	灰白色	雲母片含	¼		011-05
256	〃	〃	〃	皿	口径 9.6 器高 1.6	「て」字状に屈曲する口縁部をもつ。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	褐橙色	1〜2mmの砂粒、雲母含	¼		011-01
257	〃	〃	〃	〃	口径 8.6 器高 1.5	〃	〃	灰白色	1〜1.5mmの砂粒、雲母含	完形		009-09
258	〃	〃	〃	〃	口径 9.0 器高 1.8	〃	〃	〃	1〜2mmの砂粒含	〃	熱土器接合底が残る。口縁部の一部に炭が付着	009-07
259	〃	〃	〃	〃	口径 9.0 器高 1.8	「て」字状に弱く屈曲する口縁部をもつ。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	灰白色	1mm砂粒、雲母含	完形		009-05
260	〃	〃	〃	〃	口径 8.4 器高 1.9	〃	〃	〃	精良(赤色底粒含)	〃	熱土器接合底が残る	009-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
261	S K322	K－18P 1	土師器	皿	口径 8.2 器高 1.8	「て」字状に開く底面から直線的に口縁部をもつ。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	灰白色	精良(赤色粒粒含)	完形		009-04
262	〃	〃	〃	〃	口径 8.9 器高 1.8	〃	〃	〃	1～3㎜の砂粒若干含	〃	粘土紐接合痕が残る。	009-02
263	〃	〃	〃	〃	口径 8.9 器高 1.5	〃	〃	〃	精良(赤色粒粒含)	〃		009-03
264	〃	〃	〃	〃	口径 8.4 器高 1.7	〃	〃	〃	精良(赤色粒粒含)		粘土紐接合痕が残る。	009-05
265	〃	〃	〃	〃	口径 9.0 器高 1.8	〃	〃	〃	1㎜の砂粒、雲母、赤色粒粒含	〃	粘土紐接合痕が残る。	009-06
266	〃	〃	瓦器	〃	口径 9.6 器高 2.3	やや開いた形態で口縁端部は外反する.	外面未調整、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	暗灰色	精良(雲母含)	¾		018-01
267	S D333	N－26 S D 2	土師器	杯B	口径 13.6 器高 3.0	底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で端部は外反する。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	淡黄橙色～橙色	2㎜以下の砂粒、雲母、赤色粒粒含	〃		042-01
268	S K321	K－18 P 2	〃	皿	口径 8.2 器高 2.0	「て」字状に開く底面から直線的に口縁部をもつ。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	暗茶色	砂粒若干含	½		009-02
269	〃	〃	〃	台付皿	口径 8.9 器高 2.4 高台径 5.4	「て」字状に開く底面から直線的に口縁部をもち、高い高台を張り付ける。	〃	白茶色	最砂含、雲母多含	½	摩滅が激しく調整不明確	009-01
270	S K320	K－19 P 3	〃	杯	口径 14.0 器高 3.7	小さい底部から丸味をもって立ち上がる口縁部で、端部は外反する。	—	赤茶色	4㎜の砂粒含、雲母片多含	¼	摩滅が激しく調整不明	009-07
271	〃	〃	〃	皿	口径 8.9 器高 1.8	「て」字状に開く底面から直線的に口縁部をもつ。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	茶色	砂粒若干含、雲母多含	口縁部若干欠損	粘土紐接合痕が残る。	009-05
272	〃	〃	〃	〃	底径 6.7 器高 1.8	〃	〃	黄茶色	雲母若干含	完形	粘土紐接合痕が残る。	009-03
273	〃	〃	〃	〃	口径 8.9 器高 1.8	〃	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	白茶色	最砂若干含	〃	粘土紐接合痕が残る。	009-04
274	〃	〃	〃	〃	口径 8.8 器高 1.7	〃	〃	黄茶色	砂粒若干含、雲母多含	½	口縁部外面に残い沈線が巡る。	009-06
275	S B326	R－34 R 7	〃	〃	口径 9.7 器高 1.7	「て」字状に開角する口縁部をもつ。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	白茶色	3㎜の砂粒多含	体部完形	摩滅が激しく調整不明確	067-07
276	〃	R－38 P 2	瓦器	〃	口径 10.4 器高 2.0	やや開い形態で、口縁端部は外反する。	外面未調整、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	黒灰色	精良	½		067-06
277	S K318	L－19 S K 1	土師器	台付皿	口径 8.6 器高 2.4 高台径 5.2	「て」字状に若干開角する口縁部をもち、高台を張り付ける。	内外面ナデ、口縁部ヨコナデ	淡黄色～褐灰色	1.5㎜以下の砂粒、雲母含	¼		041-04
278	〃	〃	〃	〃	口径 8.8 器高 2.1 高台径 4.7	〃	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	淡橙色	1㎜以下の砂粒、雲母、赤色粒粒含	¾	歪みあり	041-03
279	〃	〃	〃	〃	口径 8.6 器高 2.0 高台径 4.4	〃	〃	淡黄橙色	2㎜以下の砂粒、赤色粒粒、1㎜の雲母含	完形		041-02
280	〃	〃	〃	羽釜	口径 22.9	体部からそのまま直立する口縁部をもつ。	外面ヘラケズリ、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	黄色	2㎜の砂粒、雲母多含	¼	摩滅のため調整不明確	041-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
281	SK304	P－41 SK1	土師器	皿	口径 8.7 器高 1.65	小形で浅い形態。	外面未調整、内面ナデ、口縁部ヨコナデ	黄白色	2㎜の砂粒多含	¾		081-01
282	〃	〃	瓦器	〃	口径 8.8 器高 1.4	浅く、口縁端部は外反する。	外面未調整、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	暗灰色	精良	ほぼ完形		081-03
283	〃	〃	〃	椀	口径 14.9 器高 4.55 高台径 5.4	やや偏平な形態で、口縁端部に沈線を巡らす。	外面未調整、内面ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	灰色	〃	¾	歪みが大きい	081-02
284	—	Q－45 包	土師器	鍋	口径 20.4	体部からそのまま直立する口縁部で、一対の把手を張り付ける。	外面ハケ目、内面ナデ	黄褐色	2～3㎜の砂粒多含	½	摩滅のため調整不明確	073-01
285	—	R－45 包	〃	ミニチュア壺	—	球形の体部に短かい口縁部が付くものと思われる。	内外面未調整、口縁部ナデ	黄白色	精良	口縁部欠損	粘土紐接合痕が明瞭に残る。	071-01
286	—	P－24 包	土製品	土錘	長 4.8 径 2.6 重 30.4	長さに比べ径が太い円筒状を呈する。	未調整	灰黄色	4㎜の砂粒含	完形		044-04
287	—	Q－46 包	〃	〃	長 4.2 径 1.2 重 4.2	細長い円筒状を呈する。	〃	淡褐色	2㎜以下の砂粒含	〃		044-05
288	—	M－40 包	〃	椀	口径 11.8 器高 2.9 高台径 5.4	杯に近い形態で、器壁は厚い。	外面未調整、内面ナデか。口縁部ナデ	淡黄色	1～3㎜の砂粒含	¾	摩滅が激しく調整不明確	044-03
289	—	R－44 包	土師器	椀	口径 14.4 器高 4.3 高台径 8.4	角形のしっかりした高台を張り付け、口縁端部は外反する。	内外面ナデ	淡黄色	0.5～1㎜の砂粒含	ほぼ完形		076-02
290	—	〃	〃	台付皿	口径 14.0 器高 3.7 高台径 8.0	大形の皿に細く高い高台を張り付ける。	底部外面未調整、他はナデか	〃	0.5～1㎜の砂粒含	¾	摩滅のため調整不明確	076-03
291	—	R－38 包	黒色土器B類	椀B	口径 16.0 器高 5.4 高台径 8.6	大椀をもつ体部で、口縁端部内面に沈線を巡らす。	内外面ヘラミガキか	灰色	2～3㎜の砂粒多含	¾	外面の炭素吸着不十分	065-04
292	—	L－21 包	瓦器	椀	口径 15.7 器高 5.8 高台径 6.0	厚い角形の高台を張り付け、口縁端部内面に沈線を巡らす。	外面三分割のヘラミガキ、内面平行ミガキ	暗灰色	精良	½		045-04
293	—	P－42 包	〃	〃	口径 14.4 器高 4.4 高台径 4.9	口径に比して器高が低い偏平な形態で、口縁端部内面に沈線を巡らす。	外面未調整、内面横位のヘラミガキ	〃	〃	½	炭素吸着がない部分が大きい。	045-03
294	—	R－43 包	静観陶器	〃	高台径 6.1	敷瓦面に薄い段をもつ高台を張り付ける。	内外面ロクロナデか	黄緑色	〃	½	硬質で、底部外面は施釉が不十分である。	064-03
295	—	R－45 包	須恵器	鉢	口径 10.8 器高 3.2	やや偏平な半球状を呈する。天井部と口縁部の境の隆々、口縁端部内面の段は消滅する。	天井部外面未調整、口縁部との境近くを敲く一周ロクロケズリ、他はロクロナデ	灰色	5㎜の砂粒含	ほぼ完形	ロクロ右回転	044-02
296	—	P－35 包	〃	〃	口径 17.3 器高 1.7	口径が大きく、中央部が落ち込む偏平な形態であるが、口縁端部内面にかえりが残る。	天井部内面ロクロケズリ、天井部内面ナデ、他はロクロナデ	〃	0.5～2㎜の砂粒含	¾	ロクロ右回転歪みが激しい	075-05
297	—	〃	〃	杯	口径 12.6 器高 4.2	偏平な形態で、口縁端部内面に弱い段が残る。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	暗灰色	0.5～4㎜の砂粒含	¾	ロクロ右回転	076-04
298	—	S－35 包	〃	〃	口径 16.6 器高 4.5 高台径10.3	口径に比して器高が低い偏平な形態で、口縁端部は若干外反する。	底部外面ナデ、他はロクロナデ	灰色	1～4㎜の砂粒多含	¾		065-05
299	—	R－56 包	〃	〃	口径 17.0 器高 4.3 高台径11.3	偏平な形態で、口縁端部は大きく外反する。	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	〃	1～2㎜の砂粒含	¾	ロクロ右回転	076-01
300	—	R－44 包	〃	鉢	—	球形の対部に大きく外反する口縁部をもち、円形の孔口を穿ける。	底部外面ロクロケズリ後ナデ、他はロクロナデ	〃	1㎜の砂粒若干含	口縁部欠損	口縁部外面に波状文と沈線、体部外面に櫛描刺突文と沈線を施す。	045-01

番号	遺構	位置	器種	器形	法量(cm)	形態の特徴	成形・調整の特徴	色調	胎土	残存度	備考	登録番号
301	—	包	須恵器	壺	—	壺形の体部であるが、やや胴の張る形態で、注口は若干発起する。	底部外面ナデ、他はロクロナデ	灰色	1mmの砂粒含	口縁部欠損	体部外面に2条の沈線を巡らし、その間に刺突文	045-02
302	—	R−45 包	〃	甕	口径 18.0	壺形に近い体部に短かいコ縁部が付く。	外面タタキ、内面あて道具痕が残る。口縁部ヨコナデ	〃	0.5mmの砂粒含	¼	外面自然釉が若干かかる。あて道具は帯状の特殊なもの	082-01
303	—	Y−62 包	〃	〃	口径 21.2 器高 41.3	大形で、胴の張る体部に外反する口縁部が付き、縁部は外に翼をもつ。	外面タタキ、内面一部に同心円文を一部残すもののナデ	〃	〃	体部若干欠損		090-01
304	—	Q−43 包	白磁	椀	口径 14.0	口縁端部は外に折り返し玉縁状を呈する。	ロクロナデか	灰白色	精良	½	釉色は淡灰黄色	044-06
305	—	J−22 包	木製品？	火付木	長 16.5	木を割りこんだもので、枠に加工を施していない。	—	淡茶色		完形	先端が焼けている	086-02
306	—	R−45 包	土製品	土馬	-	刺突文で馬のたてがみを表現し、口はヘラで刻む。	ナデ	灰白色	2mm以下の砂粒含	頭部のみ残存		064-06
307	—	K−46 包	石製品	子持勾玉	残存重 49.4g	先端に口を表現した様な刻みが観察される。		淡緑色	緑灰岩	½	縦に半截されている。故意に破壊か。	071-02
308	—	T−31 包	〃	〃	残存重 46.0g	内側に2条の線刻が認められる。		常灰色	滑石	〃	故意に破壊か。	071-04
309	—	M−28 SD1	〃	管玉	0.5g	細い円筒状を呈する。	—	赤褐色	緑色泥岩	完形		071-07
310	—	R−47 包	〃	携帯用砥石？	残存重 7.4g	直径2mmの穴孔を穿ける。	—	淡灰色	結晶凝岩	小片		071-03
311	—	X−63 包	〃	石錘	重 4.8g			黒灰色	サスカイト	完形	未製品	084-05
312	—	R−38 包	〃	〃	重 31.7g	—	—	〃	〃	〃	未製品	064-04
313	—	V−59 包	〃	石錘	重 258g	長球状で、楕状に一周記める。	—	灰白色	花崗岩	〃		084-04
314	—	〃	〃	擂石	径 約12.0	やや扁平な球形を呈する。	—	〃	〃	½		077-02
315	—	V・61 包	〃	砥石	長 約8.0	六角柱状を呈する。	—	淡灰色	砂岩	〃	おそらく六面とも使用されているものと思われる。	086-01
316	—	Q−46 包	石製品？	—	長 14.4 幅 7.0	自然石	両面ともなめらかに磨く	暗灰色	変成岩系	完形		077-01
317	—	O−39 包	石製品？	—	長 18.8 幅 5.0	下からの打撃により周縁の一部を剥離させ、約文字形を呈する。	両面をなめらかに磨く	暗灰緑色	変成岩	完形		072-01

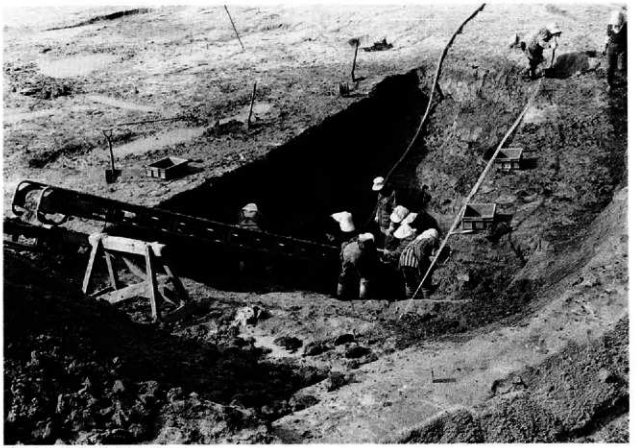
調査前風景

東区全景（西から）

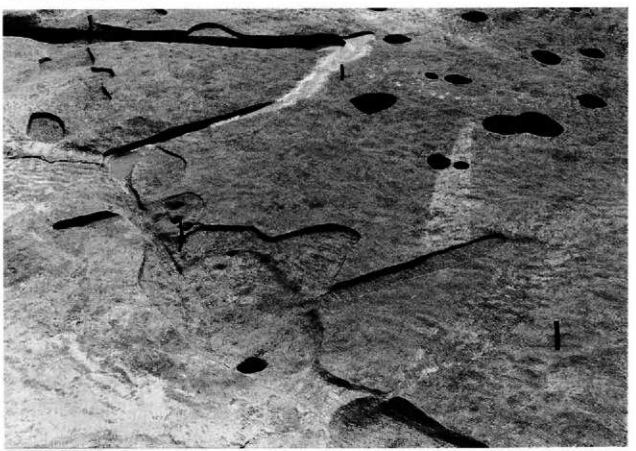
図版 2

西区全景（東から）

ＳＤ301（東から）

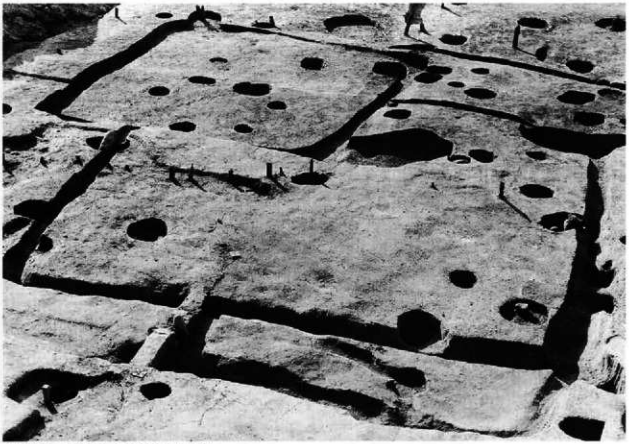


ＳＤ304　調査風景（北から）



ＳＨ303（北から）

図版 4



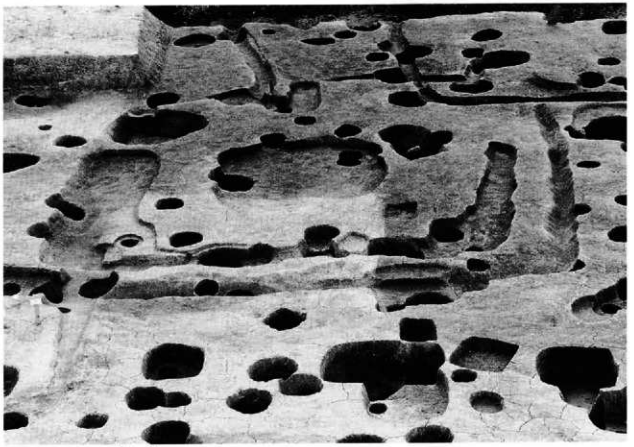
ＳＨ303，ＳＨ308，ＳＨ309（北から）

ＳＨ312（東から）

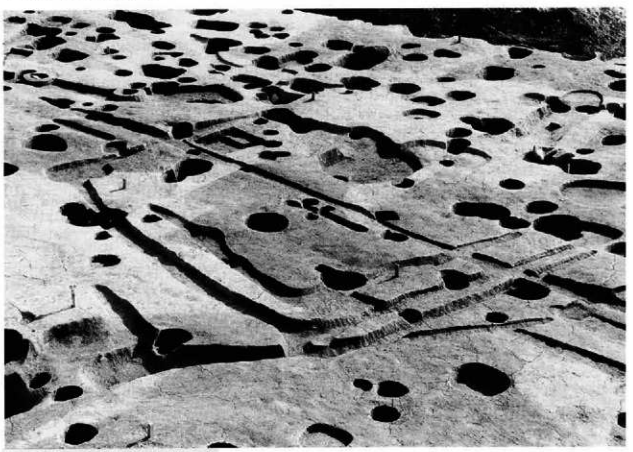
ＳＨ314（北から）

ＳＨ315，ＳＫ302（北から）

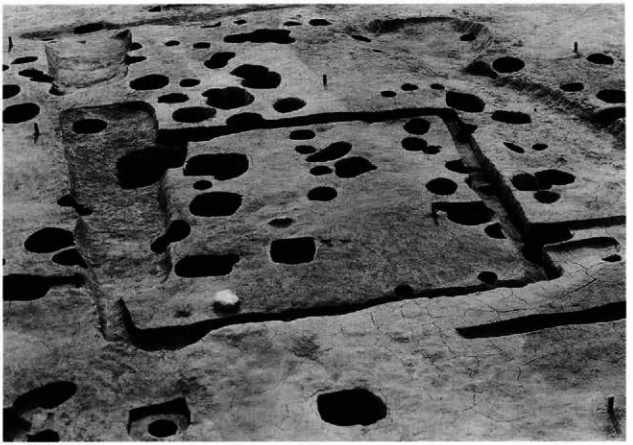
図版 6



ＳＨ320，ＳＨ321（北から）



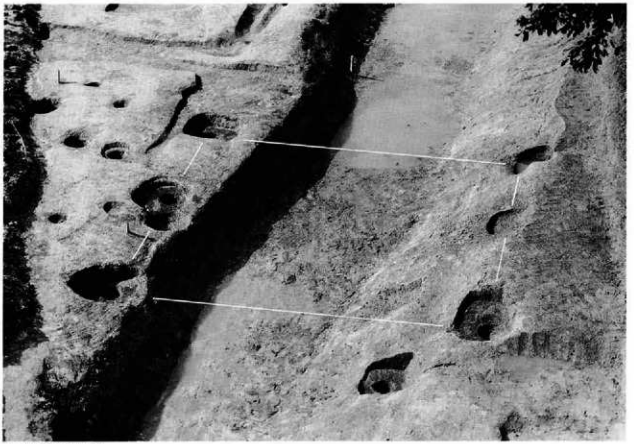
ＳＨ325，ＳＨ326，ＳＨ327（北から）



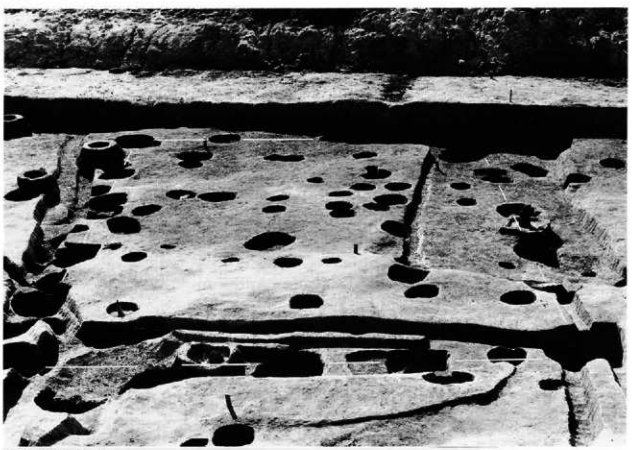
ＳＨ329（北から）

ＳＨ330，ＳＨ331，ＳＨ333，ＳＨ334，ＳＨ335（南から）

図版 8



S B302（東から）



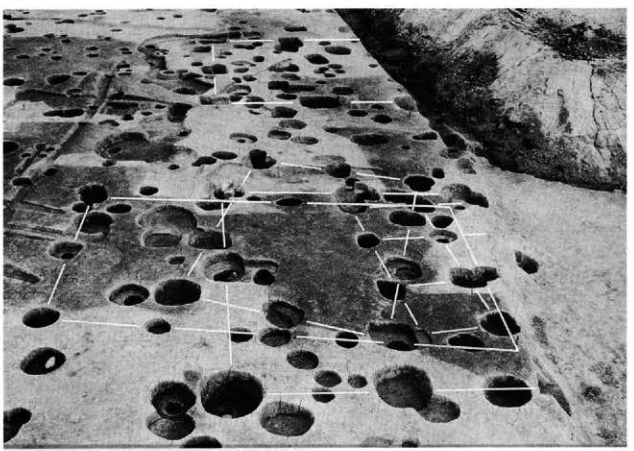
S B313（北から）

S B318, S H316, S H317 (北から)

S B321, S B322 (北から)

図版 10

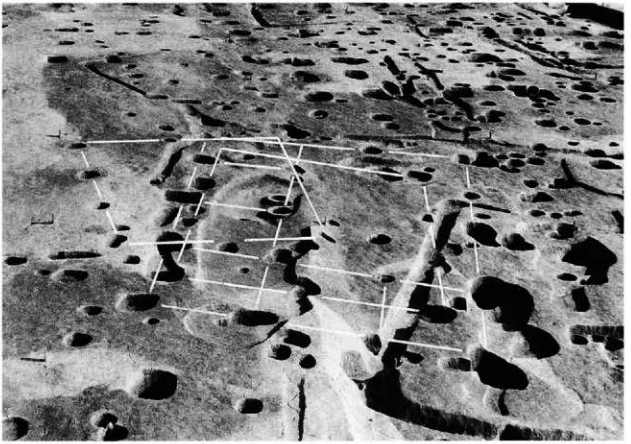
S B337, S B338（西から）



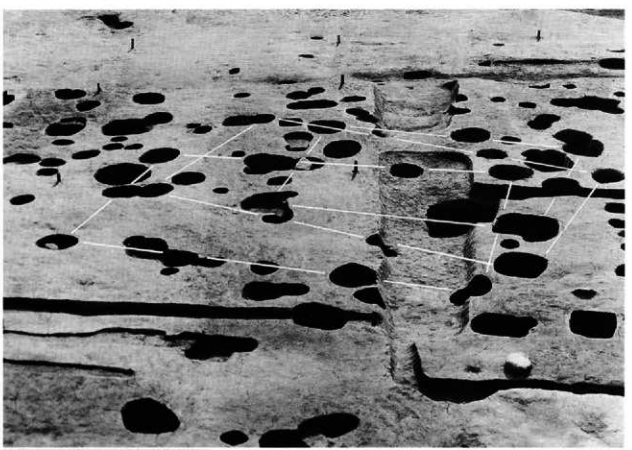
S B338, S B339, S B340, S B341, S B343（西から）

S B311, S B312（東から）

S B307, S B308, S B357, S A303, S A304, S A315



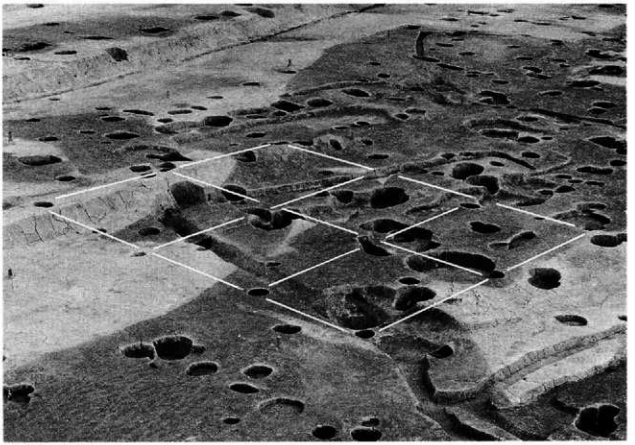
S B329, S B330, S B331(西から)



S B345, S B346, S B347 (北から)

S B309（東から）

S B306, S A302（西から）



S B333（北から）

S A312，S D331（北から）

ＳＫ309（南から）

ＳＤ302（東から）

ＳＫ317（東から）

ＳＫ322（東から）

ＳＸ301（西から）

ＳＨ307竈（西から）

図版 16

9

23

74

15

17

11

33

34

12

16

出土遺物（1：3）

24

4

29

38

43

45

40

出土遺物（1：3）

図版 18

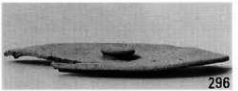
89

132

133

295

63


296

90

156

159

92

109

91

161

297

298

152

123

299

108

64

66

300

出土遺物（1：3）

158

157

147

出土遺物（1：3）

76

127

51

95

93

94

125

99

100

137

119

126

106

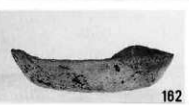
128

135

105

150

102


182

163

出土遺物（1：3）

78

111

165

79

151

84

166

233

244

285

289

236

72

237

267

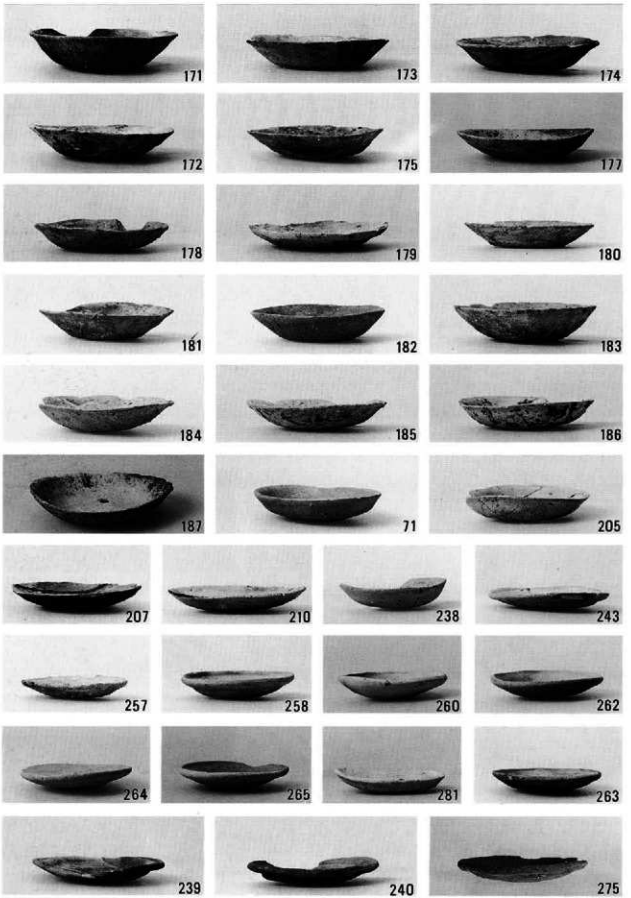
245

254

279

253

出土遺物（1：3）


171
173
174
172
175
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
71
205
207
210
238
243
257
258
260
262
264
265
281
263
239
240
275

出土遺物（1：3）

192

214

195

199

200

198

201

282

234

216

266

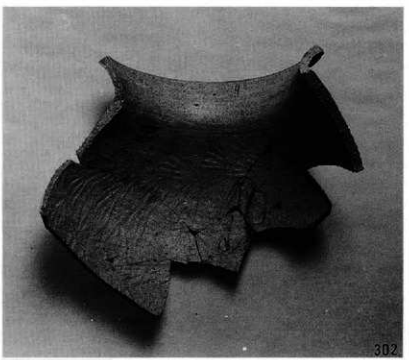
283

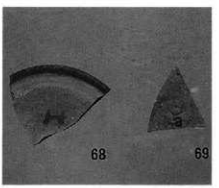
293

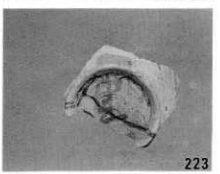
247

246

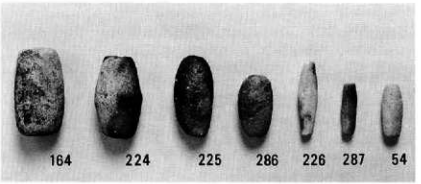
248


302


68 69


223

出土遺物（1：3）


164
224
225
286
226
287
54

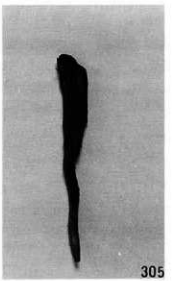
118

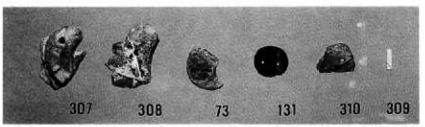
306

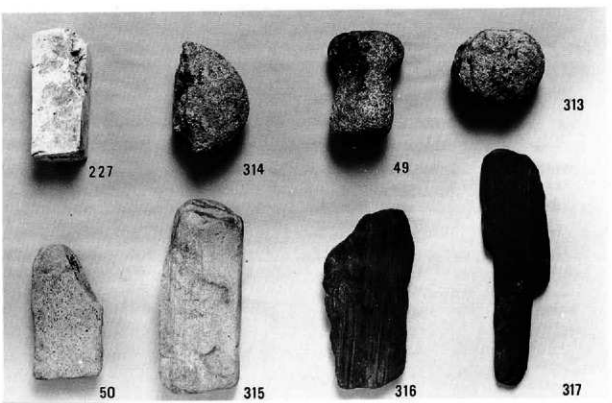
228

312

311


305


307
308
73
131
310
309


227
314
49
313
50
315
316
317

出土遺物（1：3）

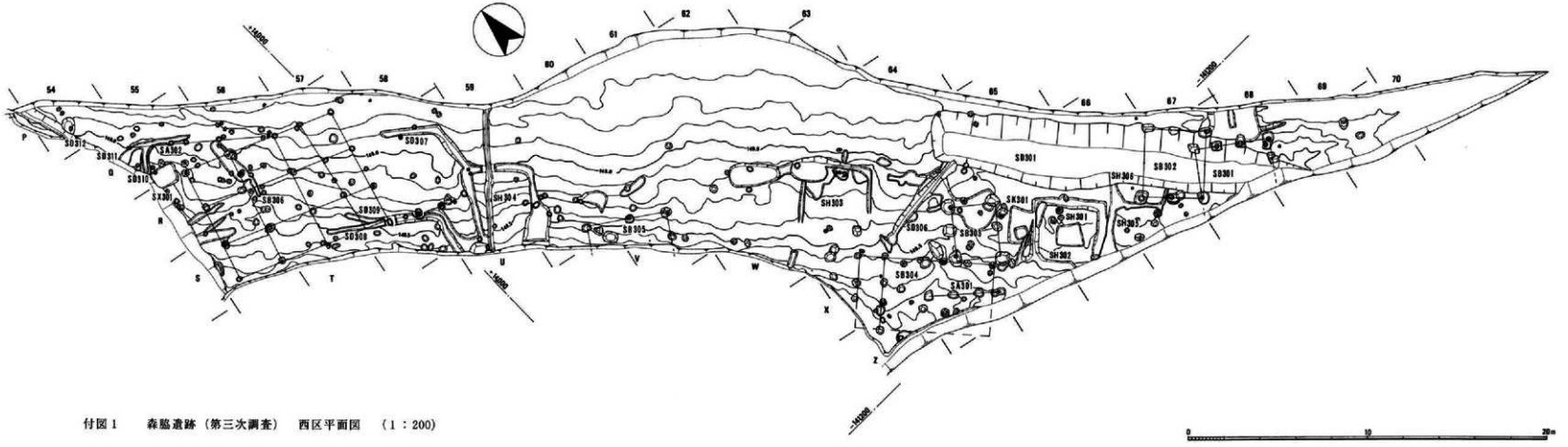
平成3(1991)年3月に刊行されたものをもとに
平成18(2006)年12月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告94－4

森脇遺跡(第三次)発掘調査報告

1991年3月

編　集　三重県教育委員会
発　行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　光出版印刷株式会社



付図１　森脇遺跡（第三次調査）　西区平面図　（１：200）

付図２　森脇遺跡（第三次調査）　東区平面図　（１：200）